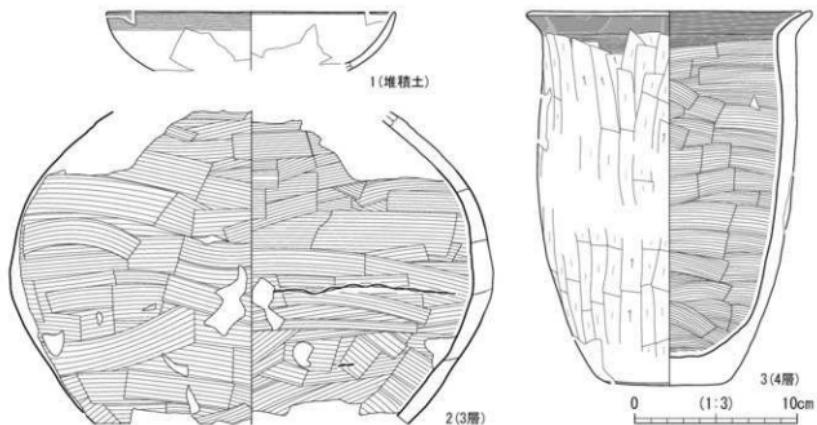


第161図 SX3性格不明遺構



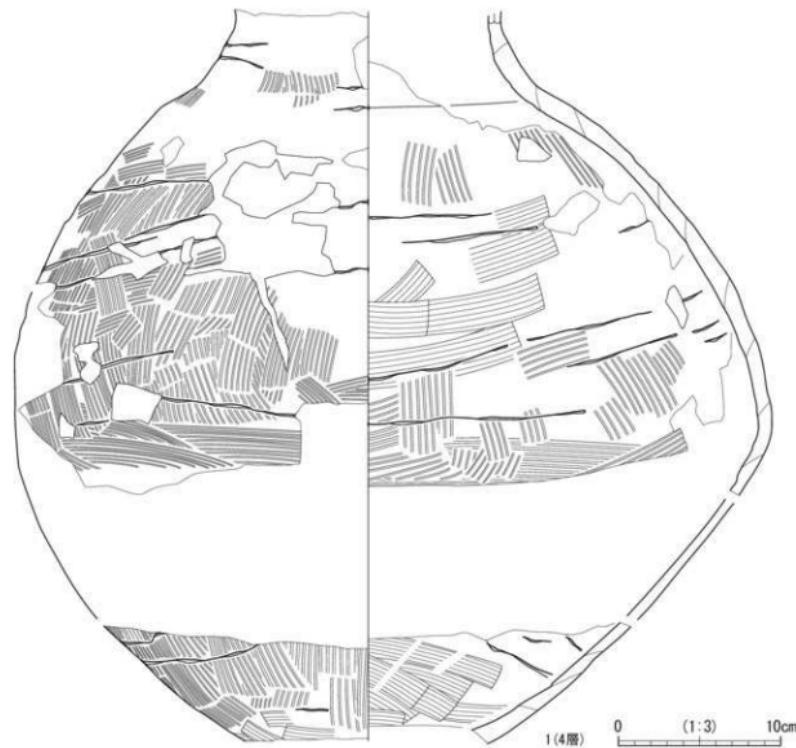
回収 番号	登録 番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	法面 (cm)	外削調整	内削調整	備考	写真 回数	
1	C-220	N区	SX3	堆積土	土器部	环	口縁-全体	17.8	-	0.13 ± 7		61	
2	C-222	N区	SX3	3層	土器部	束	-	(19.6)	±0.17		外削被熱	61	
3	C-221	N区	SX3	4層	土器部	束	口縁-底	17.6	7.6	23.1	口縁-3.2cm、底-1.0cm 側-1.0cm、底-1.0cm	外削被熱剥離、被熱	61

第162図 SX3性格不明遺構出土遺物(1)

この粘土は被熱による硬化が著しく、内部には炭化物や焼土の堆積が顕著であることから、粘土の内部は火が焚かれた空間(以下、「燃焼部」と記載する)に相当し、その粘土が開口する長軸北西側は焚口に相当するものと考えられる(以下、「焚口」と記載)。粘土の上面は、長軸南東側(以下、長軸南東側を「(燃焼部)奥壁」と記載する)に高まりを持ち、焚口に向かって緩やかに低くなる。

燃焼部中央からは、底部を欠く胴部最大径45cm程を測る大型の土師器壺(第163図-1)、焚口からは器高23cm程の寸胴な土師器壺(第162図-3)が、共に押し潰されたような状態で並んで出土した(第161図左)。器面には共に被熱の痕跡と剥離が認められ、前者においてはそれが顕著である。

こうした土師器壺2点の出土状況、遺存状況などを併せると、本遺構検出時の土師器壺は原位置を留めているものと考えられ、それは本遺構との共伴性および使用時(機能時)の状態で廃絶したことを意味するものと考えられる。



第163図 SX3性格不明遺構出土遺物(2)

回収番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	口径 直径 底径	法量 底径 底深	外側調整	内側調整	備考	写真 図版
1	C-223	B区	SX3	4層	土師器	壺	口縁～胴	-	(49.7) +(7.4)	[口縁:32.9cm <sup>2</sup> , 底:5.8cm→胴下端:4.9cm]	[口縫:不明, 底:5.8cm→胴上半:5.8cm]	内外面剥離、被熱剥離 地上找元	61

本遺構の構築時期については、郡山Ⅱ期官衙外溝と考えられるSD31の堆積土で底面から50cm程上位に堆積する3層の上面から検出されていること、SD31堆積土1層の最上位には10世紀第1四半期の降灰とされる十和田a火山灰(To-a)と目される灰白色火山灰が含まれていることから、8世紀第1四半期から10世紀第1四半期までの時間幅に収まるものと考えられる。

本遺構からの出土遺物として、土師器壺1点・甕3点を掲載した(第162・163図)。いずれも被熱の痕跡が認められるもので、本遺構との関連が考えられる。

第162図-3および第163図-1は、上記した燃焼部内から出土したものである。第162図-1は内湾する体部と短く直立気味となる口縁部の境界に不明瞭な稜を持つ器形を呈する。

#### (8) 遺構外出土遺物(第164~169図)

古代から中世までの遺構・遺物の残存状況確認および記録保存を目的としたI層からIV層上面までの調査では、古代面までが大きく削平されているVI区を除き、各調査区から遺構に帰属し得ない遺物が多く出土している。遺構外から出土した遺物の大部分は、本遺跡の主要時期の一つである古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の年代幅に収まる土師器や須恵器であり、これに平安時代末頃の銭貨や中世以降の陶磁器などが少量加わり、遺物の内容や特徴は今次各調査区から検出された遺構の帰属年代とはほぼ一致する。

これらの中から、総数72点(I区:44点、II区:7点、IV区:14点、VII区:6点、表探:1点)の遺物を掲載した(第164~169図)。以下、今次調査における遺構外出土遺物について、調査区毎に記載する。この掲載点数の内訳は、各調査区における遺構外出土遺物の内容的な傾向を反映したものではなく、復元困難可能なものや器形等に特徴がみられるものを中心としている。

なお、本遺跡は貨物ヤード跡地ということもあり、旧国鉄時代に因む文物が多く表探されている。それらは本書に掲載していないものの、本遺跡の土地利用変遷、昭和史ならびに鉄道史を理解する上において意義深いものといえる。

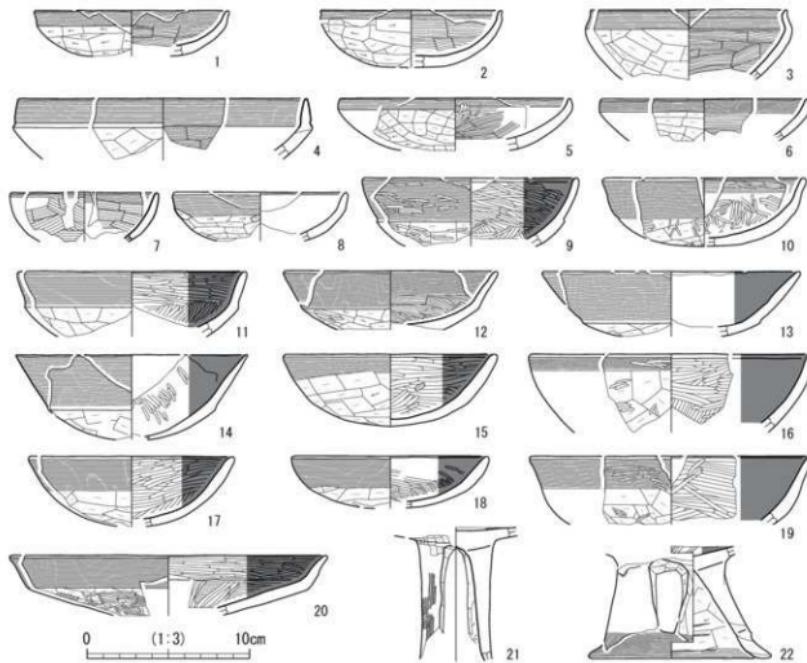
##### a. I区 遺構外出土遺物(第164~166図)

土師器壺19点・高壺3点・鉢1点・甕5点、須恵器蓋・瓶or壺・提瓶・器種不明を各1点、鉢・甕を各2点、土製支柱2点、金属製品6点を掲載した。

調査区内での凡そ出土地が判るものはすべて調査区南半部南側から出土したもので、当該地域は多くの堅穴住居跡や区画施設と考えられるSD17が構築されている箇所に相当する。また、これらの中には、須恵器のほか、いわゆる鬼高系や北武藏型に類似する特徴を有する壺が多くみられる。いずれも遺構に帰属し得ないものであるとはいえ、このような他の調査区にはない遺物内容の偏りは、Ⅱ期官衙外郭大溝と同外溝(本書所収SD31)の間に位置するI区の在り方を検討する上で示唆的なものといえる。

上記した土師器壺(第164図1~19)のうち、1~3は、いわゆる北武藏型に類似する特徴を有するものである。外面の口縁部と体部の境界に段ないし稜を持ち、口縁部形態は短い「S」字状を呈する。体部から底部は1~2が扁平な丸底を呈し、3は半球形状を呈する。4~6は、いわゆる鬼高系に類似する特徴を有するものである。直線的な口縁部の外側がわずかに内傾するもので、4は口縁部が体部のやや内側に入り込む器形を呈する。また、4~6は黒色塗仕上げされるものである。7~8は扁平な塊形を呈する小型なもので、前者は内外面共に体部にヘラナデが施された後に赤彩される。今次調査において赤彩が認められる土師器はこの一点のみで、赤彩の原料が何なのかは分析を実施していないため不明であり、なお検討を要するものである。8は強いヘラケゼリにより外面の口縁部と体部の境界に比較的明瞭な稜が形成される。

9~14は、外面の口縁部と体部の境界に段もしくは稜を持つものである。扁平な丸底から内湾して口縁部に至

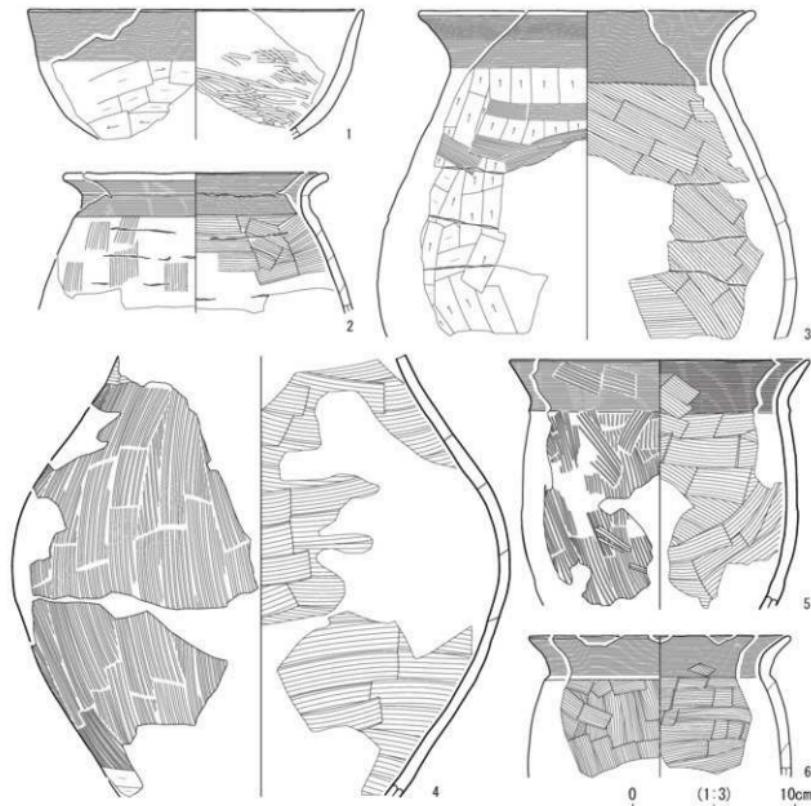


回収 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部京	法面 径 深さ 高さ cm	外面部型	内面部型	参考	写真 回数
1	C-238	IIK	14	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(2.1)	-	G.高	「横三つ目」、「横二つ目」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
2	C-226	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(1.3)	-	3.5	「横三つ目」、「横二つ目」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
3	C-242	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(2.2)	-	4.3	「横三つ目」、「横二つ目」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
4	C-236	IIK	-	-	土器部	环	Ⅰ輪~底	(7.8)	-	0.7	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
5	C-189	IIK	-	-	土器部	环	Ⅰ輪~底	(4.2)	-	0.2	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
6	C-231	IIK	-	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(2.7)	-	2.6	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
7	C-237	IIK	-	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(9.2)	-	3.0	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
8	C-241	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(10.8)	-	3.0	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
9	C-233	IIK	H4	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(3.4)	-	0.2	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
10	C-240	IIK	14	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(2.6)	-	4.2	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
11	C-227	IIK	14	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(4.0)	-	4.0	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
12	C-239	IIK	H4	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(3.3)	8.6	6.6	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
13	C-230	IIK	H4	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(6.0)	-	0.0	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
14	C-225	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(4.4)	-	5.2	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
15	C-232	IIK	-	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(3.3)	-	4.5	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
16	C-234	IIK	-	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(7.6)	-	0.8	「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」 「横三つ目」、「体~外口」	62
17	C-224	IIK	14	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(12.2)	-	3.2	「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
18	C-228	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(12.6)	-	4.3	「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
19	C-235	IIK	-	Ⅲ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(7.2)	-	4.2	「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
20	C-243	IIK	H4	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	(9.8)	-	0.7	「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」 「横三つ目」、「体~底」	62
21	C-244	IIK	14	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	-	-	0.0	环底~横三つ目、 环底~横三つ目、 环底~横三つ目、 环底~横三つ目	62
22	C-245	IIK	14	Ⅱ期	土器部	环	Ⅰ輪~底	-	(12.3)	6.9	环底~横三つ目、 环底~横三つ目、 环底~横三つ目、 环底~横三つ目	62

第164図 I区遺構外出土遺物(1)

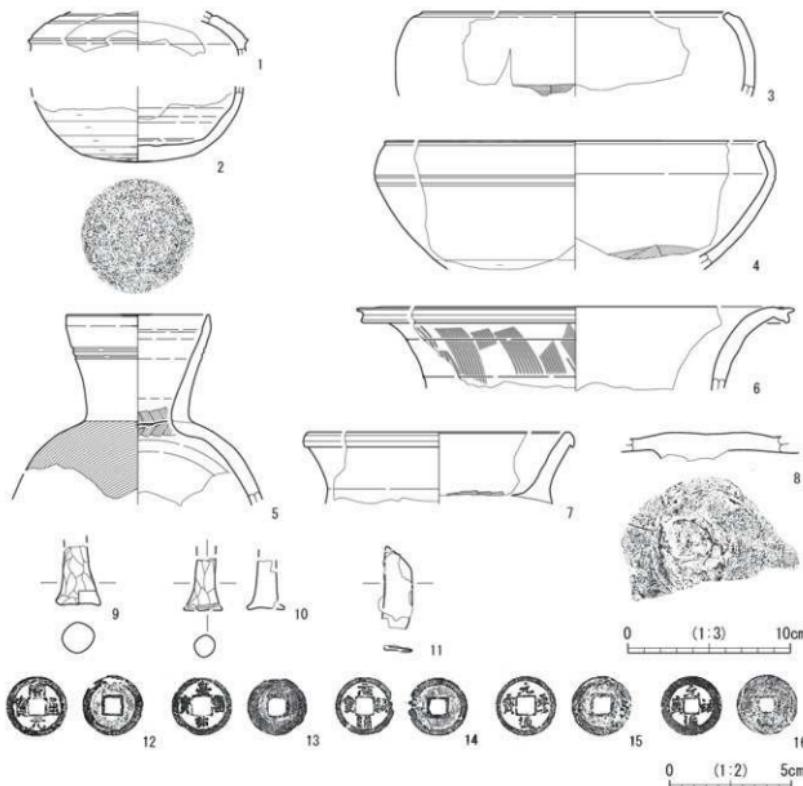
る器形を呈するものが多いなかで、14は比較的直線的に外傾する見込みの深いもので、口縁部上端と底部の器厚が薄くなる点が特徴である。15～19は段や棱を持たずに底部から内湾して口縁部にいたるものである。15～18は底部に比べて口縁部が分厚くなるもので、15と18については器高に対する口径の比率がほぼ同一となる。

土師器高環3点(同図20～22)のうち、坏片資料の20は体部が直線的で大きく外傾し、鈍角に角度を変える短い口縁部へといたり、内外面共に口縁部と体部の境界に棱を持つ器形を呈する。21は外面のハケメ調整が特徴



第165図 I区遺構出土遺物(2)

団数 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部狀	法面 径 cm	法面 底 徑 cm	器高 cm	外側調整	内面調整	備考	写真 図版
1 C229	HK	II-4	Ⅲ層	土師器	鉢	口縁～底	(20.8)	-	(8.0)	口縁:33°, 体:~25°	口縁:33°, 体:~25°	内面削薄	62	
2 C253	HK	-	-	土師器	鉢	口縁～側	(16.0)	-	(8.6)	口縁:33°, 体:~25°	口縁:33°, 体:~25°	内面削薄	62	
3 C247	HK	-	-	土師器	鉢	口縁～側	(20.4)	-	(9.2)	口縁:33°, 体:~25°	口縁:33°, 体:~25°	内面削薄	62	
4 C251	HK	-	-	土師器	鉢	側	-	(27.2)	側:33°, 底:~25°	側:33°, 底:~25°	内面削薄	62		
5 C252	HK	-	-	土師器	鉢	口縁～側	(18.2)	-	(5.4)	口縁:33°→~25°, 側:33°→~25°	口縁:33°→~25°, 側:33°→~25°	外面削薄	63	
6 C246	HK	-	Ⅲ層	土師器	鉢	口縁～側	(16.2)	-	(8.7)	口縁:33°, 側:~25°	口縁:33°, 側:~25°	内面削薄	63	



0 (1:3) 10cm

0 (1:2) 5cm

国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			外周調整	内面調整	備考	写真 図版
								長	幅	厚				
1	E-076	IK	-	-	須恵器	盃	天井	(2.7)	-	-	070調整+底面2条	070調整	63	
2	E-075	IK	14	Ⅲ層	須恵器	碗	銅~底	7.0	(4.6)	回転(1992.9)	070調整	63	内外面漆付有、E-072と同・一部?	
3	E-077	IK	-	-	須恵器	鉢	口縁~底	(9.0)	-	-	070調整+底~2.5	070調整	63	外周漆上部
4	E-078	IK	-	Ⅲ層	須恵器	鉢	口縁~底	(23.6)	-	-	070調整+底~2.5、脚下~2.5	070調整+底~2.5	63	脚下~2.5
5	E-074	IK	-	-	須恵器	提梁	口縁~底	8.8	-	-	070調整+口縁~2条、(1.8)~脚	070調整+脚~2.5	63	内外面漆付有、E-072と同・一部?
6	E-079	IK	-	-	須恵器	鉢	口縁~底	(27.0)	-	-	(5.1) 脚~2.5+口縁~2.5	070調整	63	脚~2.5
7	E-080	IK	13	Ⅲ層	須恵器	盃	口縁	(16.2)	-	-	070調整	070調整+底~2.5	63	内外面漆付有、E-072と同・一部?
8	E-081	IK	H-4	Ⅲ層	須恵器	不明	不明	-	-	-	070調整+底~2.5	070調整	63	

国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			重量(g)	特徴-備考	写真 図版
								長	幅	厚			
9	P-015	IK	H-4	Ⅲ層	土製品	支脚	(3.6)	2.8	2.0	(4.9)	指洞調整	63	
10	P-016	IK	-	Ⅲ層	土製品	支脚	(3.2)	2.0	1.6	(7.3)	指洞調整	63	

国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			重量(g)	特徴-備考	写真 図版
								長	幅	厚			
11	N-016	IK	-	-	金属製品	刀子	(4.5)	(1.7)	(0.2)	(4.9)		63	
12	N-026	IK	櫻丸	-	金属製品	鍔賀	2.8	-	-	2.6	元永安宝(4~62年初期), N-023と接合して出土	63	
13	N-028	IK	-	表探	金属製品	鍔賀	2.4	-	-	(2.4)	金輪通宝(4~1056年初期), N-027と接合して出土	63	
14	N-023	IK	櫻丸	-	金属製品	鍔賀	2.4	-	-	(2.0)	元永安宝(4~62年初期), 西来銘, N-26と接合して出土	63	
15	N-025	IK	櫻丸	-	金属製品	鍔賀	2.4	-	-	2.6	元昌通宝(4~1066年初期), 西来銘, 銀片と接合して出土	63	
16	N-027	IK	-	表探	金属製品	鍔賀	2.4	-	-	2.5	元祐通宝(4~1086年初期), 西来銘, N-028と接合して出土	63	

第166図 I区遺構外出出土遺物(3)

的な2窓の透かしを持つ長脚の脚部破片で、22は外面に粘土が上塗りされる三方に透かしを有する短い脚部である。第165図-1は壺を大型化した土師器鉢で、内外面共に摩耗しているものの外面の口縁部と体部の境界にはわずかに形成された段が観察される。

土師器壺(同図-2～6)はいずれも破片資料であるが、5を除く4点が胴部に最大径を持つ。その中でも、外面の口縁部と胴部の境界に段を持たず、胴部上位に横位のナデが施される3、同じく横位のヘラミガキが施される4について、最大径が位置する胴部中位の大きな張りも含め、やや異質なものである。

須恵器蓋(第166図-1)は天井部に2条の沈線が施される。須恵器瓶or壺とした同図-2は内面には漆の付着が認められ、胎土の特徴も似る第167図-4(II区遺構外出土)と同一個体の可能性を有するものである。須恵器鉢2点(同図-3・4)は共に外面口縁部上端にわずかな窪みを持つもので、4は屈曲する体部と口縁部の境界に沈線が施される。同図-5は口縁部と頭部の境界に2条の沈線が施される須恵器壺である。同図-6は内外面の色調が共に浅黄橙色、断面が褐色を呈する軟質な須恵器壺で、頭部はロクロ調整の前段階にハケメ調整される。口縁部はラッパ状に大きく外反し、中央が窪む口唇部はほぼ直横を向く。また、内面口縁部には沈線状の窪みを持つ。同図-7の須恵器壺は口縁部に頸を持つ肩の張りが顯著なもので、SI3床面およびIV区遺構外から同一個体破片が出土している(第59図-2、168図-8)。同図-8は器種不明の須恵器破片で、器種・器形に加え、内外面の判別もし難いものである。柱状の凸部分は折損した状況が観察される。図は凸面の拓影と断面図を示しているが、写真図版63-10には両面と断面(側面観)の写真を掲載した。

土製品は2点掲載した(同図-9・10)。形状や整形技法からともに小型の土製支脚としたものの、法量的にみて实用性に乏しく、他の土製品の可能性も考えられるものである。

金属製品は6点掲載した。同図-11は厚さ0.3mmと薄い刀子の刃部片である。同図12-16には貨幣を掲載した。いずれも中国銭で、初鋤年代は7世紀前半から11世紀後半代と幅広いものである。そのなかで、初鋤年代が本遺跡の主要年代と合致する12は注視されるが、約300年にわたる流通年代のどの時期に各遺跡内にもたらされたのかは不明である。また、12・14、13・16は、それぞれ密着した状態で、また15についても粉砕した状態の錢貨片(非掲載)と密着した状態で出土している。

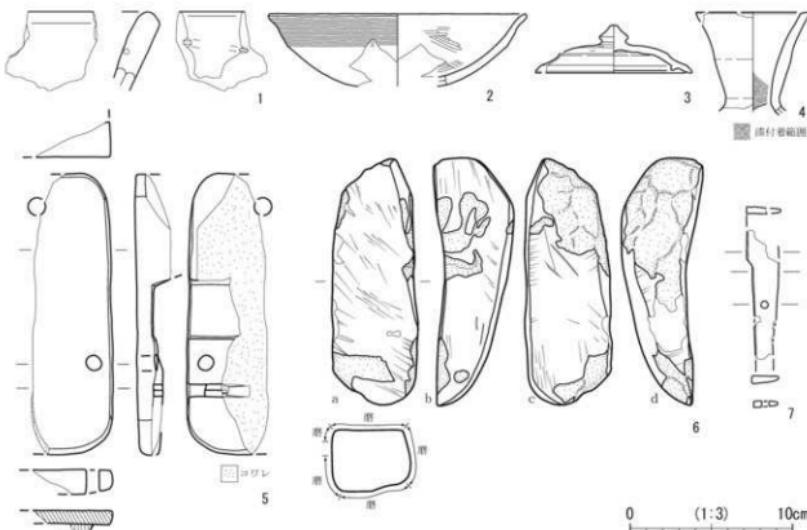
## b. II区遺構外出土遺物(第167図)

土師質土器鉢?、土師器壺、須恵器蓋・瓶or壺、木製品類、石製品、金属製品を各1点掲載した。1は在地産土師質土器の口縁部破片資料で、外面に被熱の痕跡が認められる。火鉢と思われるが判然としない。断面に径3mmの孔が2箇所に観察されるが、それらが貫通孔なのかは不明である。2は外面の口縁部と体部の境界に不明瞭な窪をもつ土師器壺である。3は内面にカエリを有する須恵器蓋で、天井部には宝珠状のつまみが付ぐ。瓶or壺とした4の内面頭部には漆の付着が観察され、胎土の特徴も似る第166図-2(I区遺構外出土)と同一個体の可能性を有するものである。

5は撫亂から出土した下駄であるが、中世以降の製作技法によることから本項に掲載した。甲の形状は圓丸長方形を呈するものと推定され、全体の半分程を欠くため左右の判別には至らない。前歯は連歯、後歯は二枚合わせの差歎によるもので、差歎の踵側には長さ2mmの枘が観察された。樹種は共にブナ、木取りは甲および前歯が追極目、差歎は極目である。

6は角柱状の自然縁を素材とした砥石である。面取り加工が施されているものの、a～d全面に自然面が残存する。使用痕跡は全面に認められ、下方向および右下がり方向が顯著である。このほか、a面の下端部両側縁およびc面中央左側縁には刃物痕が観察される。石材は石英安山岩質凝灰岩である。

7は刀子とした。柄に径5mmの孔が設けられるものである。



国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部京	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								口徑	幅	厚				
1	I-002	IIK	-	-	土師質 土器	鉢?	口縁	-	-	46.9	口縁調整	口縁調整	断面に径3mmの孔。 外周焼熱。 在庫品、瓦片	63
2	C-248	IIK	-	非層	土器	壺	口縁-体 (6.0)	-	-	45.5	口縁-32.5mm→55.5mm↑, 底-39.5mm↑	口縁調整	内外面削除	63
3	E-491	IIK	經風	-	須恵器	蓋	つまみ -13mm	0.6	-	2.9	口縁調整、天井-削除(4.4mm) 口縁調整→天井-つまみ	口縁調整	宝物状つまみ	63
4	E-082	IIK	-	-	須恵器	蓋or 口縁	口縁	0.0	-	46.3	口縁調整	内外面削除付着、 SI-073と同一件体?	63	
国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部京	法量(cm)	幅	厚	外側	内側	備考	写真 回数
5	L-003	IIK	經風	-	本質品類	下鉢	17.3	0.01	(2.2)	鉢底付定1.0cm(底)、0.9cm(側)。 前面削除、後面-表面仕上げせず。 後側の差高に径3.2mmの孔	アナ (甲-正面) 相田(正面)	相田(正面)	63	
国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部京	法量(cm)	幅	厚	重さ(g)	石材	備考	写真 回数
6	Kd-021	IIK	經風	-	石質品	砾石	15.3	5.2	4.3	466.66	石英安山岩質 大粗品、表面加工、柱状素材	63		
国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部京	法量(cm)	幅	厚	重量(g)	特徴-備考	写真 回数	
7	N-019	IIK	-	-	金銀製品	刀子	0.6	(1.7)	0.6	45.9	柄に径5mmの孔。	63		

第167図 II区遺構外出土遺物

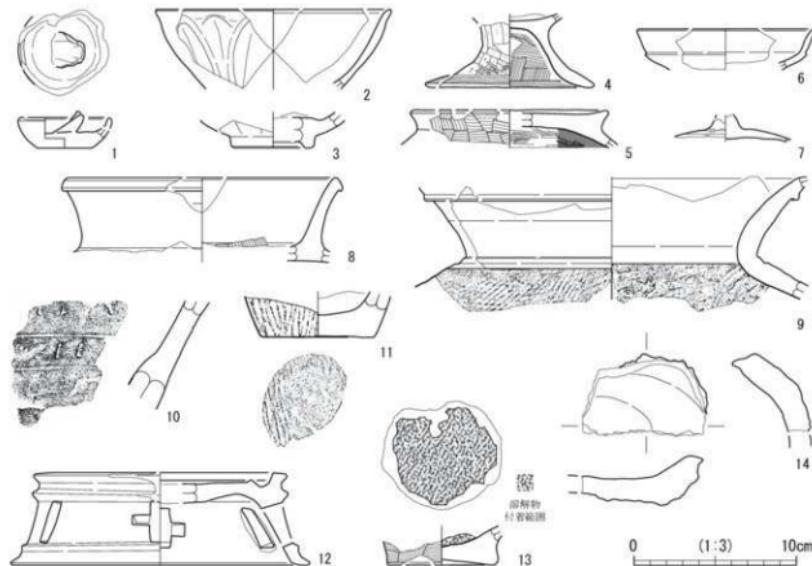
#### c. IV区遺構外出土遺物(第168図)

陶器灯明皿1点、磁器碗2点、土師器高杯・蓋を各1点、須恵器壺・蓋を各1点、同甕3点、壺?・円面鏡を各1点、土製品、金属製品を各1点掲載した。

1は18世紀以降の在地産陶器灯明皿で、内外面共に鉄軸が施釉される。2・3は共に中国龍泉窯産の碗である。中世の所産と考えられるSD27(IV区)の堆積土中から龍泉窯産の碗破片(非掲載)が出土しており、図示したいずれかが同一個体となる可能性がある。

土師器は計2点掲載した。4は脚部がいびつで短い高杯の破片資料である。5は天井径の大きい蓋で、内面天井部が黒色処理される。須恵器計7点掲載した。壺(6)は外縁の口縁部と体部の境界に段を持つ丸底の器形を呈する。蓋(7)は天井部に乳頭状のつまみを持つ。甕(8)は口縁部に頸を持つ肩の張りが顯著なもので、SI3床面およびI区

遺構外から同一個体破片が出土している(第59図-2、166図-7)。9は口縁部に頸を持つ大型品と推定され、外面の頭部と肩部の境界に持つ段に特徴を持つものである。10は横位の沈線と木口による列点刺突が互層に施される甕の頸部破片である。器厚から大型品と推定される。11は壺?とした。器厚に対して底径が小さいもので、外面の肩部下端から底部(面)に平行タタキメが観察される。12は全体の2/3を欠損する円面鏡である。直線的に内傾する脚部には凸帯が巡り、その直上には綫長の長方形と十字形の透かしが交互に推定3単位設けられる。透かし部周辺



団版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)		外面調整	内部調整	備考	写真 回数	
								口径	底径					
1	1-003	N/K	-	-	陶器	壺	口縁~底	(5.6)	3.4	2.3	底輪、底、側面未切	洪輪	在施用、16-1以降	64
2	J-002	N/K	-	-	陶器	壺	口縁~底	(1.6)	-	11.9	青筋輪、茎葉文	青筋輪	中国龍皇窯II中期	64
3	J-003	N/K	-	-	陶器	壺	体~高台	(6.2)	4.2	青筋輪、茎葉文	青筋輪	中国龍皇窯II中期	64	
4	C-255	N/K	-	-	土器器	壺	口縁~脚	(9.4)	4.5	2.5	脚詳、足~脚、輪、底2.5cm	環成、引手付、口縁なし、脚、2.5cm	64	
5	C-249	N/K	-	表探	土器器	壺	天井~脚	(12.2)	-	2.3	天井~脚、ハサフ	天井~脚付	内面黒色焼成	64
6	E-094	N/K	-	-	土器器	壺	口縁~底	(1.0)	-	6.7	口縁調整	口縁調整	64	
7	E-084	N/K	-	表探	土器器	壺	つまみ~天井	-	-	1.7	口縁調整、足~脚、脚付付	乳頭状つまみ	64	
8	E-093	N/K	複瓦	-	土器器	壺	口縁~脚	(6.6)	-	5.2	口縁調整	口縁、口縁調整、脚~ハサフ	内面白質焼付着、E-017-080之同一個体	64
9	E-095	N/K	-	-	土器器	壺	口縁~脚	-	-	7.5	(1脚~脚)口縁調整、足~脚、青筋文	口縁~脚、口縁調整、足~脚、青筋文	64	
10	E-096	N/K	-	-	土器器	壺	脚	-	-	6.7	口縁調整、口縁2条、 木口による列点刺突要	△付	64	
11	E-083	N/K	-	-	土器器	壺?	脚~底	-	(7.0)	(2.8)	脚、平行2.5cm、 底、平行2.5cm~2.5cm	口縁調整	64	
12	E-092	N/K	複瓦	-	土器器	円面鏡	脚~脚	(5.6)	(8.4)	5.7	口縁調整	透かしは長方形と 十字形が交互に 開口3年目(堅核3)、 後2年間は透かし4cm で留め付	64	

団版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	特徴・備考			写真 回数	
							長	幅	厚		
13	P-017	N/K	-	-	土器器	土器器要孔部剖面	法量(cm)	重量(g)	特徴・備考	64	
14	N-014	N/K	-	-	金製品	純形片	(6.2)	(7.4)	(2.2)	(106.5)	64

第168図 IV区遺構外出土遺物

にはヘラケズリが施されるが、透かしは型抜きにより設けられた可能性がある。硯側および海は逆台形状、堤は三角形状を呈する。陸は中央部に向かってわずかに窪むものの残存部には研磨されたような面は認められず、それが使用によるものかは判然としない。

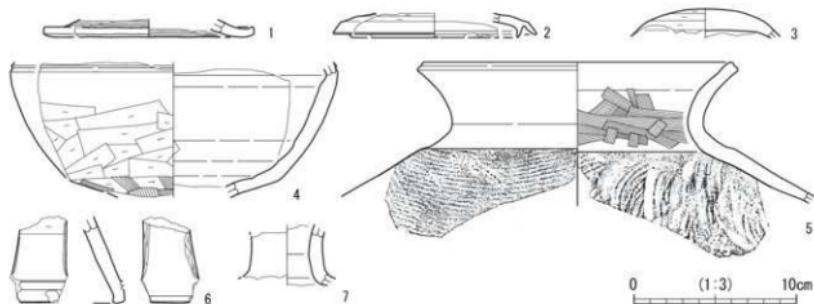
13は土師器壺の底部破片が転用されたものと考えられたため、土製品とした。外面は著しい被熱により変色している。内面には溶解物が一面に付着しており、それは羽口の先端に付着するものと酷似する。これらのことから、土師器壺の破片がとりべとして転用された可能性がある。14は楕形の鉄滓である。

#### d. VII区遺構外出土遺物・表探遺物(第169図)

VII区遺構外出土遺物として土師器高环1点、須恵器蓋2点・壺or鉢・壺・円面鏡を各1点、表探遺物として須恵器壺?1点を掲載した。

1は端面がほぼ垂直となる土師器高环の裾部破片である。2はカエリを有する須恵器蓋である。3は天井部に丸みを帯びる蓋としたが、壺底部の可能性がある。4は口縁部上半と底部最深部を欠く壺もしくは鉢の破片資料である。外面の口縁部と胴部の境界には沈線が施される。5は口唇部に窪みを持つ中型品と推定される壺の破片資料である。6は円面鏡の脚部破片である。IV区遺構外から出土した第168図-12と同様、凸帯が巡り、その直上に透かしが設けられるものである。裾はほぼ平坦で、わずかに内面側に入り込む。

7は表探されたもので、壺?とした須恵器の頸部破片である。内面には漆の可能性があるタール状物質の付着が観察される。



国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	部位	種別	器種	部位	法量 [cm]			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								口径	底径	厚さ				
1	C-250	東区	-	壁部	土師器	高环	蓋	-	(3.0)	(1.1)	口縫	口縫→ハサツ	64	
2	E-086	東区	-	-	須恵器	蓋	天井	(2.6)	-	(0.5)	口縫調整、天井削削(ハサツ)	口縫調整	外表面自然釉付着	64
3	E-087	東区	複数	-	須恵器	蓋	天井	-	-	(1.8)	口縫調整、天井削削(ハサツ)	口縫調整	64	
4	E-088	東区	複数	-	須恵器	壺or鉢	口縫~底	-	-	(0.3)	口縫調整	口縫調整	64	
5	E-089	東区	複数	-	須恵器	壺	口縫~底	(19.0)	-	(0.7)	口縫~底削削、底平行削(ハサツ)	口縫~底削削→底~ハサツ、底平行削(ハサツ)	64	
6	E-085	東区	複数	-	須恵器	円面鏡	脚	-	-	(6.3)	口縫調整、上端削削(ハサツ)	口縫調整	64	
7	E-090	不明	-	表探	須恵器	壺?	裏	-	-	(1.7)	口縫調整	口縫調整	透かし部 ハサツにて削削(ハサツ) 内面F+4民物質付着 (漆全)	64

第169図 VII区遺構外出土遺物・表探遺物

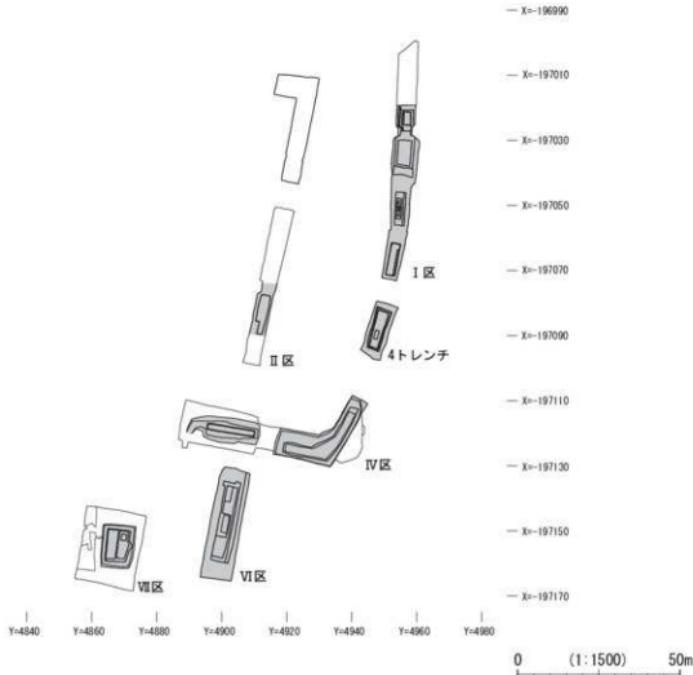
## 第5節 弥生時代以前の遺構と遺物(下層調査)(第170~234図)

第2章第3節において概述しているように、今次の発掘調査は昭和32(1957)年から昭和34(1959)年にわたり本遺跡西側にて断続的に実施された緊急調査(伊藤1958ほか)、および昭和57(1982)年度に遺跡北西部で2期にわたる古代の河川跡と遺物が確認された発掘調査(仙台市教委1983)以来のものである。このような経緯もあり、確認調査の段階から弥生時代以前の遺構・遺物の残存状況の確認を目的として下層調査を実施している(第1章、第3章参照)。

確認調査の結果から設定された各本発掘調査区においても同様であり、古代以降に帰属する遺構の調査終了後、搅乱等の影響が少なく、また古代の遺構検出面としたIV層上面以下が良好に残存していると考えられた範囲に下層調査区を設定し、弥生時代以前の遺構・遺物の残存状況の確認・記録を目的として調査を実施した(第170図)。ただし、VI区については搅乱の影響による古代面の消失が確認されたため、下層調査のみを実施している。

調査は古代の遺構確認面であるIV層上面からその下層へと層位的に掘り下げ、各層理面にて遺構や遺物の残存状況等を確認した。遺構が検出された場合は各遺構の精査に着手し、各基本層中から出土した遺物は層位毎に括して取り上げた。

その結果、I区V層上面からは土器埋設遺構、土壤墓、土坑が検出されたほか、I区VI層上面からは土坑、II区V層上面からはピットが検出された。また、IV層中においてはIVd層を主体として多くの遺物が出土したほか、IX



第170図 下層調査区配置図

発生時代以前の出土遺物 通稱・層位別の数量・重量一覧表

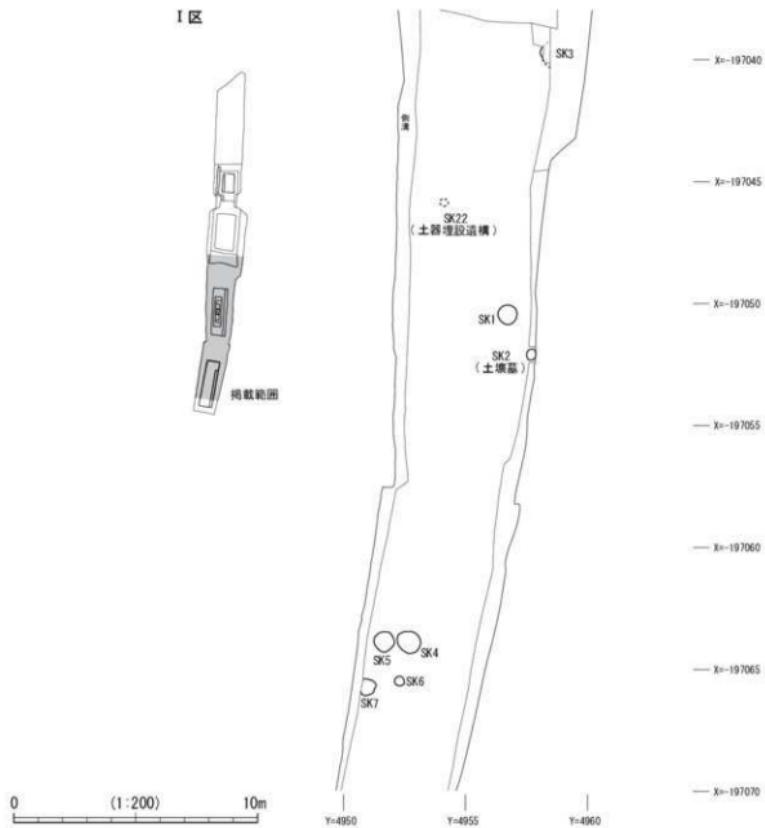
土器熱量は摂氏度 半歩量半径(g)土器・土製品は小数点第二位を四捨五入、石器・石製品は小数点第三位を四捨)

層位	土 製 品			打 穴 石			標 石 品			石 製 品		
	周 長	片側面積	合 計	周 長	片側面積	合 計	周 長	片側面積	合 計	周 長	片側面積	合 計
寸法	重量	枚数	寸法	重量	枚数	寸法	重量	枚数	寸法	重量	枚数	
SK1	2 23.0	4 36.8	6 49.8	-	-	-	-	-	-	1 330.86	1 330.86	-
SK2(1) 極端	4 181.3	-	4 181.3	1 2.5	-	1 2.5	-	-	-	-	-	-
SK3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK4	2 22.9	5 48.2	7 71.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK5	2 22.9	2 36.4	2 36.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK6	4 599.8	-	4 599.8	-	-	1 1.20	-	1 1.20	-	-	-	-
SK7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK8(1) 深層	13 243.9	-	13 243.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	25 3075.9	11 111.6	36 3017.3	1 2.5	-	1 2.5	1 1.20	-	1 1.20	1 330.86	1 330.86	-
SK8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1次調査 136+/-	1 30.7	13 170.2	14 307.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2次調査 136+/-	7 993.4	-	7 993.4	-	-	2 49.61	-	2 49.61	-	-	-	-
HK	200 873.2	848 3067.4	2007 1951.6	1 14.8	-	1 14.8	115 2300.12	155 1161.13	270 3461.25	4 1472.45	4 1472.45	-
Pt1	1 181.8	-	1 181.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	28 9987.1	861 16737.6	1079 20294.7	1 14.8	-	1 14.8	117 2349.73	157 1178.42	274 3626.15	4 1472.45	4 1472.45	-
1次調査 434+/-	4 40.5	4 30.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HK	39 1238.8	184 2136.2	225 3367.0	-	-	-	24 547.34	29 266.69	30 833.55	-	-	-
Pt1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	1 12.9	3 55.6	4 58.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	46 1287.3	191 2342.2	231 3496.6	-	-	-	26 790.39	29 266.69	30 833.55	-	-	-
SK1	2 16.2	2 16.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK2	2 16.2	2 16.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK4	2 16.2	2 16.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SK7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	4 32.6	4 32.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1次調査 434+/-	-	-	-	-	-	-	1 9.06	1 9.06	-	-	-	-
2次調査 334+/-	-	-	-	-	-	-	1 20.56	-	1 20.56	-	-	-
HK	82 3026.6	31 304.8	114 3231.4	-	-	-	1 4.42	1 4.42	-	-	-	-
Pt1	18 796.9	-	18 796.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	360 3823.3	31 304.8	132 4098.3	-	-	-	1 10.38	21 13.48	3 34.06	-	-	-
1次調査 83%+/-	-	-	-	-	-	-	1 1237.80	-	1 1237.80	-	-	-
HK	31 31.0	3 31.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	-	-	-	-	-	-	1 1237.80	-	1 1237.80	-	-	-
HK	7 151.6	31 227.9	36 379.5	-	-	-	1 45.99	-	1 45.99	1 1312.31	1 1312.31	-
Pt1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	7 151.6	34 257.4	41 409.0	-	-	-	2 58.09	-	2 58.09	1 1312.31	1 1312.31	-
HK	11 109.7	11 109.7	-	-	-	-	1 10.09	-	1 10.09	1 451.15	1 451.15	1 581.54
Pt1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pt5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	-	-	-	-	-	-	1 10.09	-	1 10.09	1 451.15	1 451.15	1 581.54
1次調査 136+/-	2 109.2	26 376.2	30 485.4	-	-	-	2 12.91	2 12.91	-	-	-	-
1次調査 334+/-	4 41.2	4 41.2	4 41.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1次調査 634+/-	-	-	1 1.5	1 1.5	-	-	1 10.16	-	1 10.16	-	-	-
1次調査 934+/-	1 29.5	-	1 23.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1次調査 1135+/-	-	1 11.8	1 11.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1次調査 136+/-	-	-	-	-	-	-	1 41.44	3 77.72	4 119.16	-	-	-
1次調査 536+/-	-	-	-	-	-	-	1 127.27	21 182.47	31 309.74	-	-	-
1次調査 939+/-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HK	19 480.6	179 1347.9	298 1828.5	-	-	-	8 46.71	6 27.38	14 74.01	21 1133.03	21 1133.03	-
Pt1	2 119.5	-	2 119.5	-	-	-	-	-	3 24.62	3 24.62	-	-
Pt2	4 59.7	3 86.3	7 105.0	-	-	-	-	-	21 11.26	21 11.26	21 227.13	-
Pt3	-	3 21.9	1 21.9	-	-	-	-	-	1 7.94	1 7.94	-	-
Pt4	-	23.4	16 167.7	19 201.1	-	-	-	-	1 54.62	1 54.62	-	-
Pt5	-	464 1241.5	464 1314.5	-	-	-	-	-	1 1.65	1 1.65	-	-
合 計	31 826.3	697 3366.0	739 4222.3	-	-	-	15 294.16	18 311.75	33 625.91	31 1405.16	31 1405.16	-

層を除くV-XI層の各層においても少量ながら遺物の出土が認められた。このほか、確認調査各トレンチや古代の遺構堆積土、調査区内の搅乱からも少量はあるが、遺物が出土している。これらの出土地および内訳は、前ページの表に示したとおりである。

出土した遺物のうち、IV層において確認されたものについては、弥生時代中期中葉に位置付けられる、いわゆる梯形開式に比定されるもの、V層についてはIV層出土遺物と特徴が酷似するものが大部分を占める。また、VI層から出土したものについては、縄文時代晚期後葉に位置付けられる大洞A<sub>1</sub>式に比定されるものである。これ以外の各層から出土した遺物については、殆どが体部破片で時期や型式を特定することが困難なものばかりであるが、VI層から出土したものについては縄文時代晚期後葉～弥生時代中期中葉、VII層以下から出土したものについては縄文時代晚期後葉以前に、それぞれ位置付けられるものと思われる。

以下、各遺構および各層から出土した遺物のうち、図示が可能であったIV・V・VI・VII・X・XI層から出土したも



第171図 V層上面遺構配置図

のについて記載する。なお、遺構番号については古代以後の遺構と区別し、検出順に第1号から通し番号を付している。また、土器埋設遺構、土塙墓、土坑については、いずれも「SK」とし、通し番号を付した。また、各層位の出土遺物のうち、打製石器の接合資料についてはIV層とV層からの出土が認められることから、本節末項にてまとめて記載している。

#### (1) V層上面検出遺構(第171～177図)

I区南半部から土器埋設遺構、土塙墓が各1基、土坑6基が検出された。北側には土器埋設遺構および土塙墓、土坑1基、南側には土坑4基が近接して位置する。これらはいずれも出土遺物の特徴から弥生時代中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式期の所産と考えられるものである。

少数とはいって、この時期の土器埋設遺構と土塙墓が近接して検出された意義は大きく、I区南半部北側周辺には弥生時代中期中葉に墓域が形成されていた可能性が考えられるとともに、このI区南半部北側は昭和30年代前半に墓域が確認された地点の約200m北東に位置することから、当該期における墓制や葬制を検討する際の良好な資料といえる。

#### a. 土器埋設遺構(第171～173図)

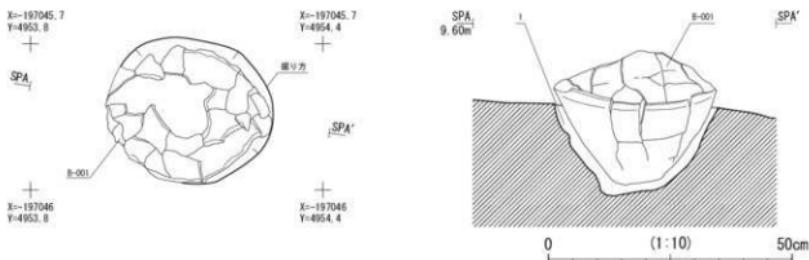
今次調査において検出された土器埋設遺構は、1基である。

#### SK22 土器埋設遺構(第171～173図)

I区南半部北側、H-3グリッドに位置する。土坑状の掘り方に粗製の壺1点が埋設されるものである。他遺構との重複は認められない。約7m南東には土塙墓であるSK2が位置する(第171図)。

掘り方は埋設された土器に比べて一回り大きく構築される。規模は、長軸34cm×短軸29cm、深さ19cmを測り、平面形状は長軸を西北西・東南東に持つ楕円形、断面形状は不整な逆台形状を呈する。底面は北西側がわずかに深く、壁は内湾する立ち上がりを基調とし、北西側には凹凸が認められる。掘り方の堆積土は、にぶい黄褐色を呈するシルト質粘土の単層で、炭化物粒や酸化鉄を含む。

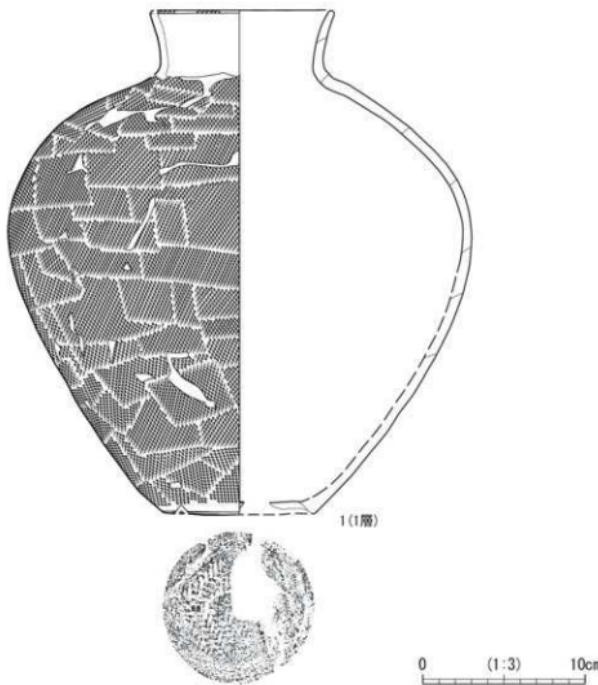
掘り方には器高30cm程の中型の壺1点が正立した状態で埋設されており、口縁部～体部上半は上方からの圧力により押し潰されたような状態で出土した(第172図)。



SK22 土器埋設遺構概観

遺構名	調査区	グリッド	規模(cm)	層位	土色	土性	備考
SK22	I区	H-3	楕円形 長軸×短軸 34×29	19	I 10YR5/4 [二芯・黄褐色]	シルト質 粘土	炭化物粒、深坑に酸化鉄を含む、掘り方堆積土。

第172図 SK22 土器埋設遺構



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考	写真図版
1	B-001	IDC	SK22	3層	堆积土器	壺	口縁～底 (焼成完了) →口縁・体上部繩文横軸・斜位回転 →口縁・体下部・底位(4巻)。 →内・網代痕→+	外：口縁・体上部繩文横軸・斜位回転 内：口縁・体下部・底位(4巻)。 →内・網代痕→+	外：口縁(1.4cm、底径9.4cm)。 内：底径10cm。 内面底付付近 底部穿孔(焼成後、内→外)。 口縫内側および底部外側調整	1	65

第173図 SK22土器埋設遺構出土遺物

埋設された土器(第173図-1)は、底径に対して口径がわずかに大きく、体部上半に最大径を持つ粗製の壺である。体部上端は緩く括れ、口縁部はわずかに外反する器形を呈する。口縁部および体部外面にはL字縄文が横位および斜位回転施された後、口縁部外面および体部下端がミガキ調整される。また、網代痕が付される底部は焼成後に内面側から穿孔されており、その際の影響によるものと思われる器面の剥離が外底面のほぼ半分に観察される。内面は全面にわたり、丁寧なミガキ調整が施される。

#### b. 土壙墓(第171・174・175図)

今次調査において検出された土壙墓は、1基である。

#### SK2 土壙墓(第171・174・175図)

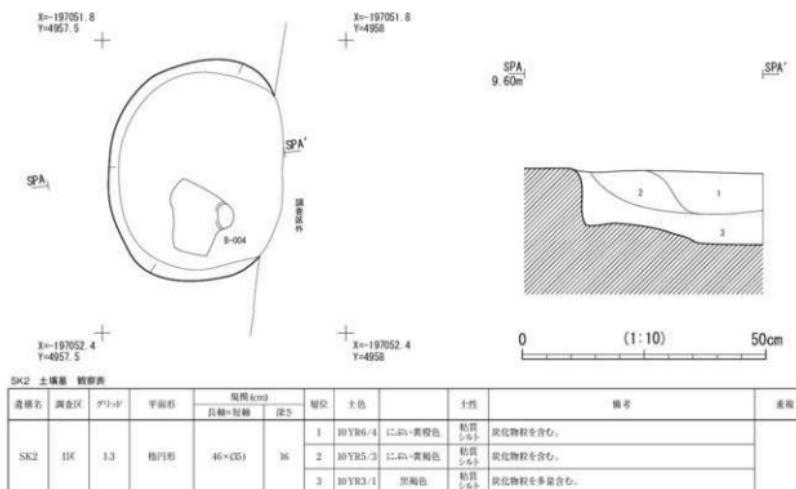
I区南半、I・3グリッドに位置する。東側はわずかに調査区外にかかる。他遺構との重複は認められない。約7m北西には、土器埋設遺構であるSK22が位置する(第171図)。堆積土中より土製の管玉が出土したことにより、

土壤墓と判断された。

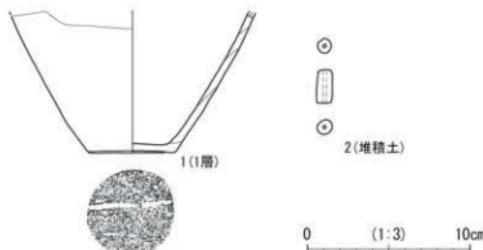
検出された部分の規模は、長軸46cm×短軸35cm、深さ16cmを測り、平面形状は長軸を北北東・南南西に持つ楕円形、断面形状はいびつな箱形を呈する。底面は西側壁際に高まりを持ち、中央部から東側が概ね平坦となる。壁は直立気味に立ち上がり、上端がわずかに外反する。

堆積土はにぶい黄橙色を呈する粘土質シルトを主体とする3層に分層された。いずれも炭化物を含むものである。

遺物は1層中から、体部外面に施される丁寧な横位のミガキ調整から精製の臺もしくは鉢と推定される土器の体部下半(第175図-1)、堆積土中からの出土ではあるものの、本遺構の深さからみて本遺構に伴うものと考えられる完形の主製管玉1点(同図-2)が出土した。

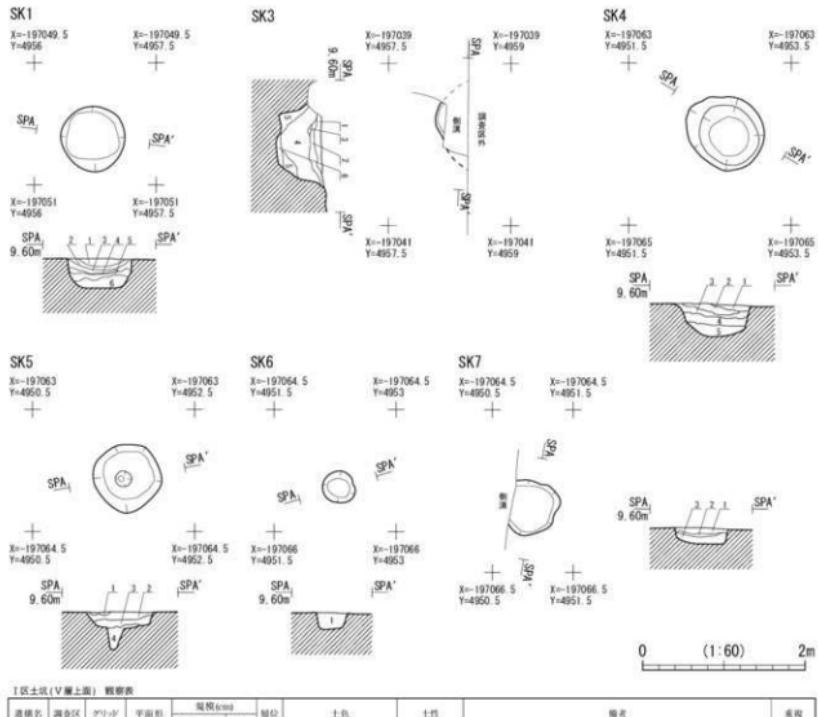


第174図 SK2土壤墓



回収番号	登録番号	調査区	出土土	層位	種別	種類	器種	基底	法規格(cm)			重量(g)	特徴・備考	写真回数	
									長	幅	厚				
2	P-018	IIK	SK2	堆积土	土製品	管玉			2.0	1.0	1.0	2.5	完形		65

第175図 SK2土壤墓出土遺物



I区土坑(V層上面) 縦断面

遺構名	調査区	アリヤド	平面形	規模(cm) 長幅×短幅 第5	剖面 第5	土色	土性	概要		床板
								層位	標考	
SK1	II区	13	円形	80×79	39	1 10YR5-3	にじみ・黄褐色	シルト		
						2 10YR6-4	にじみ・黄褐色	シルト		
						3 10YR5-2	黄褐色	粘土質シルト	頂部に10YR6-1 剥離色土を含む。下層に炭化物の集積があり。	
						4 -	-	-	炭化物層。	
						5 10YR5-3	暗褐色	粘質シルト	上部に炭化物を含む。	
						6 10YR4-4	褐色	粘質シルト	頂部に10YR6-1 剥離色土を含む。	
SK3	II区	12	不明	(38)×12	57	1 10YR5-3	にじみ・黄褐色	シルト	炭化物土を含む。	
						2 10YR5-3	にじみ・黄褐色	シルト	10YR3-2 黑褐色土ブロック、多量の炭化物土を含む。	
						3 10YR5-4	にじみ・黄褐色	シルト	炭化物土を含む。	
						4 10YR4-4	褐色	粘質シルト	複数に10YR6-2 黑褐色土・黒化鉄・マンガンを含む。	
						5 10YR5-3	にじみ・黄褐色	粘質シルト	複数に10YR6-3 黑褐色土・黒化鉄・マンガンを含む。	
						6 10YR4-4	褐色	粘質シルト	複数に10YR6-4 黑褐色土・黒化鉄・マンガンを含む。	
SK4	II区	H-4	椭円形	99×82	41	1 10YR5-3	にじみ・黄褐色	粘質シルト	10YR5-6 黄褐色土ブロック・炭化物土を含む。	
						2 10YR4-1	褐灰色	粘質シルト	炭化物土を量含む。	
						3 10YR4-1	褐灰色	粘質シルト	10YR6-4/LD-3 黄褐色土ブロック・炭化物土を含む。	
						4 2.5Y3-2	黒褐色	粘質シルト	炭化物土・炭化鉄を含む。	
SK5	II区	H-3	不整円形	81×78	49	5 10YR2-1	黑色	粘質シルト	10YR6-2 黑褐色土を複数に・炭化物土を含む。	
						1 10YR5-4	にじみ・黄褐色	粘質シルト	10YR5-1 剥離色土を複数に・炭化物土を含む。	
						2 10YR5-3	にじみ・黄褐色	粘質シルト	10YR5-1 剥離色土を複数に・炭化物土を含む。	
SK6	II区	H-4	不整円形	42×38	39	3 10YR2-2	黒褐色	粘質シルト	10YR6-4/LD-3 黄褐色粘質土ブロックを多量。	
						1 10YR3-3	暗褐色	粘質シルト	炭化物土・炭化鉄・マンガンを含む。	
						2 10YR3-3	暗褐色	粘質シルト	2.5Y3-1 黑褐色土・マンガンを複数に； 10YR3-2 黑褐色土ブロックを含む。	
SK7	II区	H-4	不整円形	70×69	11	3 10YR3-3	暗褐色	粘質シルト	2.5Y3-1 黑褐色土を含む。	
									マンガンを斑状に多量含む。	

第176図 土坑(V層上面)

### c. 土坑(第171・176・177図)

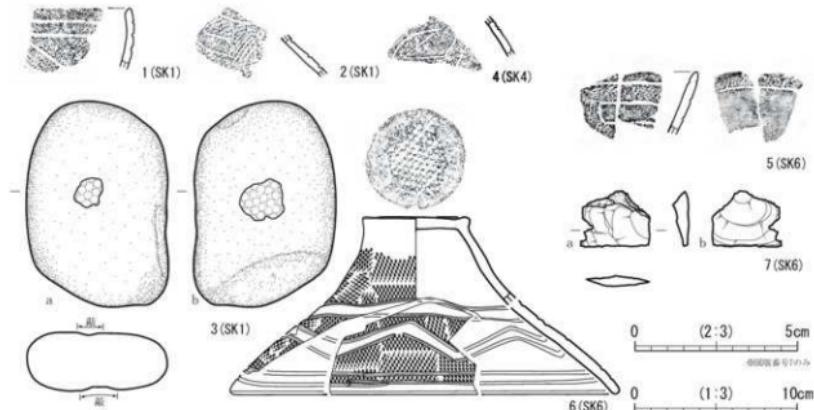
I区南半部から6基検出された。これら6基は、規模や形状、出土遺物等から性格を見出し難いものであることから、諸属性については観察表にまとめて記載した。

いずれも平面形状は径1mに満たない円形、断面形状は箱形を基調とするが、なかにはSK5のように底面にピットを伴うものも存在する。調査区西壁際に近接して構築されるSK4~7の存在からは、西側調査区外にも当該期の遺構が存在する可能性が指摘される。

V層上面から検出された土坑の出土遺物として、SK1から出土した鉢・蓋或いは高杯と考えられる弥生土器、蔽石を各1点、SK4から出土した壺1点、SK6から出土した弥生土器鉢・蓋、剥片各1点を掲載した(第177図)。

土器はいずれもいわゆる彫形團式に比定されるもので、大部分が破片資料である。装飾文様は、幅1~2mm程度の比較的細い沈線で施されるものが多く、沈線の断面形状は4がV字状、そのほかは浅いU字状を呈する。文様意匠には、横直線文と連続山形文もしくは方形文の組み合わせ(1・5・6)のほか、鑑形文(4)や方形文(2)が認められる。

全体の器形が復元された6は、器高10cm、推定口径が20cmを超える大型のもので、口径と天井径の割合が凡そ4:1、口径と器高の割合が凡そ2:1となる。器形は口縁部から体部下半は内済気味、体部上半は外反気味となる。



図版番号	登録番号	調査区	出土層	層位	種別	器種	部位	表面調整(文様)	内面調整(文様)	備考	写真回数
1	B-002	IDC	SK1	堆積土	弥生土器	鉢	口縁 ~体上半 (横位置文+連続山形文)	ツラカ→LR團文+沈線→13°4 ~体上半 (横位置文+連続山形文)	ツラカ→13°4		65
2	B-003	IDC	SK1	堆積土	弥生土器	蓋or 高杯	体下半	沈線→13°4團文+沈線→13°4 ~体上半 (横位置文+連続山形文)	ツラカ→13°4(横)		65
4	B-005	IDC	SK4	堆積土	弥生土器	蓋	体上半	横線→13°4團文+沈線→13°4 ~沈線内ねじり地文添赤彩?	ツラカ	内外面摩拭 (横位置文)	65
5	B-006	IJK	SK6	堆積土	弥生土器	鉢	口縁 ~体上半 (横位置文+連続山形文)	沈線→13°4團文 ~沈線内ねじり地文添赤彩?	体上半:ツラカ→13°4 LR團文 ~沈線+体上半:横位置文 (横位置文)	体上半内済色添付着、 内外面摩拭	65
6	B-007	IDC	SK6	堆積土	弥生土器	蓋	天井 ~口縁 (横位置文+連続山形文)	天井:網目→周縁→口縁 ~口縁:沈線→13°4團文+沈線→13°4 (横位置文+連続山形文)	ツラカ(有)	口径23.8cm、 天井径6.4cm、 器高10.9cm	65

図版番号	登録番号	調査区	出土層	層位	種別	器種	法線(cm)			写真回数	
							長さ	幅	厚さ		
3	Ke-022	IDC	SK1	堆積土	理石器	理石	12.4	8.8	3.6	330.89	石英安山岩質 理石器、點h面1箇所、b面1箇所(露)

図版番号	登録番号	調査区	出土層	層位	種別	器種	法線(cm)			写真回数	
							長さ	幅	厚さ		
7	Ka-010	IJK	SK6	堆積土	打製石器	剥片	1.9	0.5	0.0	126	剥片前 立 有

第177図 土坑(V層上面)出土遺物

L R 繩文の回転施文を地文とし、太い横位直線文2条が体部中央と口縁部に施文され、それにより区画された体部下半にはほぼ並行する連続山形文2条が推定6単位施文された後、体部中央と連続山形文の沈線間はミガキ調整により磨り消され、無文部が表出される。天井部の周縁は斜め上方につまみ上げられる。

3は扁平な梢円礫を素材とした敲石である。a・b両面中央の平坦面に弱い敲打痕が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。7はa面上端部にわずかに自然面が残存する剥片である。点状打面であり、末端はヒンジフランチャードである。石材は流紋岩である。

## (2) VII層上面検出遺構(第178~180図)

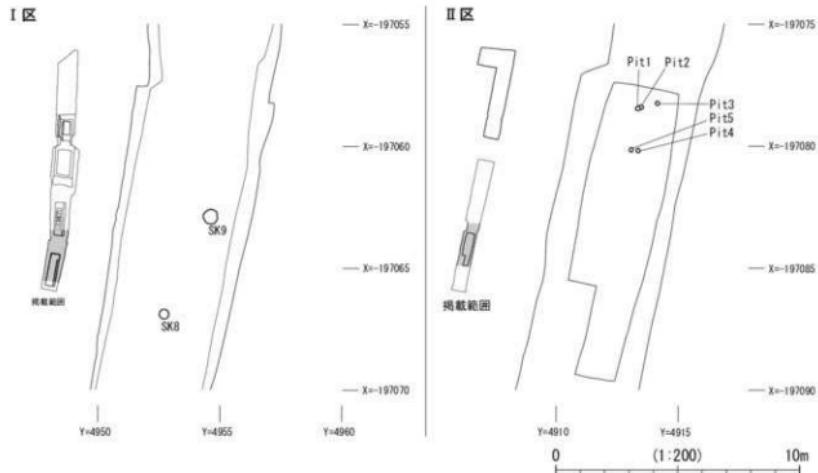
I 区南半部南側から土坑2基、II区南半部南側から5基のピットが検出された。これらの遺構からは遺物が出土していないため明確な帰属時期は不明であるが、VII層からは縄文時代晚期後葉に位置付けられる大洞A<sub>1</sub>式に比定される土器が少数出土していることから、縄文時代晚期後葉以後、これに近接する時期に構築されたものと考えられ、郡山低地内における稀な事例として注視される。

### a. 土坑(第178・179図)

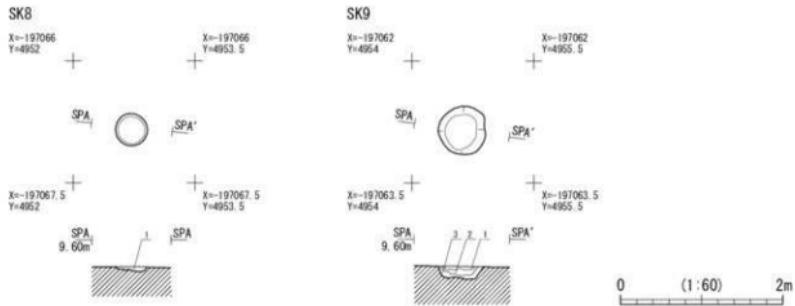
I 区南半部南側からSK8・9とした2基が検出された。約4m離れた地点に位置する。これら2基は、いずれも規模が径50cm内外、深さ20cm未満を測る比較的小型なもので、平面形状は円形ないし不整円形、断面形状はSK8が皿状、SK9が逆台形を呈する。出土遺物も認められず、性格については不明である。これらの諸属性については、まとめて観察表に示した。

### b. ピット(第178・180図)

II 区南半部北側から5基検出された。規模は長軸20cm弱、短軸15cm内外、深さ6~24cmを測る小規模なものである。いずれも平面形状は梢円形、断面形状は箱形を呈する。遺物は出土していない。

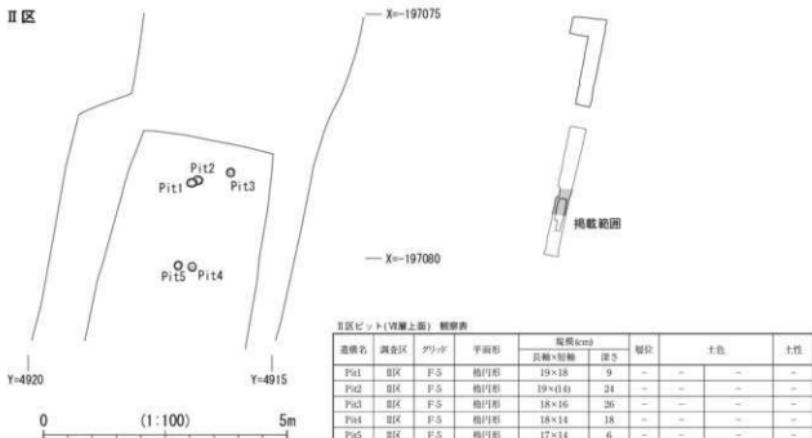


第178図 VII層上面遺構配置図



I 区土坑(VII層上面) 細部表									
遺構名	調査区	グリッド	平面形	規模(cm)		層位	土色	土性	備考
				長軸	短軸				
SK8	II区	I-4	円形	39×37	6	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト
				10YR3/4	-	1	10YR3/2	黒褐色	10YR3/6 明黄色褐色シルトブロック・炭化物粒・礫化物粒・塊化鉄、深部にマンガンを含む。
				10YR3/3	18	2	10YR3/2	黒褐色	10YR3/6 明黄色褐色シルト粒・炭化物粒・マンガン鉄を含む。
SK9	II区	I-4	不整円形	60×59	18	3	10YR3/3	黒褐色	10YR3/6 明黄色褐色シルト粒・炭化物粒・マンガン鉄、深部に塊化鉄を含む。

第179図 土坑(VII層上面)



第180図 ピット(VII層上面)

### (3) IV層出土遺物(第181~201図)

本節の冒頭でも触れたように、弥生時代の遺物包含層であるIV層からは、IVd層を主体として1,358点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。

出土地別の内訳についてはI区に顕著な偏りが認められ、V層上面にて検出された遺構の分布と合致する。種別の内訳については、出土総数の2/3程が土器であり、残る1/3の殆どは打製石器、これに少数の土製品および螺石器が加わる。これは土器が破片で出土することに起因するものであるが、重量においても土器の出土量が突出する状況に変わりはない。

第4章にて既述したように、IV層はIVa～IVg層に7細分される大別層位であるが、細別層位で取り上げたものはIVd層から出土したもののみであり、これ以外は大別層位である「IV層」として取り上げている。

以下では、IV層から出土した遺物のうち、打製石器の接合資料を除く土器、土製品、接合資料以外の石器について、種別毎に記載する。

#### a. 土器・土製品(第181～191図)

IV層からは、1,079点の土器と土製品1点が出土した。出土した土器は、器形や施文される装飾文様意匠の特徴等から、いずれも弥生時代中期中葉に位置付けられる、いわゆる弦形開口式に比定されるものである。これらのうち、図示可能なまでに復元されたものや器形や装飾文様等に特徴がみられるものを抽出し、壺23点、高杯6点、鉢28点、深鉢3点、甕18点、蓋21点、总数99点(各器種に推定されるものを含む)を掲載した(第181～191図)。破片資料が多く全体の器形が復元されたものはごく僅かであるとはいえ、上記の器種構成は、これまで仙台平野で出土している当該型式と同様のものである。

この各器種の中で、高杯は装飾文様が施文される精製土器のみ、甕は装飾文様が施文されない粗製のもののみで、この2器種を除く各器種には、精製と粗製が認められる。

各器種に施文される装飾文様のバリエーションは多彩なものであるが、連弧文や連續山形文、錐形文、方形文をはじめとする各種の文様意匠と横位直線文の組み合わせにより文様帶が表出されるという点については、器種に関わらず共通する。横位直線文については、上に記した各種装飾文様と無文帯もしくは地文部を区画するように施文されるもののほか、口縁部内外面や体部外面に1～複数条施文されるものがある。

また、装飾文様の中には意匠不明の幾何学文や類例に乏しいものが一定量認められ、当該期の土器を検討する上で注視される。このような資料については、同一個体であっても可能な限り図示に努めた。

装飾文様の内部は地文が施文されるものと無文となるもののほか、地文の有無を別として赤彩されるもの認められる。装飾文様内に地文が施文されるもの大部分は、充填繩文手法(沈線施文後に地文を充填し、再度沈線を施文した後にミガキ調整を加える手法)によるものであるが、磨消繩文手法(地文上に装飾文様を施文した後、ミガキ調整を加える手法)により施文されるものについても少なからず存在する。また、1個体のみではあるが、地文が充填された後に彫去手法が施されることにより、器面に立体効果が生み出されるものが出土している。

装飾文様が施文されない部分については、地文として繩文原体の回転施文や植物茎回転文が施文されるものほか、ミガキ調整やナデ調整が施されるのみで無文となるものも少なくない。

地文や各種の文様意匠内に充填される繩文原体は、器種を問わず単節LRが多用され、一般的な2段の繩のほか、直前段多条(3条)や附加条、撚り戻しといったバリエーションがみられる。このほかの少数例には、単節RL無節Rおよび無節L、一個体に異なる原体(単節LR+単節LR、単節LR+無節L、単節LR+植物茎回転文)が併用されるものが認められる。

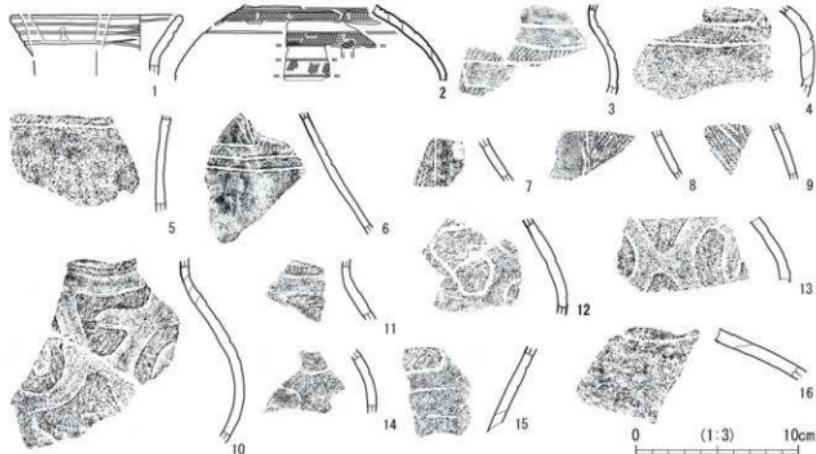
また、結節回転文が観察されるものが少数存在するが、これらは総じて原体の回転方向と並行することから、繩文原体の開端を結節した箇所が偶発的に施文されたものと考えられる。

以下、器種毎の概要について記載するほか、1点のみ出土した土製品についても併せて記載する。

#### 壺(第181～183図)

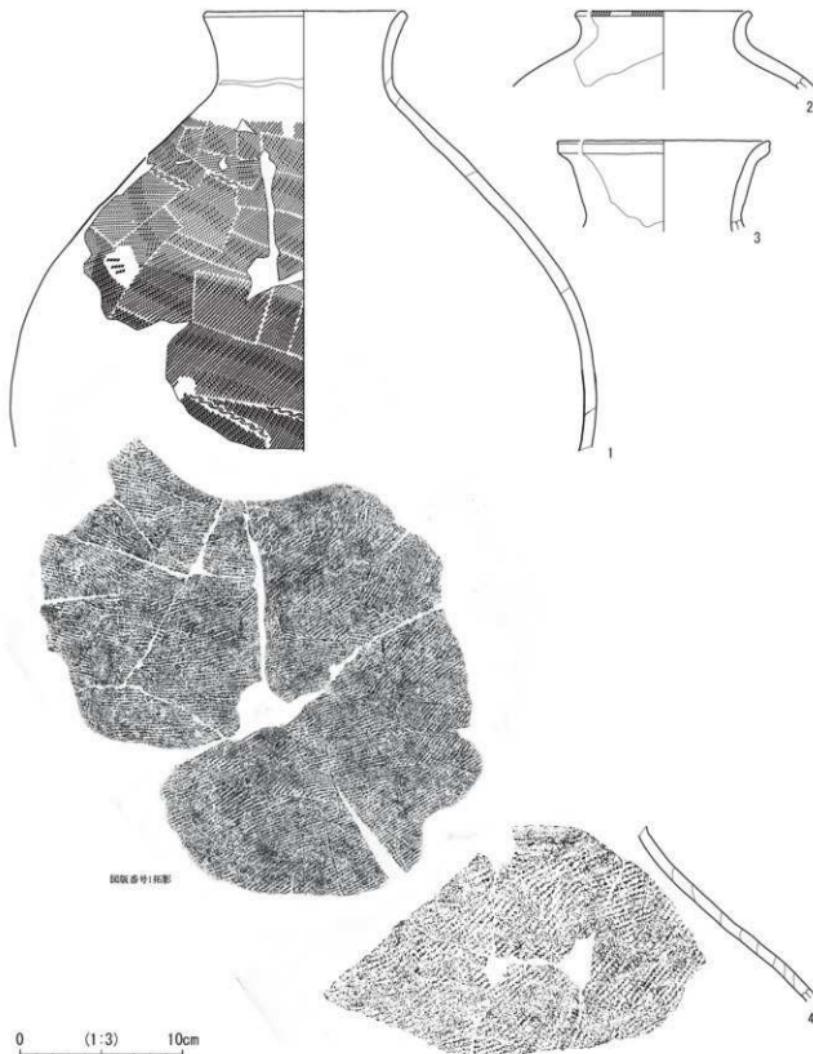
壺(壺と推定される破片資料を含む)は、全体の器形が復元されたものが無いものの、器高20～25cm程と推定される中型品(第181図-2～4・10～15、第183図-2・3)、器高40cm超と推定される大型品(第181図-1・5～9・16、第182図、第183図-1)があり、器高10cm程の小型品と推定されるものは出土していない。

最大径の位置は、器高を問わず体部上半に持つもの(第181図-2～4・16、第182図-2・4、第183図-1)と、体部下半に持ち下顎氣味となるもの(第181図-10～15、第182図-1)に大別される。頸部は直立氣味となるもの(第181図-1・5・10・11、第181図-1)、直線的にやや外傾するもの(第182図-3)、短く外反するもの(第181図-3、第182図-2)に区別され、直立氣味となるものの中には長頸となるものが1点認められる(第181図-5)。口縁部形態はいずれも平縁で、頸部から屈曲して直線的に外傾するもの(第181図-1、第182図-3)、僅かに外反するもの(第182図-1・2)が認められる。



団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種類	器形	部位	外面調整 (文様)	裏面 (文様)	備考	写真 図版
1	B-010	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	口縁	フリ→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	フリ→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	口縁10.6cm	66
2	B-020	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	横縫目直面文→横縫目3'直面文 (横斜直面文)	フリ'	内面輪郭直面顯	66
3	B-018	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	口縫	口縫→上半-沈縁→3'直面文 →沈縫(直縫)→傾位1 →口縫-体上半-横縫目3' (有密) (横斜直面文)	フリ→3' (有密)	口縫上部欠失	66
4	B-019	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	横縫目直面文→横縫目3' (有密) (横斜直面文)	フリ→3' (有密)	外面部直物付有 内面輪郭直面顯	66
5	B-022	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	口縫	フリ→3'直面文→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	フリ→横位18' (有密)	長頸1.7mm基上半缺失 B-021～025同一個体	66
6	B-021	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	フリ→横位18' (有密)	長頸直 B-021～025同一個体	66
7	B-025	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	フリ→横位18' (有密)	長頸直 B-021～025同一個体	66
8	B-024	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→沈縁→3' (有密) (横斜直面文)	フリ→横位18' (有密)	長頸直 B-021～025同一個体	66
9	B-023	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→直縫(3条) (横斜直面文)	フリ→横位18' (有密)	長頸直 B-021～025同一個体	66
10	B-012	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	口縫	フリ→3'直面文→直縫(3条) →体上半 →沈縁→3' (有密)→3'引	フリ→フリ→3' (有密)	1縫上半欠失 体上半外縫→4次物質付有 B-012～017同一個体	66
11	B-013	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	口縫	フリ→3'直面文→直縫(3条) →体上半 →沈縫→3' (有密)→3'引	フリ→フリ→3' (有密)	1縫上半欠失 B-012～017同一個体	66
12	B-016	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→直縫(3条) →沈縫→3' (有密)→3'引 (横斜直面文)	フリ→(3'引)	B-012～017同一個体	66
13	B-015	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→直縫(3条) →沈縫→3' (有密)→3'引 (横斜直面文)	フリ→3' (有密)	B-012～017同一個体	66
14	B-017	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→直縫(3条) (横斜直面文)	フリ→3' (有密)	B-012～017同一個体	66
15	B-014	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体下半	フリ→3'直面文→直縫(3条) (横斜直面文)	フリ→3' (有密)	B-012～017同一個体	66
16	B-026	IIK	-	Ⅲd層	佛生土器	盃	体上半	フリ→3'直面文→3'引 (横斜直面文)	フリ→3' (有密)		66

第181図 IV層出土遺物(1)

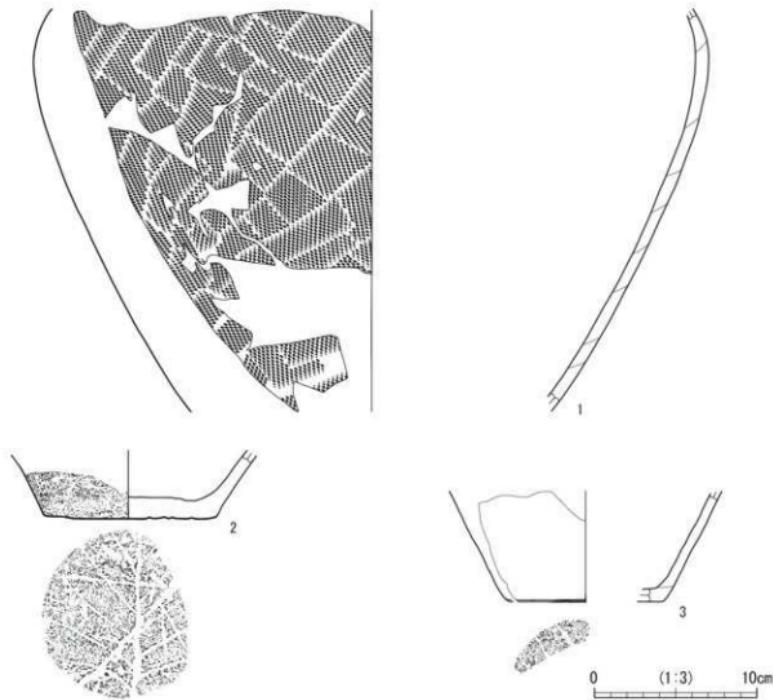


图版 番号	登錄 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部狀	外周調整 (支柱)	内面調整 (支柱)	備考	写真 図版
1	B-008	2次溝塗 II層	-	Ⅳd層	陶生土器	壺	口縁 一体上半 体上半	外上半 LR範丈(附加条)積段・斜位斜板 →1位(植付)2位(?)密(?)3位(?) 外上半(?)	横位r→横位(?)4位 →1位(?)密?	口径12.2cm, 瓶文原作開端白条粘跡	66
2	B-028	IIK	-	Ⅳd層	陶生土器	壺	口縫 一体上半 体上半	口縫 一体上半(?)密(?) 横位(?)	横位(?)	口径10.6cm	66
3	B-027	IIK	-	Ⅳd層	陶生土器	壺	口縫 一体上半	横位(?)密(?)	外r→外s(?)	口径13.1cm	66
4	B-031	IIK	-	Ⅳd層	陶生土器	壺	体上半 体上半	体上半 体上半(?)密(?)	r	内面剥落、輪郭不明瞭	66

第182図 IV層出土遺物(2)

装飾文様は、断面形状が浅いU字状を呈する幅2~3mmの比較的太い沈線により施文されるものが殆どであるが、中には断面形状がV字状を呈する幅1mmの細い沈線により施文されるものもある(第181図-2)。施文部位については破片資料のみであるため判然としない部分があるものの、接合しない同一個体破片から頸~体部の器形がほぼ復元される第181図-10~15については、最大径が位置する胴部下半以下が無文となる。文様意匠は1個体に横位直線文のみが1~複数条施文されるもの(第181図-1・16)、横位直線文と方形文もしくはその他の装飾文様が組み合わせられて施文されるもの(第181図-2~9・10・11)が認められる。第181図-10~15は充填繩文手法により意匠不明の幾何学文が施文され、且つ無文部に影去手法が施されることで器面上に立体効果が生み出された後に外面全体が赤彩されるもので、今次調査で出土した弥生土器の中では他に例がない。

地文はL.R繩文による回転施文を主体とし、中には直前段3条のもの(第181図-10~15)や、条が附加されるもの(第182図-1)が認められる。後者については、原体の特定に至らなかったものの、三指程の原体幅の上下に部分



団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外側調整 (文様)	内側調整 (文様)	参考	写真 図版
1	B-009	IIIC	-	直d型	弥生土器	直 or 曲	体	↑↑'→LR繩文複位・斜位回転	↑↑'→↑↑'	内面二次加熱による火焔	67
2	B-029	IIIC	-	直d型	弥生土器	直 or 曲	体下端 底部	↑↑'→側下端・傾位↑↑'(密)、 底:木葉模	↑↑'→↑↑'(粗)	底径10.6cm、 底部外側削面、 側面内側面赤色顔料付着	67
3	B-030	IIIC	-	直d型	弥生土器	直	体下半 底	↑↑'→↑↑'(粗)、 底:木葉模	↑↑'	底径約6.5cm、 底部穿孔(焼成後、外→内)の 可能性。 内面摩耗	67

第183図 IV層出土遺物(3)

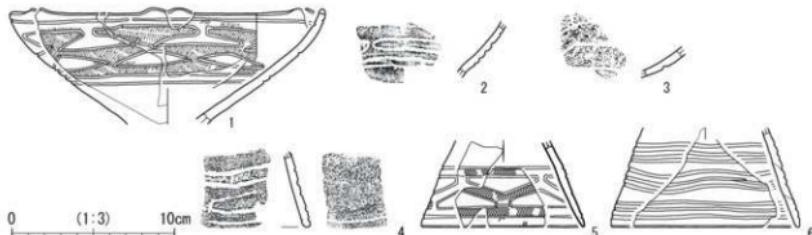
的に条が附加された可能性がある。地文が施文されるのみの粗製壺については、口唇部に地文が施文される第182図-2を除き、体部上端以上はミガキ調整が施文されるのみの無文帯となる。第183図-2・3は体部下半部～底部の破片資料で、前者の底部外面には初痕、内面体部下端には赤色顔料の付着が観察される。後者は焼成後に底部が外面側から穿孔された可能性を有するものである。

#### 高坏(第184図)

高坏はすべて装飾文様が施文される精製のもので、坏部、脚部の破片資料を各3点掲載した(第184図)。坏部の器形は、体部下端が短く外反して体部から口縁部へと内湾気味に開くもので、1は体部上端から内湾して1対1単位の山形突起を推定6単位有する口縁部へといたる器形を呈する。脚部は中空の円錐台形を基調とし、裾部から脚部上端へと直線的に内傾する。

装飾文様は、断面形状がV字状を呈する幅1～1.5mm程の細い沈線で施文されるもの(1・2・5)とU字状を呈する幅2～3mmの太い沈線で施文されるもの(3・4・6)に区別される。施文部位については坏部上半、脚部下半に施文され、坏部下半および脚部上半が無文帯となるものが多い。

文様意匠は坏部・脚部を問わず、横位直線文と連続山形文もしくはその他の装飾文様が組み合わされて施文され、中には縦位の短線が加わる可能性があるもの(3)や裾部内部に横位直線文が施文されるもの(4)がある。1は横位直線文で区画された体部上半に推定8単位の連続山形文が半単位ずらして2段施文され、文様内はミガキ調整により無文となる。5は横位直線文で区画された脚部下半に推定6単位の連続山形文が点対称に施文される。6はほぼ並行する3条の横位直線文が脚部中央と脚部下端(裾部の直上位)に施文され、その内部にはほぼ並行する3条の波状文が施文される。地文はL R 繩文の回転施文や植物茎回転文が施文されるものがあり、また地文部が赤彩されるものが少数認められる(1・5)。このほか、1は内外外面共に口縁部が黒色化しており、また沈線内には炭化物の付着が観察されることから、蓋として転用されたものと考えられる。

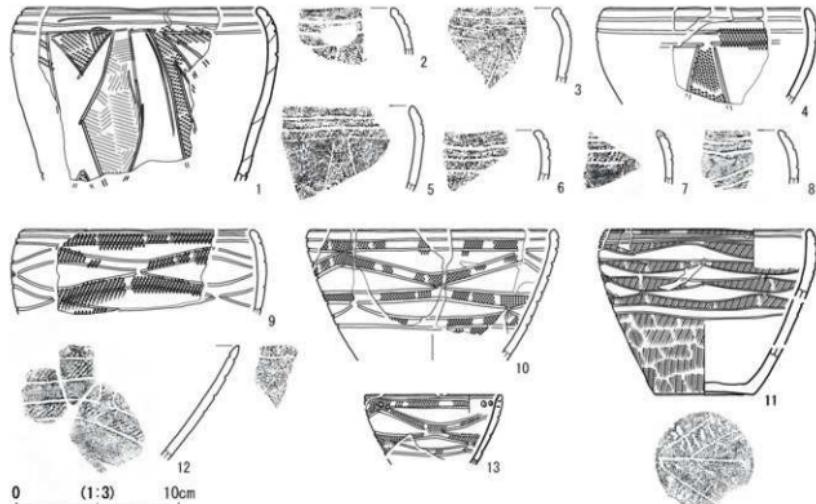


団版 番号	登録 番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	外周調整 (文様)	内周調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B432	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	口縁 一休	「口縁+1休上半+2側」→植物茎回転文→沈線 →「1個+1休」(1対1密)→地文部赤彩 (植物茎回転文+連續山形文)	「口縁+沈線 →1個+1休」(3対1密) (横位直線文)	口縫19.0cm, 口縫部山形突起 対1休単位、推定6単位。 脚部は中空の円錐台形。 内周は脚部上半および 内周は脚部黒色化。 蓋に転用	67
2	B433	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	体下半	「横縞+1葉文+2側」→横位直線文 (植物茎回転文+連續山形文)	横位(3対1密)		67
3	B434	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	体下半	「横縞+1葉文+2側」→横位直線文→「1個+1 休」(3対1密) (植物茎回転文+連續山形文)	「1個+1 休」(3対1密)	内周摩耗	67
4	B437	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	脚	「横縞+1葉文+2側」(横位直線文) →「横縞+1葉文+2側」(横位直線文) →「横縞+1葉文+2側」(横位直線文) (植物茎回転文+連續山形文)	「横縞+1葉文+2側」 (横位直線文)		67
5	B436	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	脚	「横縞+1葉文+2側」 (植物茎回転文+連續山形文)	「横縞+1葉文+2側」 (植物茎回転文+連續山形文)	脚径10.0cm, 内周摩耗	67
6	B435	IIK	-	Ⅴd期	堆生土器	高坏	脚	「横縞+1葉文+2側」 (植物茎回転文+連續山形文)	「横縞+1葉文+2側」 (植物茎回転文+連續山形文)	脚径11.6cm, 外周磨耗	67

第184図 IV層出土遺物(4)

### 鉢(第185図～187図-6)

鉢(鉢と推定される破片資料を含む)は大部分が破片資料であるものの、部分的に復元されたものをみると上では口径に対して器高が2/3～3/4程度と推定されるものが多く、全体の器形が復元された第185図-11の口径と底径の比率は、ほぼ2:1となる。こうした比率から、器高6～7cm程度と推定される小型品(第185図-13、第187図-3)、器高10～15cmと推定される中型品(第185図-1～12、第186図-1・5、第187図-1・2)、および器高20cm程度と推定される比較的大型なもの(第187図-5・6)に区別される。



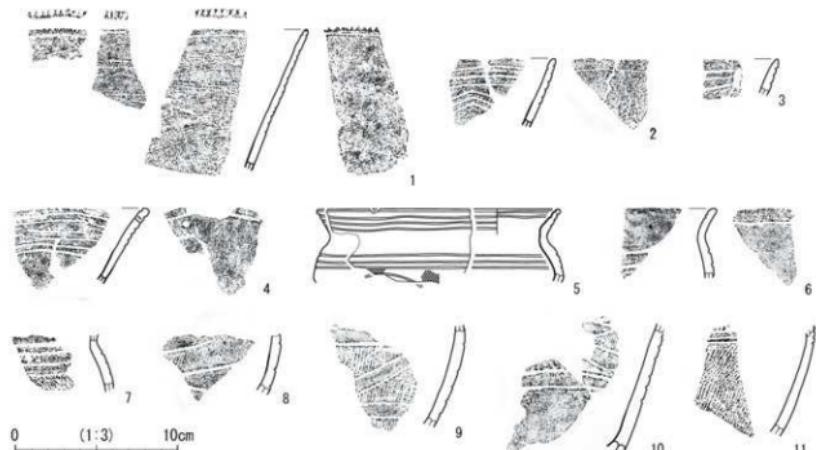
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種類	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	参考	写真 位置
1	B-041	IK	-	Ⅴ層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文 (横斜)→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径14.6cm, 外周不規則化物付着, B-041-062同1個体	67
2	B-042	IK	-	Ⅴ層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	外周不規 B-041-062同1個体	67
3	B-043	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径14.6cm, 外周不規則化物付着, B-041-062同1個体	67
4	B-044	IK	-	Ⅴ層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径14.6cm, 外周不規則化物付着, B-044-067同1個体	67
5	B-045	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	B-044-067同1個体	67
6	B-046	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	B-044-067同1個体	67
7	B-047	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径消失, B-044-067同1個体	67
8	B-054	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径14.6cm, 外周不規則化物付着, B-044-067同1個体	67
9	B-048	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜)	13径14.2cm, 外周不規則化物付着, B-044-067同1個体	67
10	B-040	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	横傾18°(斜)	13径15.0cm	68
11	B-038	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -底	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) -底 “二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜); “二”→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	13径14.2cm, 底径6.2cm, 器高10.2cm	68
12	B-050	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜); “二”→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	底傾18°, 内面直壁	68
13	B-039	IK	-	Ⅴd層	堆积土器	鉢	口縁 -全体上半 深鉢	“二”沈文→L沈文→L沈文→斜傾回転→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	“二”→18°(斜); “二”→18°(斜) (横斜)→18°(斜)	13径0.0cm, 口縁穿孔(底皮附、内→外)	68

第185図 IV層出土遺物(5)

器形は底部から体部へと内湾気味に立ち上がり、口縁部で内湾の度合いが増すものを基調とする。このほかには直線的に外傾するもの(第186図-1～3・10)口縁部が外反するもの(第186図-4)、口縁部と体部の境が括れ、口縁部は直線的に外傾するもの(第186図-5～7)、丸底ないしは丸底気味となるもの(第187図-4～6)がある。これらのうち、口縁部と体部の境が括れるものについては広口の壺となる可能性があり、また口縁部が内湾しないという点において後述する深鉢とは区別される。少数例として、波状口縁となるもの(第185図-12)や、口唇部に刻みを持つもの(第186図-1)が認められる。

装飾文様は、幅1.5mm未満の比較的細い沈線で施文されるもの(第185図-4～8・11・13、第186図-1・2・4・5・7・11、第187図-1・2・5)と幅2～3mmの比較的太い沈線で施文されるもの(第185図-1～3・9・10・12、第186図-3・6・8～10、第187図-3・4・6)に大別され、断面形状は、沈線幅を問わずV字状を呈するものと浅いU字状を呈するものがある。

施文部位は上半部に施文されるものを基調とし、丸底ないし丸底気味となる第187図-4～6は底部にも施文がおよぶ。器形と施文部位の関係が特徴的である。

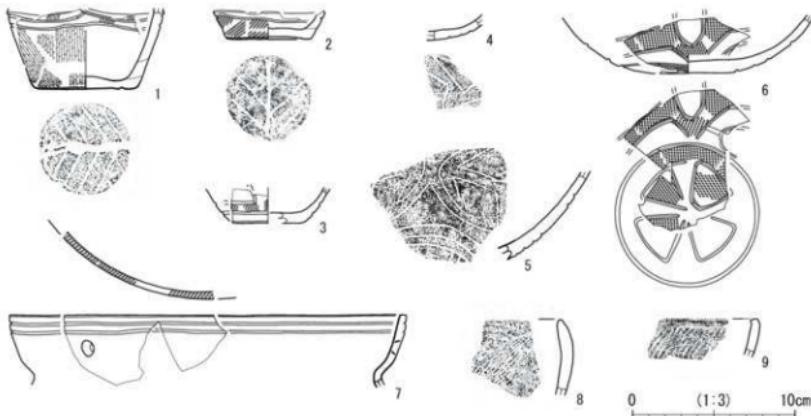


団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	類型	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B409	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	“一”字縦文→U字縫合部斜面→U字(有筋)。 →U字縫合部斜面 →U字縫合部斜面(横筋直縫文・波状文)	“一”字縫合部斜面 (横筋直縫文)	68	
2	B402	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	U字縫合部→U字内湾部 →U字(平) →U字縫合部(横筋直縫文・波状山形文)	U字縫合部→U字内湾部 (横筋直縫文)	68	
3	B455	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	U字縫合部→U字縫合部斜面→U字→U字 (横筋直縫文・波状文)	U字縫合部(密)	68	
4	B401	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	“一”字縫合部→U字(有筋) (横筋直縫文・波状文)	U字縫合部(密)	波状口縫、波状部欠失	68
5	B411	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	U字縫合部→U字上半→U字縫合部斜面 →U字縫合部斜面(横筋直縫文)	U字縫合部 →U字縫合部斜面(横筋直縫文)	U字縫合部(密)	68
6	B406	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	U字縫合部→U字縫合部斜面 →U字縫合部→U字縫合部(密)	U字縫合部→U字縫合部斜面 →U字縫合部→U字縫合部(密)	U字縫合部(密)	68
7	B403	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縁	U字縫合部→U字縫合部斜面→U字縫合部 →U字縫合部(密)	U字縫合部(密)	U字縫合部上半欠失	68
8	B400	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縫上半	U字縫合部→U字縫合部 (横筋直縫文)	不明	内外面摩耗(内面側)	68
9	B459	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	口縫上半	U字縫合部→U字縫合部 →U字縫合部(密)	U字縫合部(密)	68	
10	B407	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢	体	U字縫合部→U字縫合部斜面→U字縫合部 →U字縫合部(密)	U字縫合部(密)	68	
11	B409	IIK	-	刮削	抛光土器	鉢?	口縫上半	U字縫合部斜面→U字縫合部 (横筋直縫文)	U字縫合部(密)	U字縫合部上半欠失	68

第186図 IV層出土遺物(6)

文様意匠は、横直線文と連弧文もしくは連續山形文の組み合わせが多用され、口縁部内面にも横直線文が施されるものが数点みられる(第185図-1・12・13、第186図-1・2・4~6)。また、1点のみであるが、いわゆる鉢形圓式土器に特徴的な錐形文が施されたものがある(第187図-5)。少數例として、意匠不明の幾何学文が施されるもの(第185図-1・2、第187図-4)、三角形状の文様が施されるもの(第185図-3~8)、底部に4単位の三角文が放射状に施されるもの(第187図-6)が各1個体出土している。これらについては全体の器形や装飾が復元されたものではなく、また類例にも乏しいもので不明な点が多い。

装飾文様内には地文が施されるものが大部分であるが、地文が施されるものの中には充填繩文手法の再沈線が省略されたものや、最終段階のミガキ調整が細部にまで行き届かないものが多く、精製土器の中でも丁寧に製作されたものと比較的雑なものがみられる。また、幾何学文が施される第185図-1の文様内は、L R 繩文が回転施文される箇所、その後にL 繩文が回転施文される箇所のほか、ミガキ調整で無文となる箇所が観察される。体部下半を中心とする装飾文様が施されない部分には、L R 繩文の回転施文や植物茎回転文などが施されるものが多い。このほか、焼成前に口縁部内面側から穿孔されたものが1点のみ出土している(第185図-13)。

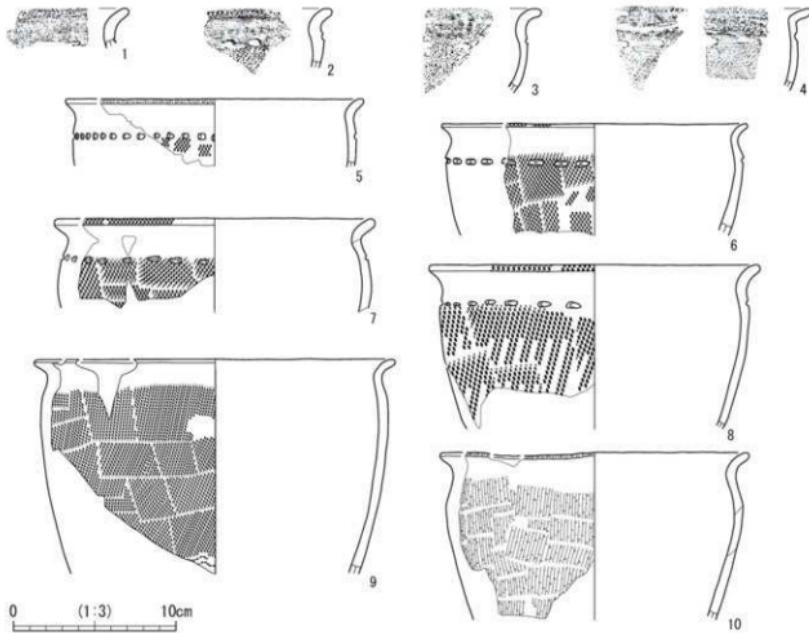


団版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外周調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-064	IIK	-	古層	陶生土器	鉢	体下半 -底	体下平・沈窓・植物茎回転文→沈窓 →フリーハンド内面充填 (植立茎文・幾何学文)。	ハサ付密	底径5.8cm、 底部内面赤色顔料付着	68
2	B-065	2次溝Ⅱ IIK	-	古d層	陶生土器	鉢	体下部 -底	体下部・沈窓・L R 繩文・斜面切削 →L R 繩→ハサ・沈窓内面及び底部赤色顔料付着 (植立茎文)。	ハサ付密	底径5.1cm	68
3	B-063	IIK	-	古d層	陶生土器	鉢	体下部 -底	体下平・沈窓→L R 繩文→沈窓→ハサ (植立茎文・連續山形文)。	ハサ付密	底径4.2cm	68
4	B-058	IIK	-	古d層	陶生土器	鉢	底	沈窓→L R 繩文→沈窓→ハサ (意匠不明の幾何学文)	ハサ		68
5	B-062	IIK	-	古d層	陶生土器	鉢	体下部 -底	沈窓→L R 繩文→沈窓→ハサ (意匠不明の幾何学文)	ハサ		68
6	B-061	IIK	-	古d層	陶生土器	鉢	体下平 -底	沈窓→L R 繩文→沈窓→ハサ(密) (植立茎文・連續山形文)・植物茎文	ハサ付密		68
7	B-066	IIK	-	古d層	陶生土器	深鉢	口縁 -体上部	口縁(L R 繩文)→口縁(L R 繩 →ハサ・体上部・横位)ハサ(密) (植立茎文)	横位ハサ(密)	口縫24.6cm、 内面赤色顔料付着 (焼成後、外→内、植株孔)、 外面部付着	68
8	B-067	IIK	-	古d層	陶生土器	深鉢	口縁	ハサ→L R 繩文横位回転	ハサ		68
9	B-068	IIK	-	古d層	陶生土器	深鉢	口縁	L R 繩文横位回転→沈窓?	ハサ付密	外面部沈窓?は整形術の可能性大	68

第187図 IV層出土遺物(7)

### 深鉢(第187図・7~9)

深鉢(深鉢と推定される破片資料を含む)として掲載されたのはわずか3点で、いずれも破片資料である。このうち、地文繩文が施文されるのみの第187図・8・9については、粗製の鉢となる可能性がある。第187図・7は復元された口縁部の器形から、器高30~35cm程の大型品と推定される。口縁部と体部の境に括れを持つものである



実物 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	基種	部位	外周調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-078	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上端	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上端:円点網突(左→右) →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:基底化物付着。 外周削耗。	68
2	B-084	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上端	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上端:円点網突(左→右) →1層:横位(左→右))	17mm→18mm(密)	68	
3	B-079	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:円点網突(左→右) →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	内外混化物付着	68
4	B-080	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:円点網突(左→右) →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:21.8cm	68
5	B-077	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:18.4cm, 外周削耗。	68
6	B-062	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:18.8cm 口縁:基底は2層部上端 外周削耗化物付着	68
7	B-075	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:19.6cm, 内外混化物付着	68
8	B-071	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様直筋3条。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	横位(左→右)(密)	口縁:20.4cm, 外周一次加热熱、内面削耗	68
9	B-072	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	17mm(密)	口縁:22.3cm, 口縁:1半外周化物付着	68
10	B-070	IIK	-	Ⅴd期	堆积土器	変	口縁 -体上半	口縁:32mm→17mm(上縁文様位回転。 体上半:1層文様位回転。 →1層:横位(左→右))	横位(左→右)	口縁:19.2cm, 体底:1半外周化物付着	69

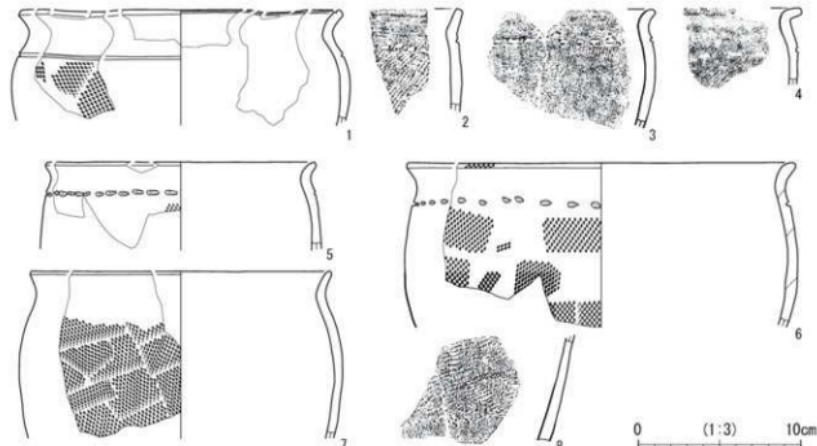
第188図 IV層出土遺物(8)

が、口縁部が内湾するという点で後述する甕とは区別される。外面の口縁部上端には断面形状がU字状を呈する幅2mm程の横位直線文が2条施文された後、丁寧なミガキ調整が施される。また、口縁部には焼成後に外面側から施された穿孔がみられるが、これは補修孔の可能性が高い。口唇部にはLR柾文が回転施文され、内面は外面と同様に、丁寧なミガキ調整が施される。

#### 甕(第188-189図)

甕(甕と推定される破片資料を含む)には全体の器形がわかるまでに復元し得たものはないが、大部分は器高20~25cm程の中型ないし大型品と考えられ、外面には二次加熱の痕跡や炭化物の付着が認められるものが多い。

器形は、最大径の位置を口縁部に持つもの(第188図)と体部上半に持つもの(第189図-1~7)に大別され、体部上半が膨らみ、程度の違いこそあるものの口縁部と体部の境に括れを持つものを基調とする。この括れは直角に近い角度で強く屈曲するもの(第188図-4・6・7・9・10、第189図-1~4)、鈍角に括れるもの(第188図-1・3・5・8、第189図-3・5~7)、括れがほぼ直線的なまでに緩やかなもの(第189図-2)に区別され、強く屈曲するものの中には、



図版番号	登録番号	調査区	出土地	部位	種別	器種	部位	外周調整(文跡)	内面調整(文跡)	備考	写真図版
1	B-076	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	69
2	B-086	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	内面炭化物付着	69
3	B-083	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	内面炭化物付着、 内外面一次加熱痕	69
4	B-085	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上端 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上端 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上端 (横位直線文)	内面炭化物付着	69
5	B-074	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	内面炭化物付着、 内外面一次加熱痕	69
6	B-073	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	内面炭化物付着、 表面剥落	69
7	B-081	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕	口縁 ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体上半 (横位直線文)	69
8	B-087	IIK	-	口縁 基盤	陶生土器	甕?	口縁 ～体下半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体下半 (横位直線文)	口縁23.0cm ～体下半 (横位直線文)	横位直線文	69

第189図 IV層出土遺物(9)

口唇部が真横を向くものがある(第188図-3・4、第189図-4)。

装飾文様が施文されるものは無く、口縁部は明瞭なヨコナデ調整が施され、体部には地文として繩文原体の回転施文や植物茎回転文が施文される。口唇部にも地文が施文されるものが多い(第188図-1～8・10、第188図-3・4・6)。また、この地文が施文される前段階の整形の痕跡が観察されるものがある(第188図-3・9)。地文はL R 繩文や植物茎回転文の回転施文を基調とし、少数例として、口唇部には植物茎回転文、体部には繩文原体が回転施文されるものが1点(第188図-5)、太さの異なるL R 繩文が回転施文されるものが1点認められる(第189図-8)。

外面の体部上端には口縁部(無文部)と体部(地文部)を区画するように列点刺突文が施文されるものが殆どである。施文の方向には左右の別が認められるほか、押し引き状に施文されるものがある(第188図-3・5)が、施文の方向や手法に際立った偏りは認められない。このほか、外面体部上端および口縁部内面に横位直線文が施文されるもの(第189図-1)や、地文のみが施文されるもの(第188図-9・10、第189図-7)がある。内面については、丁寧な横位のミガキ調整が施されるものが大部分である。

#### 蓋(第190図・第191図-1～7)

蓋(蓋と推定される破片資料を含む)は、口径15cm未満、器高7～8cm程と推定される小型品(第190図-4・11・13、第190図-1)、口径15～20cm、器高10cm強と推定される中型品(第190図-9)、口径20cm超、器高15cm前後もしくはそれ以上と推定される大型品(第190図-14、第191図-2)に三大別され、全体の器形が復元された第190図-8については、口縁部と体部上端(つまみ部下端)の比率がほぼ3:1、口縁部とつまみ部の比率が2.5:1となる。また、小型品と大型品には精粗の別が認められ、精製・粗製を問わず、使用の影響によるものと考えられる口縁部の黒色化や口唇部の摩耗が認められるものが多い。

器形は体部が外反する「八」字状の円錐台形を基調とし、口縁部はすべて平縁である。体部上半は体部下半に向かって外反するもの(第190図-9・11、第191図-2・5・7)、内湾するもの(第191図-1・4)、直線的なもの(第190図-5)のほか、強く屈曲して外側に張り出すもの(第191図-6)が1点出土している。体部下半から口縁部にかけては外反するもの(第190図-1・2、第191図-2)、内湾するもの(第190図-8・9～11・14)、直線的なもの(第190図-3・4・6・7・12・13、第190図-1・3)に、それぞれ大別され、体部下半が直線的なものについては、口縁部のみが短く外反するもの(第190図-6・7・12・13)が認められる。天井部は、つまみ部を有するもの(第190図-8)、平坦なもの(第191図-4～7)のほか、丸みを帯びるもの(第191図-1)がある。第190図-4のつまみ部は、直線的にやや外傾する高さ3cm程の低いリング状を呈するものである。天井部が平坦なものの中には、第191図-4のように周縁がつまみ上げられるものがある。天井部が丸みを帯びる第191図-1は内面調整が難であることから粗製の蓋?としたが、鉢の可能性も十分に考えられるものである。

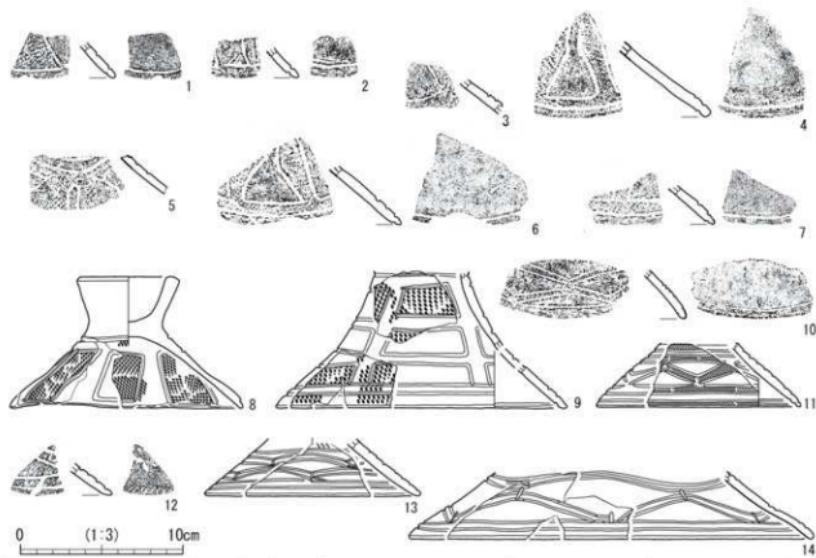
装飾文様は、幅1.5mm未満の比較的細い沈線で施文されるもの(第190図-13・14、第191図-4～6)と、幅2～3mm程の比較的太い沈線で施文されるもの(第190図-1～12)に大別され、断面形状は、いずれもU字状を呈する。施文部位については破片資料が多いため判然としない部分もあるが、外面全体に施文されるものと外面の体部下半以下に限定的に施文されるもの、また口縁部内面にも施文されるものがある。

文様意匠は、横位直線文と連弧文或いは連続山形文の組み合わせを基調とし、このほかに方形文(縱位・横位)や、三角形状の文様意匠が横位直線文と組み合わせて施文されるものがある。連弧文は横位に半単位ずらして2段にわたって施文されるもので、第190図-13・14のように、隣り合う単位の境界に縱位の短い沈線が加わるものもある。連続山形文には、第190図-11のように点対称に施文され、沈線内が赤彩されるものがある。

第190図-1・2、同図-3・4、同図5～7は、それぞれ同一個体の破片資料で、体部外面には三角形状の文様意匠が施文されるものである。4や5・6をみれば、二等辺三角形の長辺が括れ、文様上半部が直立気味となる。また、同図-8・9はいずれも横位直線文と方形文の組み合わせが施文されるものであるが、前者は縱長の長方形が推定7単位、

後者は推定8単位の横長の長方形が3段にわたり層状的に施文されることにより、格子状の無文部が表出される。

文様内には地文が施文されるものが大部分であり、他の器種に比べて磨文繩文手法によるものが多い。また、第190図-12のように、口縁部内面にも地文が施文されるものがみられる。地文が施文されない部分はミガキ調整が施されるものが多いものの、ミガキ調整の程度には粗密が認められる。



図版番号	登録番号	調査区	出土堆	層位	種別	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	参考	写真図版
1	B-097	IIK	-	方縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	LB繩文(把り目)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	B-097-098同一個体	69
2	B-098	IIK	-	方縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	LB繩文(把り目)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	B-097-098同一個体	69
3	B-093	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体下端 -1層	虎頭-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	B-092-093同一個体	69
4	B-092	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	虎頭-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	B-092-093同一個体	69
5	B-094	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体上半 -1層	虎頭-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩)	内面の1/2は素面状 B-094-096同一個体	69
6	B-096	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	虎頭-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	内面の1/2は素面状 B-094-096同一個体	69
7	B-095	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	虎頭-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	内面の1/2は素面状 B-094-096同一個体	69
8	B-088	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	つまみ -1層	延繩-1層繩文-沈繩 -延繩-1層(横位ヨリ密) (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体-1層(横位ヨリ密)	1口径4.3cm、底径6.4cm、 高さ4.1cm。 丸井内面黒色化 1口径外周黒色化 1口径内面黒色化 つまみ底部D2.0cm、頂部黒化	69
9	B-089	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体 -1層	LB繩文横位-縫合回転-沈繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体-1層(横位ヨリ密)	口径18.0cm、 底径9.0cm。	69
10	B-100	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	延繩-1層繩文-沈繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	内面黒化物付着および黒化 1口径外周黒化	69
11	B-099	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃	体 -1層	延繩-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	口径12.6cm、 底径外周黒化	69
12	B-101	IIK	-	方縁	弦生土器	盃	体下半 -1層	延繩-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩) -体下-1層(横位ヨリ密)	内面の1/2黒化	69
13	B-091	IIK	-	方縁	弦生土器	盃	体 -1層	延繩-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩)	口径13.0cm、 底径外周黒化	69
14	B-090	IIK	-	円d縁	弦生土器	盃or 盃	体下半 -1層	延繩-1層(沈繩)-延繩→18° (△角形の文様並び)	ツラギ-1層(沈繩)	口径25.0cm、 底径外周黒化	69

第190図 IV層出土遺物(10)

### 土製品(第191図-8)

第191図-8は、ヘラナデにより整形された後、部分的にミガキ調整されるもので、スプーン形土製品の把手部破片と思われる土製品である。部分的なものであるため、不明な点が多い。

出版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外周調整(文様)	内面調整(文様)	備考	写真回数
1	B-107	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞?	天井→底:18°→18°(30cm) or深:18°→18°(30cm)	天井→底:18° →18°(30cm)	天井→底:18° →18°(30cm)	口径10.0cm、底高7.2cm、 内面輪郭線明瞭	69
2	B-106	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	底:18°→18°	18°→18°	底面内面輪郭、 内面化粧付	69	
3	B-105	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	底下平 →18°	18°→18°	口縁部内面化粧物付着 および黒色化	69	
4	B-104	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	天井 →底:18°→底面2度上昇 (底付直線文・山形文・弧)	18°→18°	天井径5.1cm	69	
5	B-102	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	天井 →底:18°(直)	18°→18°	天井径4.2cm	69	
6	B-103	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	天井 →底:18° (底付直線文)	18°→18°(直)	天井径4.7cm、 天井内面化粧物付着	69	
7	B-108	IIK	-	Nd層	弥生土器	盞	天井 →底:18°	18°→18°	天井径6.3cm、 天井外周剥離	69	

出版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)			写真回数		
							長	幅	厚			
8	B-019	IIK	-	Nd層	土製品	アーチ形 土製品	(2.7)	(2.6)	(2.1)	(14.8)	18°→18°, 把手部破片か	69

第191図 IV層出土遺物(11)

### b. 石器(第192~201図)

IV層からは、打製石器274点、礫石器4点が出土した。両者の割合を百分率に換算すると、打製石器が全体の98.8%を占め、礫石器はわずか1.2%となる。これらの石器のうち、二次加工の施されていない剥片と、他の剥片との接合関係が認められなかった剥片を除く打製石器78点、礫石器4点、総数82点を掲載した。なお、出土地不明の打製石器1点については、本節(9)に掲載した。

以下、各種別について器種毎に記載する。出土調査区、層位等の諸属性については、観察表を参照されたい。

#### 1) 打製石器(第192~200図)

石鏨2点、尖頭器1点、石錐4点、ビエス・エスキュー10点、二次加工のある剥片28点、微細剥離痕のある剥片28点、石核4点、大型板状石器1点を掲載した(第192~200図)。定形石器の特徴としては、狩猟具や武器としての用途が考えられる石鏨や尖頭器よりも、加工工具としての用途が考えられる石錐やビエス・エスキューが多い傾向が認められる。

なお、本文中で使用した二次加工のある剥片については、素材剥片に剥離による調整を施した不定形な石器を示

218

している。二次加工のある剥片には微細剥離痕も複合して観察されるものもあるが、剥離による調整と微細剥離痕が複合して認められるものは便宜的に二次加工のある剥片とし、微細剥離痕が単独で認められるものについては、微細剥離痕のある剥片としている。

#### 石鎚(第192図-1・2)

薄手の小型剥片を利用して、鋭利な尖端部が作出されたものを石鎚とした。

第192図-1・2は、共に形態が整えられておらず、未完成と考えられる。1はa・b両面に素材面が広く残存する。先端部および基部を作出中に折損し、作業が中断されている。基部の大半を失っているが、この時期の石鎚の形態的特徴から、有茎石鎚と推定される。石材は碧玉である。2は器体の整形中に折損し、さらに厚さを減らそうと試みているが、作業が中断されている。基部の形状は不明である。石材は、珪質頁岩である。

#### 尖頭器(第192図-3)

第192図-3は、石鎚の可能性も考えられるが、今次調査において出土した石鎚完成品(第215図-1～3)は厚さ0.4cm～0.5cmであるのに対し、1.0cmと厚みがあり、重量も6.44gと重量差もあることから、尖基石鎚ではなく尖頭器とした。

a・b両面に素材剥離面が残存しており、a面にはわずかに自然面も認められる。a・b両面の周縁から連続する剥離調整を施し尖端部が作出され、平面形態はやや細身の木葉形を呈している。側縁の形状は整えられておらず側面縁はジグザグ状を呈する。石材は、流紋岩である。

#### 石錐(第192図-4～7)

剥離調整により尖端部が作出されたものを石錐とした。石鎚や尖頭器の尖端部よりも、石錐の尖端部の方が幅と厚みがあることから、それを両者の分別基準とした。IV層から出土した石錐には、尖端部と基部の境界が明瞭なもの(5)と不明瞭なもの(6・7)と、折損しているため平面形態が不明なもの(4)が認められる。

第192図-4は、a面右側縁に自然面、a・b両面に節理面が観察される。a・b両面に剥離調整が施され、特にa面左側縁およびb面右側縁が顯著である。基部は折損し、尖端部の断面形状は三角形を呈する。石材は、碧玉である。

第192図-5は、a面の一部に自然面が残存する剥片を素材とし、a・b両面の周縁から剥離調整が施され、尖端部は連続する急角度の剥離によって入念に整形されている。断面形状は、基部が扁平な菱形、尖端部は六角形を呈する。石材は、珪質頁岩である。

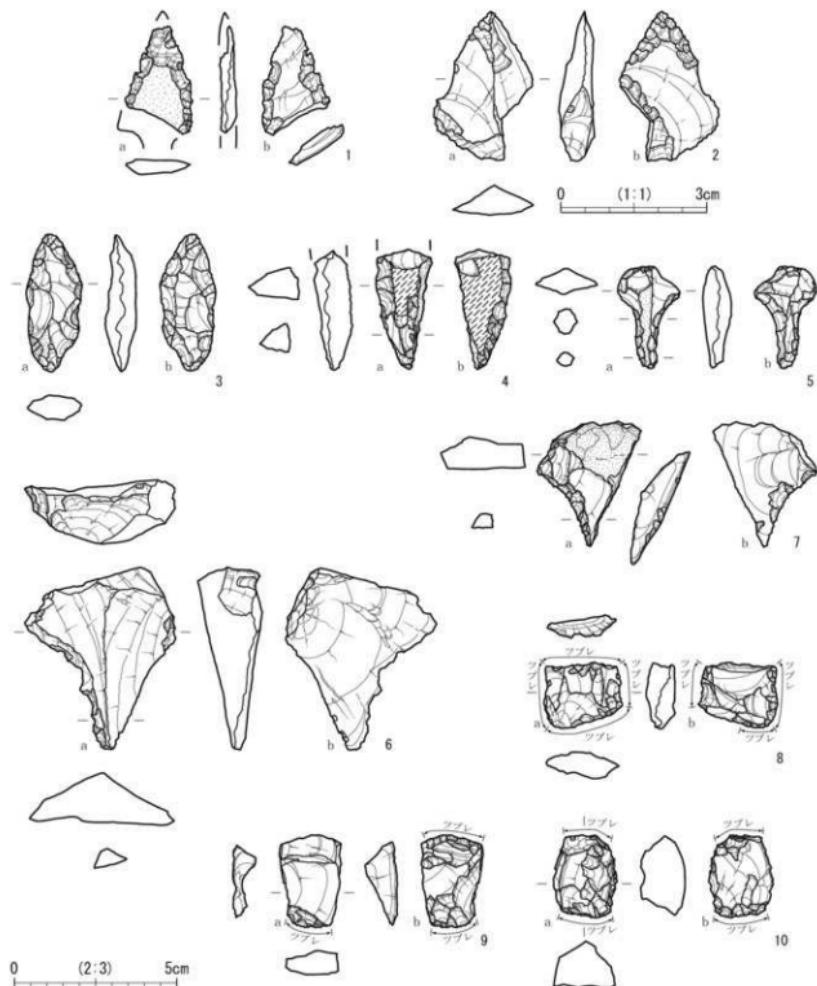
第192図-6は、素材剥片の形状を利用して、a面左側縁方向からの急角度な剥離調整のみで尖端部が作出されている。断面形状は基部が扁平で幅広な三角形、尖端部が三角形を呈する。石材は、流紋岩である。

第192図-7は、a面上端部側に自然面が残存し、折り取りによって形成された尖端部にa・b両面から剥離調整が施されている。断面形状は、基部が扁平な五角形、尖端部が台形を呈する。石材は、流紋岩である。

#### ビエス・エスキュー(第192図-8～10、第193図-1～7)

両縁辺がそれぞれ対となる剥離調整と、ツブレ状の剥離痕が認められるものをビエス・エスキューとした。

IV層から出土したビエス・エスキューには、上下両端縁と左右両側縁がそれぞれ対となり、2対の剥離調整が認められるもの(第192図-8)、上下両端縁が対となる剥離調整が認められるもの(第192図-9・10、第193図-1～3)、破損により縁辺に対となる剥離調整は認められないものの、縁辺の形状からビエス・エスキューと判断されるもの(第193図-4)、縁辺に対となる剥離調整が認められないもので、ビエス・エスキュー本体から両極剥離によって剥



第192図 IV層出土遺物(12)

団版 番号	登録 番号	調査区	場所	種別	器種	法長cm 長さ 幅 厚さ	調理角 (度)	重さg	石材	母岩	打削 形状	自然面	備考	写真 枚数
1	Ka-012	IK	N	打製石器	石器	12.0 (1.4) 0.4	-	60.93	引玉	42	-	有	有茎、未成品、素材面残す	70
2	Ka-011	IK	打製石器	石器	3.1 (1.6) 0.8	-	(2.17)	珪質頁岩	33	-	無	未成品、素材面残す	70	
3	Ka-013	IK	N	打製石器	尖頭器	4.2 1.6 1.0	-	6.44	流紋岩	-	有	木葉形、両面加工	70	
4	Ka-017	IK	N	打製石器	石器	1.1 1.7 1.0	-	60.50	引玉	-	有	A面+B面加工、尖端部のみ	70	
5	Ka-018	IK	打製石器	石器	3.2 1.9 0.9	-	2.89	珪質頁岩	38	-	有	A面+B面加工、尖端部、長さ1.9×幅0.8(cm)	70	
6	Ka-014	IK	打製石器	石器	5.3 4.6 1.8 1.30	27.69	流紋岩	-	切子	-	有	A面加工、尖端部、長さ2.4×幅1.9×厚0.8(cm)	70	
7	Ka-015	IK	N	打製石器	石器	3.9 2.7 1.1 1.08	8.39	流紋岩	11	平坦	有	A面+B面加工、尖端部、長さ1.7×幅1.5×厚0.8(cm)	70	
8	Ka-024	IK	打製石器	U'AX-13B-2	1.9 2.3 0.8	-	4.51	磨研	-	無	2対の二次加工あり	70		
9	Ka-021	IK	打製石器	U'AX-13B-2	2.8 1.9 1.0	-	6.10	流紋岩	1	-	無	1対の二次加工あり	70	
10	Ka-019	IK	打製石器	U'AX-13B-2	2.5 2.0 1.5	-	8.64	磨研	47	-	無	1対の二次加工あり	70	

離された碎片と考えられるもの(第193図-5～7)がある。

第192図-8は、左右両側縁に対となるツブレ状の剥離痕が形成され、折り取りによって上端面が形成された後、a面の上下両端縁に対となるツブレ状の剥離痕が形成される。

第192図-9は両側面が折り取りと下端縁からの剥離によって生じた剥離面によって形成されている。b面上端縁とa・b両面の下端縁に対となるツブレ状の剥離痕が観察される。

第192図-10は、厚みのある剥片を素材とし、上下両端縁に対となるツブレ状の剥離痕が観察される。a面中央に認められる核上からの剥離痕は、素材剥片の剥離以前に形成された剥離面である。

第193図-1は、a面右側縁側にわずかに自然面が残存し、a面上下両端縁に対となる剥離痕が観察される。b面上端縁からスパールが剥離され、広く平坦な剥離面が形成されている。

第193図-2は、a面下端部の一部とc面に自然面が残存し、a・b両面の上端縁とa面下端縁に対となるツブレ状の剥離痕が観察される。b面の広い剥離面は、両板剥離によるものである。

第193図-3は、b面上下両端部とc面下端部に自然面が残存する。a・b両面の上下両端に対となるツブレ状の剥離痕が観察される。

第193図-4は、a・b両面の上端縁とa面左側縁にツブレ状の剥離痕が観察されるものの、a面右側縁側とb面下端部は火ハネにより欠損しており、1対か2対になるのかは不明である。

第193図-5は、上端縁にツブレ状の剥離痕が観察される。b面の主要剥離面は両板剥離によるもので、ピエス・エスキュー本体の下端縁まで達しておらず、a面下端縁右隅に微細剥離痕が観察される。

第193図-6は、a面右側縁側に自然面、b面中央下端寄りに節理面が残存する。a・b両面の下端縁にツブレ状の剥離痕が形成され、b面上端部は両板剥離によって剥離されている。

第193図-7は、a面左側縁およびa・b両面の下端縁にツブレ状の剥離痕が形成され、b面上端から右側縁側にかけて両板剥離によって剥離される。

ピエス・エスキューに用いられている石材は多様で、瑪瑙(第192図-8・10、第193図-6)、流紋岩(第192図-9、第193図-6)、珪化凝灰岩(第193図-1・2)、玉髓(第193図-3)、珪質頁岩(第193図-5)、碧玉(第193図-7)である。

## 二次加工のある剥片(第193図-8～13、第194図-1～9、第195図-1～10、第196図-1～3)

IV層から出土した二次加工のある剥片には、剥離調整がa・b両面に施されるもの(第193図-8～13、第194図-1～8)、剥離調整が背面であるa面のみに施されるもの(第194図-9、第195図-1～5)、剥離調整が腹面であるb面のみに施されるもの(第195図-6～10、第196図-1～3)に大別される。

剥離調整は平坦剥離が大半で、急角度な剥離(第193図-12、第195図-7)やツブレ状の剥離(第194図-8、第195図-2)がわずかに認められる。また、自然面が残存するものは、27点中19点と半数以上を占める(第193図-8・10・12、第194図-2・3・5・6・8・9、第195図-1・3・6・5・8～10、第196図-1～3)。末端部の形状は大半がフェザーエンドであるが、わずかにヒンジフラクチャー(第195図-1・2)や、ウートラバッセ(第195図-6)となっているものが認められる。

このほか、微細剥離痕と複合して認められるものがある(第194図-1・4～6・9、第195図-1・2、第196-3)。第193図-8～11は、本来の素材形状の大部分を留めたまま製作作業が中断された石錠未成品の可能性が考えられ、製作工程の中でも初期段階と推測される。しかし、縁辺への剥離調整がごくわずかに観察される程度であることから、二次加工のある剥片として報告する。

第193図-8は、a面右側縁およびb面の左右両側縁からの剥離調整により、尖端部が作出されるものである。a面左側の厚みが薄いことにより、作業が中断されたものと推測される。

第193図-9は、b面端部に節理面が観察される。a面左側が薄いことにより作業が中断されたものと推測される。第193図-10は、a面上端部およびb面右側縁からの剥離調整により尖端部が作出される。a面中央の厚みを減らすためには横幅が足りないことから作業が中断されたものと推測される。

第193図-11は、a・b両面の左右両側縁から剥離調整が施され、作業途中に上下両端部が破損したものと推測される。

第194図-1は、a・b両面の周縁に連続した剥離調整が施される。

第194図-2は、a・b両面の上下両端縁から連続した剥離調整が施され、a面右側縁にはノッチ状の抉りが作出されている。

第195図-7は、a面上端縁および右側縁から急角度の連続した剥離調整が施されることで尖端部が作出されている。

二次加工のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(第193図-11、第194図-3～6・9、第195図-1・2・5・6、第196図-1・3)が最も多く、次に珪化凝灰岩(第193図-10、第194図-2・8、第195図-9・10)や珪質頁岩(第193図-8・13、第195図-7・8)が用いられているほか、小数例として、碧玉(第193図-9、第194図-1)、玉髓(第193図-12、第195図-3)、黒色頁岩(第194図-7、第196図-2)、瑪瑙(第図-4)がある。

#### 微細剥離痕のある剥片(第196図-4～9、第197図-1～8、第198図-1～8、第199図-1～6)

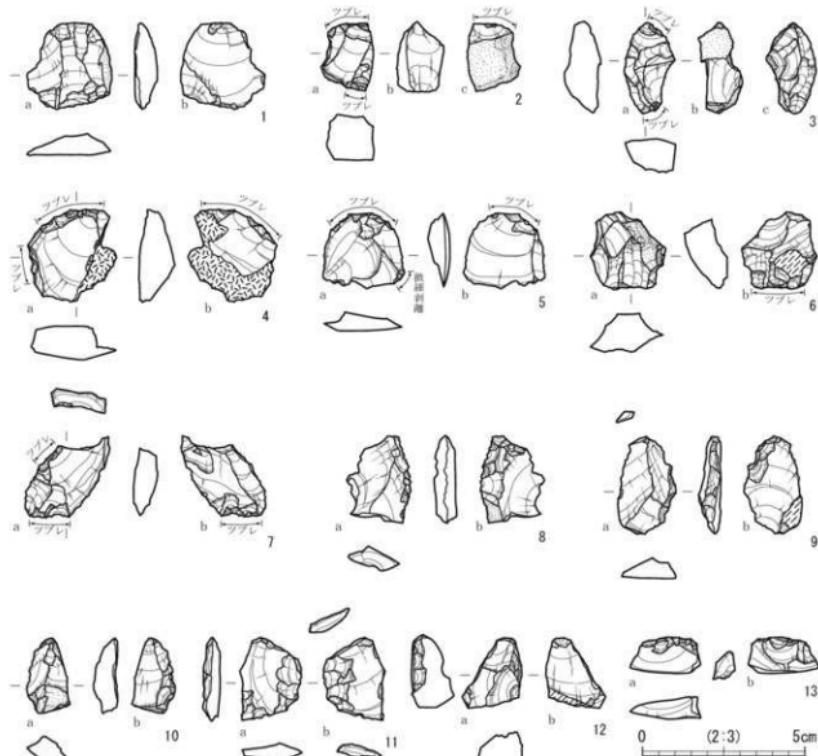
素材剥片に剥離による調整が認められず、微細剥離痕のみが観察されるものを微細剥離痕のある剥片とした。微細剥離痕の基準は、「2mm以下の微細剥離痕が一定の長さにわたり連続して認められるもの(東北歴史資料館1984)」とした。微細剥離痕のある剥片については、同じ特徴を有するもの多いため、一括して記載する。

IV層から出土した微細剥離痕のある剥片は、1縁辺に微細剥離痕が観察されるもの(第196図-4～9、第197図-1～8、第198図-1)、複数の縁辺に微細剥離痕が観察されるもの(第198図-2～8、第199図-1～6)に大別される。これら28点中12点と、半数近くに自然面が残存する(第196図-5、第197図-1・3～5・7・8、第198図-1・6・7、第199図-5・6)。素材剥片の形状は横長剥片が大半で、わずかに縱長剥片(第196図-4・9、第197図-2・8、第198-4・5)が認められる。

また、打面縁部がリップ状を呈するもの(第196図-9)や、明瞭な打点が観察されバルブが発達するもの(第198図-1・6・8、第199図-5)が認められる。末端の形状は大半がフェザーエンドであるが、ウートラバッセとなっているものが1点ある(第199図-1)。a面の背面構成をみると、複数の方向から剥片剥離が行われていることから、素材となった剥片は打面転移が頻繁に行われた石核の一端から剥離されたものと考えられる。

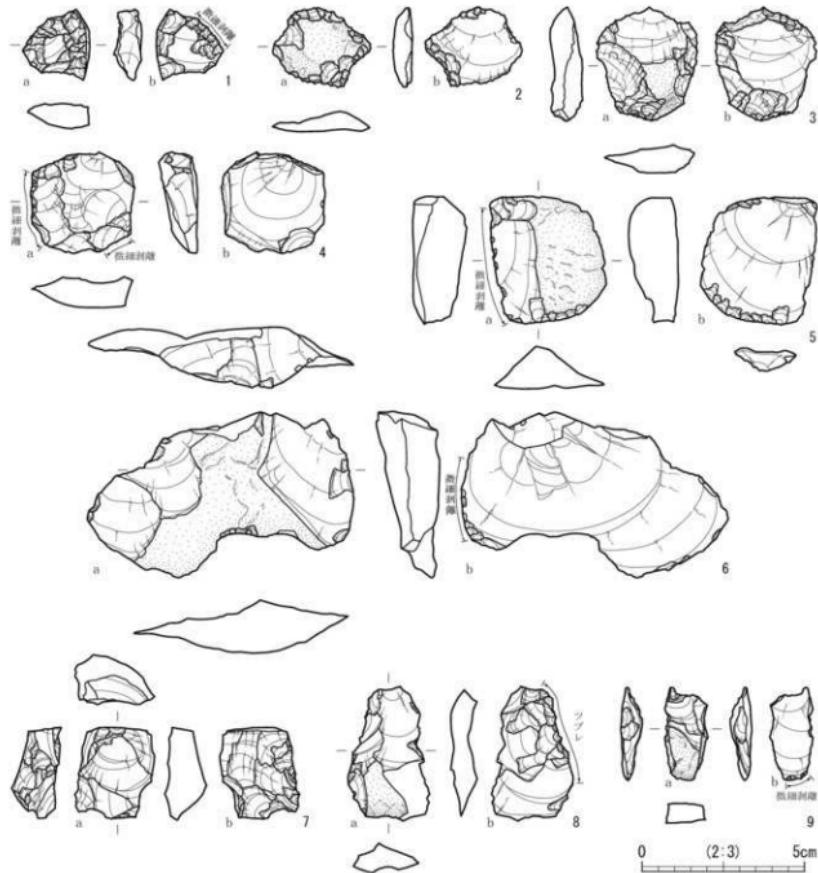
この他、火ハネにより欠損しているもの(第196図-4、第198図-2)、素材の原石が良質でないため剥片剥離の際に同時に割れが生じているもの(第197図-1、第198図-4、第199図-1)、a面の右側縁側に折り取りが行われているもの(第196図-8)、a面中央の稜線にマツツが観察されるもの(第198図-5)がわずかに出土している。

微細剥離痕のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(第196図-5・9、第197図-1・3・4・8、第198図-1・5、第199図-1・4・6)が多く、次に珪質頁岩(第196図-6、第197図-6、第198図-2・4・6・7、第199図-3)や黒色頁岩(第196図-8、第197図-2・7、第198図-3・8)、珪化凝灰岩(第196図-7、第197図-5、第199図-2・5)のほか、少數例として、碧玉(第196図-4)がある。



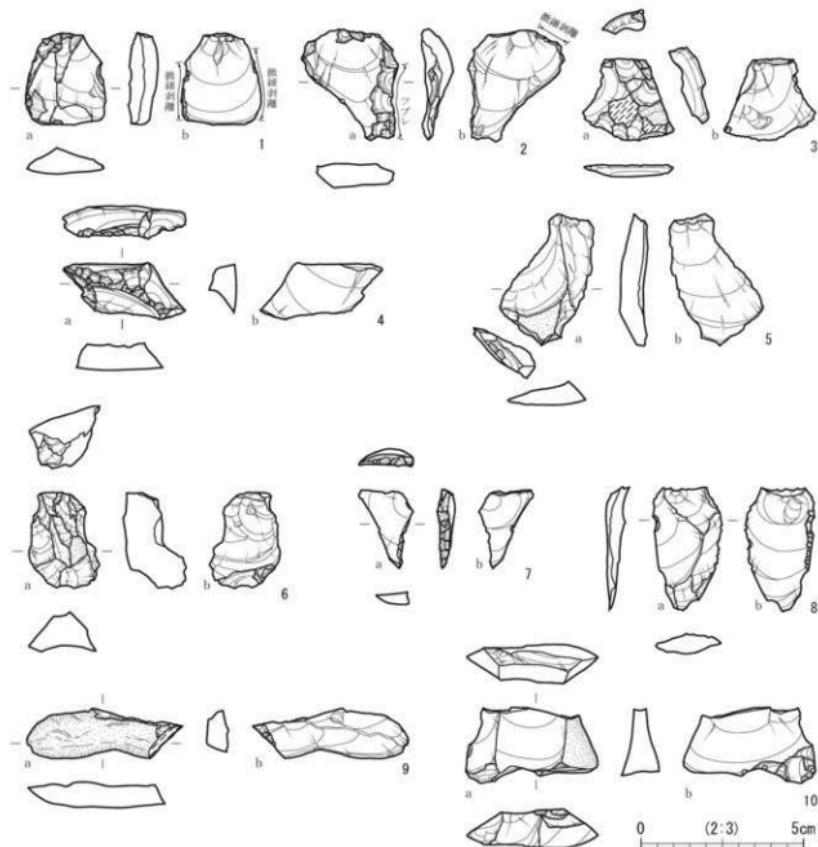
出展 番号	登録 番号	調査区	層位	種類	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	測定角 (度)	重さ(g)	石種	母岩	打削 形状	自然面	備考	写真 枚数
1	Ka-022	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.7	2.6	0.7	-	4.47	珪化顕灰岩	-	-	有	1封の二次加工あり	70
2	Ka-025	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.1	1.7	1.4	-	6.76	珪化顕灰岩	40	-	有	1封の二次加工あり	70
3	Ka-026	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.8	1.5	1.1	-	4.63	玉髓	50	-	有	1封の二次加工あり	70
4	Ka-003	2次調査 II-2-2	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.6	2.8	1.3	118	8.31	成灰岩	24	平坦	無	1縫道に二次加工あり、火候による欠損	70
5	Ka-066	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-24-1	2.3	2.5	0.7	94	2.75	珪質頁岩	27	織	無	U-13-1-24-1の3件片。1縫道に二次加工あり	70
6	Ka-020	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.3	2.2	1.1	-	6.77	瑪瑙	45	-	有	U-13-1-23-1の3件片。1縫道に二次加工あり	70
7	Ka-022	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1	2.5	2.0	1.0	-	3.26	碧玉	44	-	無	U-13-1-23-1の3件片。1縫道に二次加工あり	70
8	Ka-048	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 未記載片	2.7	1.9	0.7	-	2.86	珪質頁岩	34	-	有	有磨耗面。1縫道に二次加工あり。	70
9	Ka-051	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 ある片	3.0	1.7	0.7	114	3.05	碧玉	-	織	無	石器未完成品。a面+b面加工。 1縫道に二次加工あり	70
10	Ka-049	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 ある片	2.3	1.3	0.7	-	1.81	珪化顕灰岩	39	-	有	石器未完成品。a面+b面加工。 1縫道に二次加工あり	70
11	Ka-041	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 ある片	2.5	1.9	0.5	-	2.26	成灰岩	-	-	無	a面+b面加工。複数断面に二次加工あり	70
12	Ka-052	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 ある片	2.1	1.8	1.2	-	4.27	玉髓	50	-	有	a面+b面加工。複数断面に二次加工あり	70
13	Ka-047	IIK	Ⅳd層	打製石器	U-13-1-23-1 ある片	2.1	1.1	0.7	-	1.24	珪質頁岩	33	-	無	a面+b面加工。1縫道に二次加工あり	70

第193図 IV層出土遺物(13)



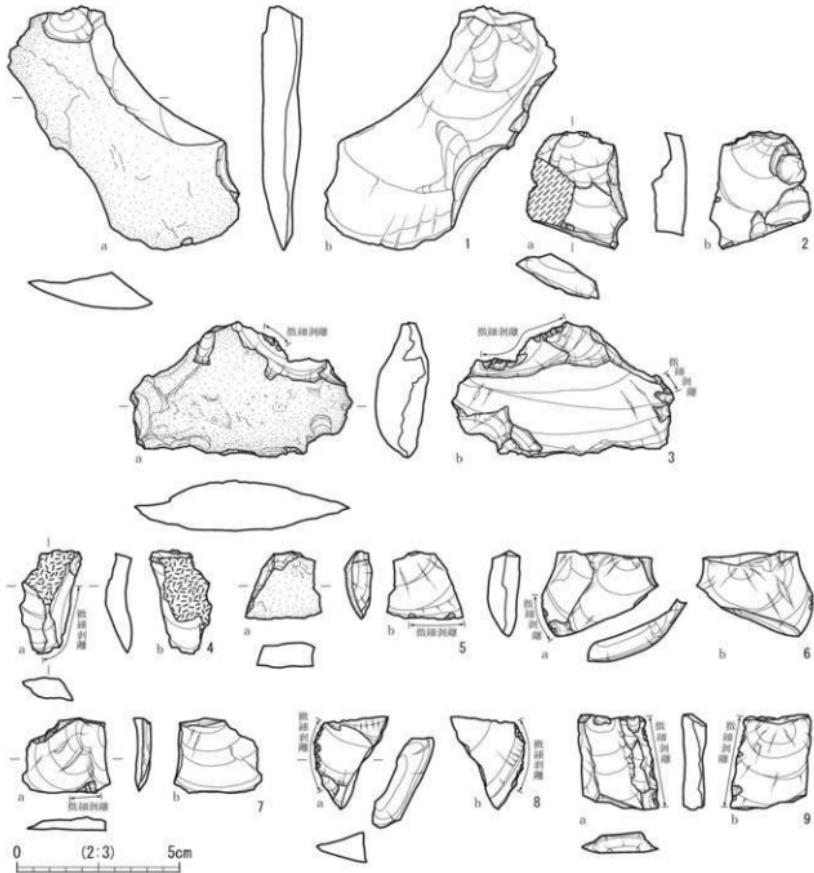
試験番号	登録番号	調査区	層位	種別	器種	法長(cm)			調整値 (%)	重さ(g)	石材	母岩	打削形狀	自然面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-032	IK	Ⅳ層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.3	2.3	0.8	-	3.24	碧玉	44	-	無	a面+b面加工、複数縫合に二次加工あり。 1縫合に微細剥離あり。	70
2	Ka-016	IK	Ⅳ層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.3	2.3	0.6	-	3.36	珪化雲灰岩	-	-	有	a面+b面加工、複数縫合に二次加工あり	70
3	Ka-045	IK	Ⅳ層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.5	3.1	1.1	-	9.51	流紋岩	3	-	有	a面+b面加工、複数縫合に二次加工あり	70
4	Ka-044	IK	Ⅳ層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.1	3.2	1.2	140	11.17	流紋岩	11	切子	無	n面+b面加工、複数縫合に一次加工あり。 複数縫合に二次加工あり。	70
5	Ka-043	IK	Ⅳd層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.9	3.6	1.5	118	18.76	流紋岩	9	自然	有	1面+2面加工、複数縫合に一次加工あり。 複数縫合に二次加工あり。	70
6	Ka-042	IK	Ⅳd層	打製石器	二次加工の ある剥片	5.3	8.3	2.0	132	41.05	流紋岩	6	切子	有	a面+b面加工、複数縫合に二次加工あり。 1縫合に微細剥離あり。	70
7	Ka-066	IK	Ⅳd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.8	2.5	1.4	-	9.18	黑色頁岩	29	-	無	a面+b面加工、複数縫合に二次加工あり	70
8	Ka-050	IK	Ⅳd層	打製石器	二次加工の ある剥片	4.1	2.4	0.9	-	7.11	珪化雲灰岩	39	-	有	a面+b面加工、1縫合に二次加工あり	70
9	Ka-030	IK	Ⅳd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.8	1.3	0.7	-	2.28	流紋岩	4	-	有	a面+b面加工、複数縫合に一次加工あり。 1縫合に微細剥離あり。	70

第194図 IV層出土遺物(14)



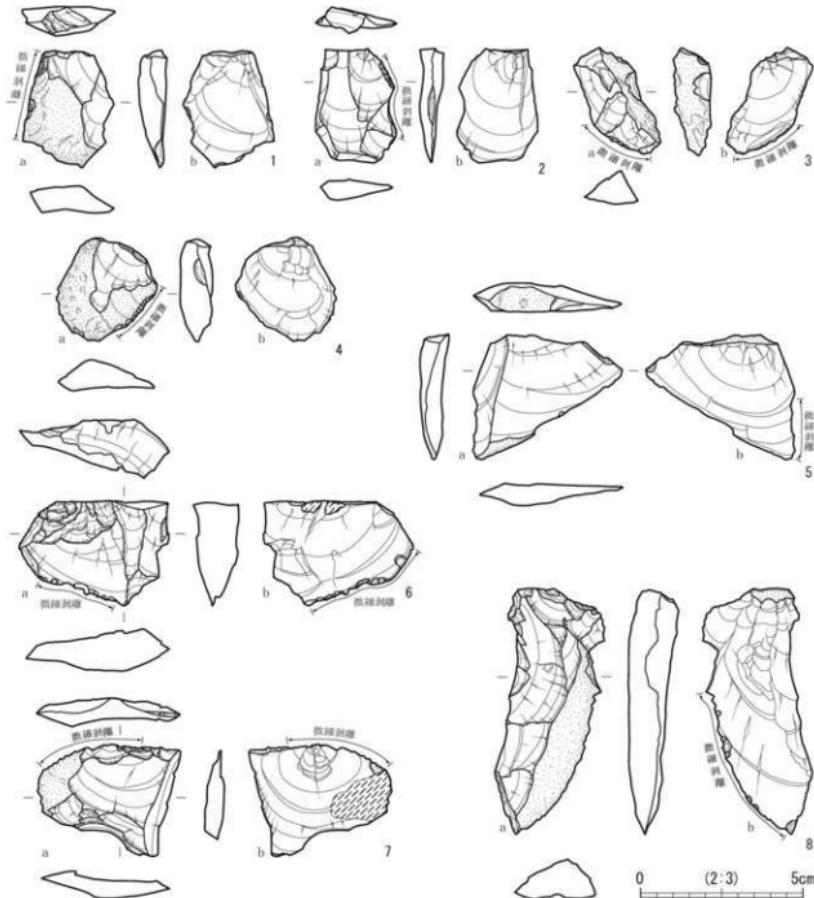
団版番号	登錄番号	調査区	層位	種別	器種	法長(cm) 長さ 幅 厚さ	剥離角 (度) 度数	重さ(g)	石材	母貝	打削 形狀	自然面	備考	写真 枚数		
1	Ka-031	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.8	2.5	0.9	135	6.31	波紋岩	19	無	a面加工。1縁辺に二次加工あり。 b面辺に微細剥離痕あり。	71	
2	Ka-028	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.2	2.9	0.9	136	7.58	波紋岩	-	半圓	無	a面加工。1縁辺に二次加工あり。 b面辺に微細剥離痕あり。	71
3	Ka-034	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.5	2.3	0.8	-	5.14	玉貝	51	-	有	a面加工。複数辺に二次加工あり	71
4	Ka-033	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	1.6	2.8	1.0	-	4.18	瑪瑙	49	-	無	a面加工。桂上に二次加工あり	71
5	Ka-029	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	4.0	2.8	0.9	118	5.66	波紋岩	-	半圓	有	a面加工。1縁辺に二次加工あり	71
6	Ka-046	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.0	1.2	2.0	122	7.31	波紋岩	3	切子	有	b面加工。1縁辺に二次加工あり	71
7	Ka-038	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.4	1.5	0.4	128	1.17	珠貝直巒	36	半圓	無	b面加工。複数辺に微細剥離痕あり	71
8	Ka-037	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	3.8	2.2	0.6	125	3.02	珠貝直巒	35	半圓	有	b面加工。1縁辺に二次加工あり	71
9	Ka-040	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	4.6	1.5	0.8	-	5.97	珪化瑪瑙岩	40	-	有	b面加工。1縁辺に二次加工あり	71
10	Ka-039	IK	Nd層	打製石器	二次加工の ある剥片	2.4	4.1	1.4	-	10.19	珪化瑪瑙岩	37	-	有	b面加工。1縁辺に二次加工あり	71

第195図 IV層出土遺物(15)



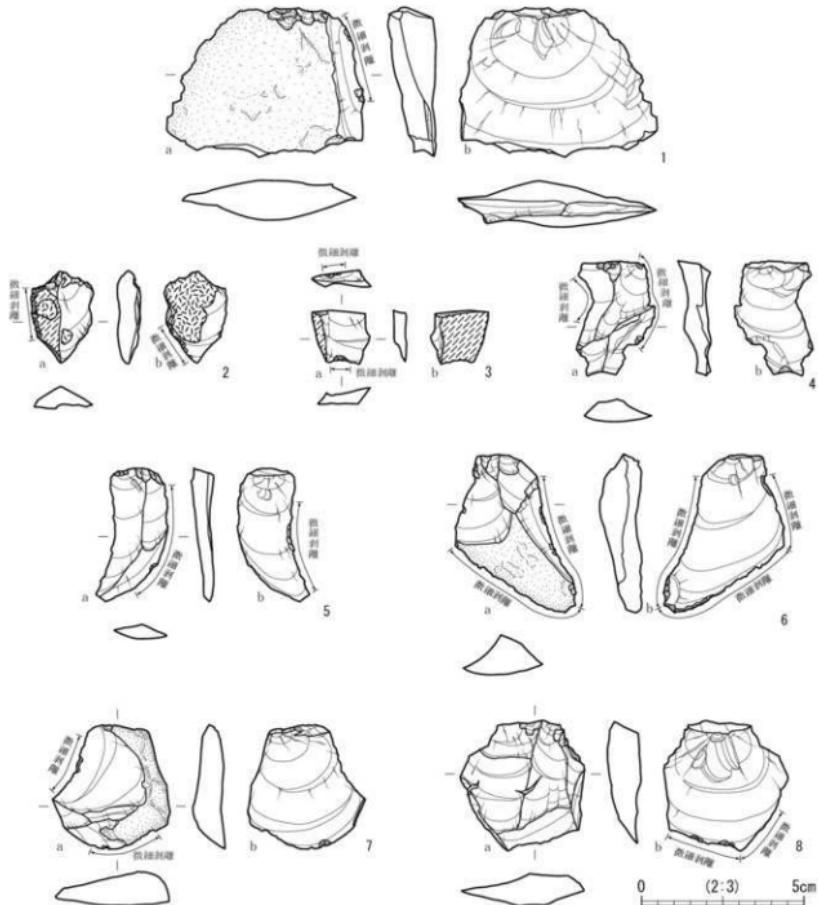
図版番号	登録番号	調査区	層位	種類	器種	法面(cm)	傾斜角	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	母岩	打削状況	自然面	備考	写真	
1	Ka-035	IIK	Ⅴd層	打製石器	二次加工の ある片岩	7.5	7.1	1.2	128	流紋岩	6	平坦	有	b面加工。1層辺に二次加工あり。	71	
2	Ka-036	IIK	Ⅴd層	打製石器	一次加工の ある片岩	3.3	3.1	1.0	115	11.50	黑色頁岩	-	切子	無	b面加工。1層辺に二次加工あり。	71
3	Ka-004	2次溝金 1号坑	Ⅴd層	打製石器	一次加工の ある片岩	4.1	6.9	1.7	-	41.50	流紋岩	-	-	b面加工。載物跡辺に二次加工あり。 複数辺に微細剥離痕あり。	72	
4	Ka-072	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	3.2	1.9	0.2	-	3.59	碧玉	44	-	無	1層辺に微細剥離痕あり。火穴による欠損	72
5	Ka-060	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	2.1	2.3	0.8	-	3.61	流紋岩	4	-	有	1層辺に微細剥離痕あり	72
6	Ka-063	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	2.6	3.4	1.9	106	8.08	達貝頁岩	34	平坦	無	1層辺に微細剥離痕あり	72
7	Ka-067	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	2.3	2.4	0.5	-	2.66	花崗岩	-	-	無	1層辺に微細剥離痕あり	72
8	Ka-065	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	2.7	2.6	1.0	-	4.42	黑色頁岩	31	-	無	1層辺に微細剥離痕あり	72
9	Ka-059	IIK	Ⅴd層	打製石器	微細剥離痕の ある片岩	2.9	2.3	0.8	106	5.20	流紋岩	1	平坦	無	1層辺に微細剥離痕あり	72

第196図 IV層出土遺物(16)



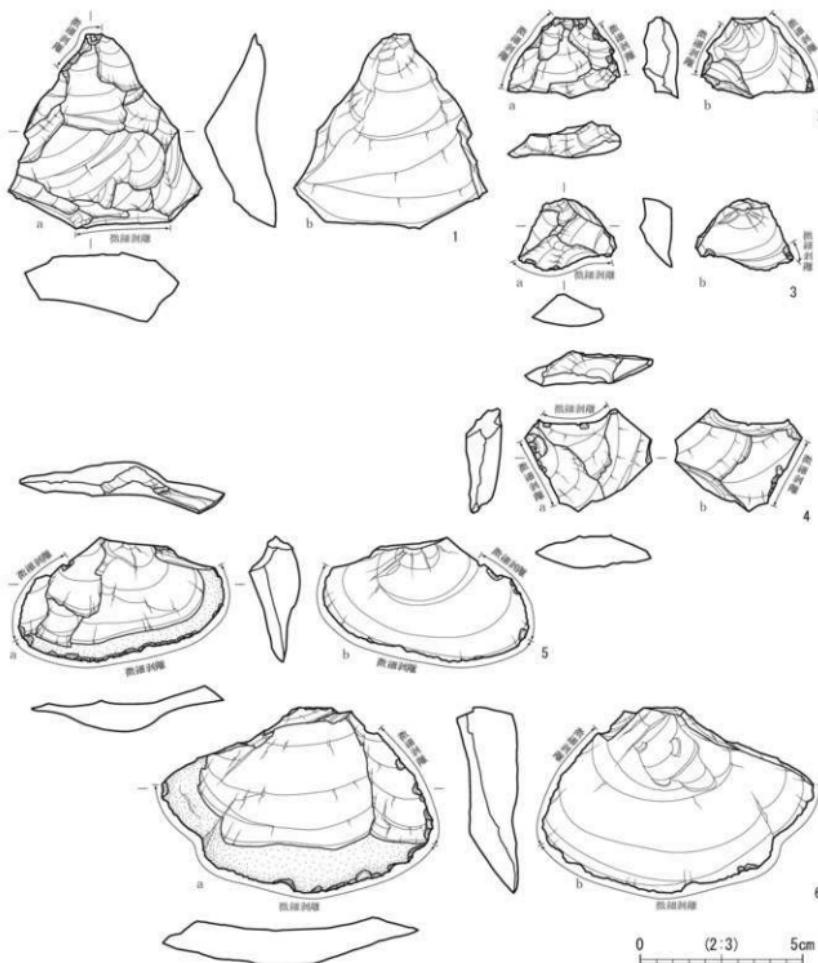
図版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			調整値 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形状	自然面 有無	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-057	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.6	2.6	0.9	95	7.21	泥灰岩	21	平頭	有	I縁辺に微細剥離がある	72
2	Ka-064	IK	Nd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.5	2.5	0.7	89	5.11	黑色頁岩	31	平頭	無	I縁辺に微細剥離がある	72
3	Ka-058	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.3	2.7	1.2	128	5.27	泥灰岩	21	平頭	有	I縁辺に微細剥離がある	72
4	Ka-056	IK	Nd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.2	3.0	1.0	112	8.91	泥灰岩	9	平頭	有	I縁辺に微細剥離がある	72
5	Ka-070	IK	Nd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.9	4.6	0.9	113	8.59	珪化燧石岩	29	自然	有	I縁辺に微細剥離がある	72
6	Ka-072	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.2	4.6	1.6	102	29.62	珪質頁岩	-	平頭	無	I縁辺に微細剥離がある	72
7	Ka-062	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.4	4.4	0.9	116	8.42	黑色頁岩	31	縫合	有	I縁辺に微細剥離がある	72
8	Ka-054	IK	Nd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	7.6	2.9	1.4	110	28.79	泥灰岩	-	自然	有	I縁辺に微細剥離がある	72

第197図 IV層出土遺物(17)



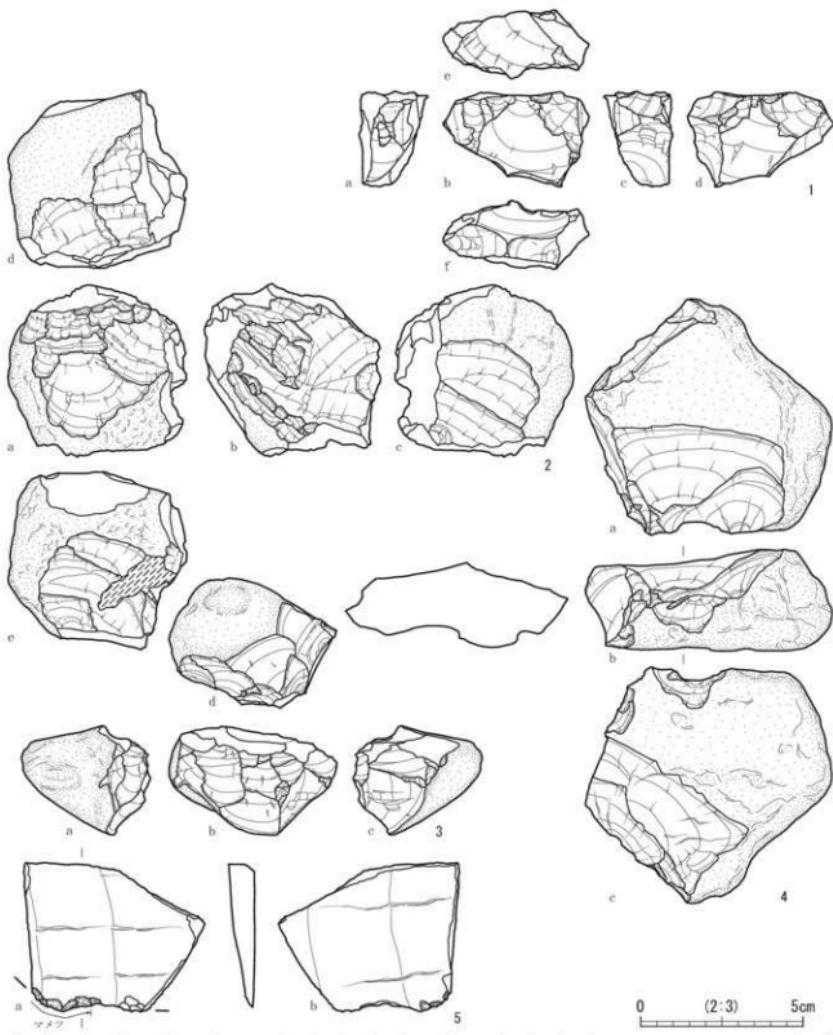
図版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法算(cm)		測定角 (度)	重さ(g)	石材	緑色 頁岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 回数	
						長さ	幅									
1	Ka-053	IK	B層	打製石器	微細剥離の ある薄片	4.6	6.1	14	122	30.28	浅灰色	-	平頭	有	1縁辺に微細剥離がある、火炎による欠損	72
2	Ka-068	IK	Bd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	2.8	19	0.7	-	2.52	具質頁岩	-	-	無	複数辺に微細剥離がある、火炎による欠損	72
3	Ka-069	IK	Bd層	打製石器	微細剥離の ある薄片	1.5	16	0.5	-	1.38	黑色頁岩	29	-	無	複数辺に微細剥離がある	72
4	Ka-071	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.5	2.1	0.9	110	4.48	珪質頁岩	-	平頭	無	複数辺に微細剥離がある	72
5	Ka-076	IK	B層	打製石器	微細剥離の ある薄片	4.1	2.2	0.7	110	3.06	浅灰色	4	平頭	無	複数辺に微細剥離がある、n面辺上に凹みあり	72
6	Ka-079	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	4.8	3.7	1.3	140	10.86	珪質頁岩	35	平頭	有	複数辺に微細剥離がある	72
7	Ka-078	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	3.8	3.6	1.0	129	13.11	珪質頁岩	36	切子	有	複数辺に微細剥離がある	72
8	Ka-077	IK	古層	打製石器	微細剥離の ある薄片	4.0	3.8	1.1	114	15.29	黑色頁岩	31	平頭	無	複数辺に微細剥離がある	73

第198図 IV層出土遺物(18)



第199図 IV層出土遺物(19)

図版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			調節角 (度)	重さ(g)	石材	發見 場所	打削 形状	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka.075	IK	Nd層	打製石器	微細刃部の あら剥片	6.0	6.0	2.2	-	57.10	流紋岩	-	-	無	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73
2	Ka.081	IK	Nd層	打製石器	微細刃部の あら剥片	2.5	3.4	1.1	121	7.15	珪化泥灰岩	-	平頭	無	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73
3	Ka.080	IK	Nd層	打製石器	微細刃部の あら剥片	2.2	3.0	1.0	123	4.27	珪質頁岩	36	平頭	無	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73
4	Ka.055	IK	Nd層	打製石器	微細刃部の あら剥片	3.2	4.0	1.1	116	9.00	流紋岩	27	平頭	無	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73
5	Ka.061	IK	Nd層	打製石器	微細刃部の あら剥片	3.8	6.2	0.9	112	19.57	珪化泥灰岩	-	平頭	有	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73
6	Ka.074	IK	Ng層	打製石器	微細刃部の あら剥片	5.2	8.4	1.9	108	58.82	流紋岩	-	切子	有	複数枚辺に微細刃部剥片あり	73



第200図 IV層出土遺物(20)

図版 番号	登録 番号	調査区	類別	種別	器種	法量(cm)			調懸角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	刃面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-082	HK	Nd層	打製石器	石核	2.9	4.6	2.1	-	22.63	泥灰岩	20	-	無	剥片素材、打削形跡あり、打削4面、作業面5面	74
2	Ka-082	HK	Nd層	打製石器	石核	5.2	5.0	5.4	-	186.79	泥灰岩	-	-	有	標志材、打削形跡あり、打削4面、作業面5面	73
3	Ka-084	HK	Nd層	打製石器	石核	3.3	5.2	4.0	-	55.43	泥灰岩	-	-	有	標志材、打削形跡あり、打削4面、作業面5面	74
4	Ka-083	HK	Nd層	打製石器	石核	3.1	7.6	7.3	-	170.78	泥灰岩	-	-	有	標志材、打削形跡あり、打削3面、作業面3面	74
5	Ka-027	HK	Nd層	打製石器	大型板状石器	4.53	6.41	0.8	-	25.97	石炭安山岩 石炭凝灰岩	-	-	無	上端面ねじり左右両端欠損、下端部二次加工あり、刃端長0.6cm、刃端角50°-55°	74

### 石核(第200図-1～4)

IV層から出土した石核には、剥片素材のもの(第200図-1)、礫素材のもの(同図-2～4)がある。礫素材のものは、いずれの作業面にも自然面が残存していることから、それほど大きくなかった原石が用いられたものと推測される。

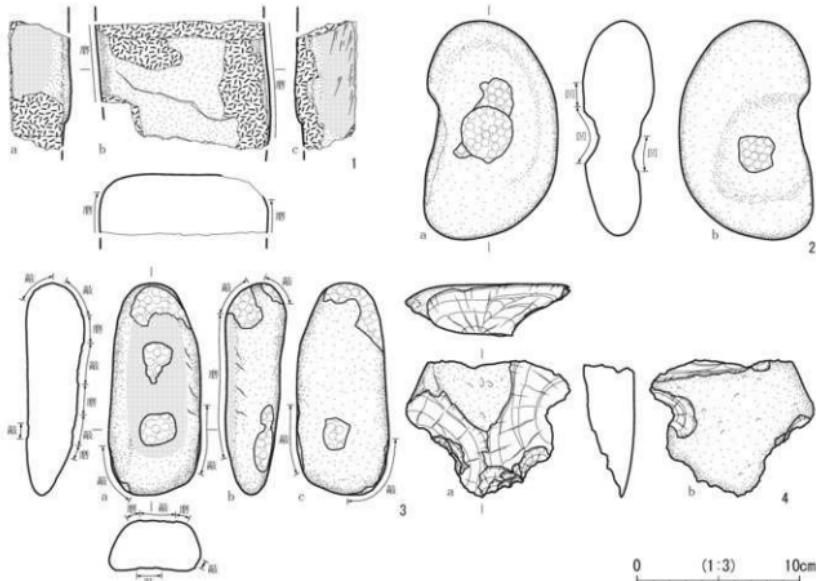
第200図-1は、a～d・fの5面を作業面としており、最も古い作業面はc面、最終的な作業面はb面である。

第200図-2は、a～eの5面を作業面としており、c・d面の新旧関係は不明であるが、他の作業面より古く、最終的な作業面はa面である。素材の原石が良質でないためにステップフラクチャーを残す剥離面が多く観察され、打面と作業面の角度が大きい。各面に自然面が観察されることから、十分な剥片剥離が行なわれず残核となっているものと判断される。

第200図-3は、b～dの3面を作業面としており、c面が最も古い作業面で最終的な作業面はb面である。作業面に残存する剥離面から、小型の剥片が剥離されていたと考えられる。

第200図-4は、扁平な礫を素材としており、残された剥離面から、横長剥片が多く剥離されたものと考えられる。

これら4点の石核に用いられている石材は、すべて流紋岩である。



団版 番号	登録 番号	調査区	場所	種別	器種	法面(cm)			重さ(g)	石材	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ				
1	Ko-022	IHK	Ⅳ層	礫石器	磨石	67.9	10.4	0.5	631.40	石英安山岩質 礁灰岩	欠損品、磨2面(平),火ハリによる欠損	74
2	Ko-025	IHK	Ⅳ層	礫石器	磨石	13.3	7.2	4.3	348.65	石英安山岩質 礁灰岩	楕円形、磨2面(平+半)深2(浅+浅)	74
3	Ko-026	IHK	Ⅳ層	礫石器	磨+研	13.0	5.3	3.7	413.31	砂岩	楕円形、磨1面(凸),研1面2箇所, 手研1箇所, 楕2箇所, 研2箇所(粗度)(偏)	74
4	Ko-024	IHK	Ⅳd層	礫石器	礫器	8.4	10.1	3.2	199.09	石英安山岩 礫素材、片刃、断面状の刃部		74

第201図 IV層出土遺物(21)

#### 大型板状石器(第200図-5)

1点出土した(第200図-5)。鋭利な端縁に調整剥離が施され、刃部が形成される。刃部には使用によるマツツとスナップ剥離が観察され、上端部および左右両側は欠損している。石材は、板状節理を有する石英安山岩質凝灰岩である。

#### 2) 破石器(第201図)

##### 磨・凹・敲石(第201図-1~3)

第201図-1は、a面およびc面の平坦面に広く磨痕が認められ、使用後の火ハネにより大半を失っている。石材は、石英安山岩である。

第201図-2は、扁平な楕円形を素材とし、a面中央の平坦面に深い凹痕、b面中央の凹面に浅い凹痕が観察される。石材は、石英安山岩質凝灰岩である。

第201図-3は、磨痕と敲打痕が複合して認められるものである。扁平な楕円形を素材とし、a面中央の凸面に広く磨痕が観察され、a~c面に磨痕より新しい明瞭な敲打痕が計7箇所に観察される。石材は、砂岩である。

#### 礫器(第201図-4)

第201図-4は、片刃の礫器である。扁平な砾を素材としたもので、a面は左右両側縁から剥離整形が行われ、下端部には細かな剥離調整により鋸歯状の刃部が作出される。

b面に観察される両側縁からの剥離については、刃部形成に関わるものではない。a面の上端面は刃部形成後に剥離され、使用に関わって整形されたものと推測される。石材は、石英安山岩である。

#### (4) V層出土遺物(第202~207図)

V層からは、土器を主体として総数286点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。出土土地別の内訳については、IV層から出土した遺物と同様にI区に偏りが認められ、本層上面において検出された遺構の分布とも合致する。

以下、V層から出土した遺物のうち、打製石器の接合資料を除く土器、接合資料以外の石器について、種別毎に記載する。

##### a. 土器(第202~204図)

V層からは、231点の土器が出土した。器形や装飾文様が施文される部位や意匠、地文など、種々の特徴については、いずれもIV層から出土した土器と酷似するものがある。

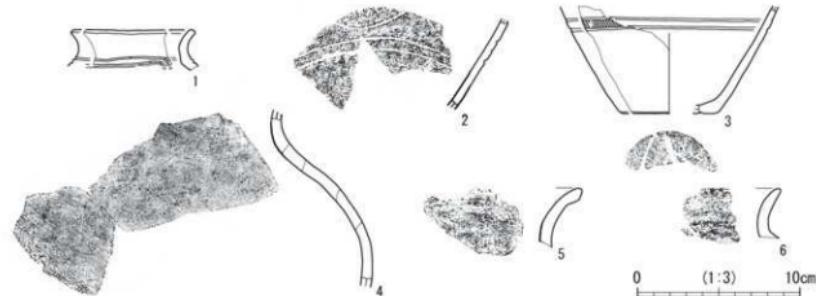
これらのうち、図示可能なまでに復元されたものや、器形や装飾文様等に特徴がみられるものを抽出し、壺6点、鉢11点、碗5点、蓋1点、総数23点を掲載した(第202~204図)。IV層から出土した弥生土器の器種に対して高杯と深鉢が欠落しているが、これは出土点数の差による影響が大きい。以下、器種毎の概要を記載する。

#### 壺(第202図)

V層から出土した壺は、すべて破片資料であり、全体の器形が復元されたものは無いものの、器高10cm程の小型品と推定される精製土器(1)と、器高20~25cm程と推定される中型品(2~6)に区別される。

1~4・6は、すべて最大径を体部上半に持つもので、体部資料である2~3についても、同様の可能性がある。1~5・6の口縁部形態はいずれも短く外反する平縁を呈するもので、頭部から体部の境については、1~4が緩やかに湾曲し、6はやや明瞭な屈曲を持つ。

1～3については、いずれも断面形状がU字状を呈する幅2mm程の沈線によって装飾文様が施文される。文様意匠は横位直線文とその他の意匠が組み合わされたもので、破片資料であるため全体の意匠は不明であるが、1は方形文、同一個体である2・3については、渦文・同心円文・鎧形文（鎧形文様の下位に沿って施文される波状文様）のいずれかと考えられる。また、2・3は文様内にL字縞文が充填され、地文部が赤彩される。3の底部は焼成後に穿孔された可能性がある。



回収番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外周調整(文様)	内周調整(文様)	備考	写真図版
1	B-109	BRK	-	V層	弦生土器	鉢	口縁上端	「U縫」(3.0mm)、体上端(L字縞文)→体上半(横位直線文)	横位直線文	口径6.6cm	75
2	B-114	IRK	-	V層	弦生土器	鉢	体	横位直線文→渦文	渦文	B-114-115同一個体	75
3	B-115	IRK	-	V層	弦生土器	鉢	体下半	横位直線文→渦文	渦文	底径5.8cm、 底内面黒化	75
4	B-112	IRK	-	V層	弦生土器	鉢	口縁上端	「U縫」(3.0mm)→底内面渦文(同前)、 体上半	渦文	口径6.9cm、 内周輪郭	75
5	B-110	IRK	-	V層	弦生土器	鉢	口縁上端	「U縫」(3.0mm)→「U縫」(3.0mm)	「U縫」	口縫上端外表面化物付着、 および内外面黒化	75
6	B-111	IRK	-	V層	弦生土器	鉢	口縁上端	「U縫」(3.0mm)→「U縫」(3.0mm)	「U縫」	75	

第202図 V層出土遺物(1)

### 鉢(第203図)

第203図に掲載した11点の鉢はすべて精製のもので、殆どが破片資料であるものの口径に対して器高が2/3～3/4程と推定されるものが多く、全体の器形が復元された5については、口径と底径の比率が2:1、口径と器高の比率が3:2程となる。

器形は直線的ないし内湾気味に外傾する部体、内湾する口縁部が多く、口縁部が内湾する度合いは、IV層から出土したものと比べて弱い。6の器形は他とは異なり、体部下半から口縁部へと大きく外傾する波状口縁を呈するもので、波状口縁という点を除き、蓋の器形に酷似するものである。

装飾文様は、幅1.5mm未満の比較的細い沈線で施文されるもの(4・5・7～11)と幅2～3mm程の比較的太い沈線で施文されるもの(1～3・6)に大別され、沈線の断面形状については幅細のものはU字状とV字状の2種があり、幅太のものは、すべてU字状を呈する。

施文部位については、残存する破片から、口縁部のみに施文されるもの(1～3)、口縁部から体部上半に施文されるもの(4・5・9)、口縁部から体部全面に施文されるもの(6～8・10・11)に三大別され、口縁部内面にも施文されるもの(4～6)や、少数例として、隣り合う単位の境界に縱位の短い沈線が施文されるもの(5)がある。

文様意匠は、横位直線文のみが施文されるもの(1～3)と、他の文様が組み合わされて施文されるもの(4～11)

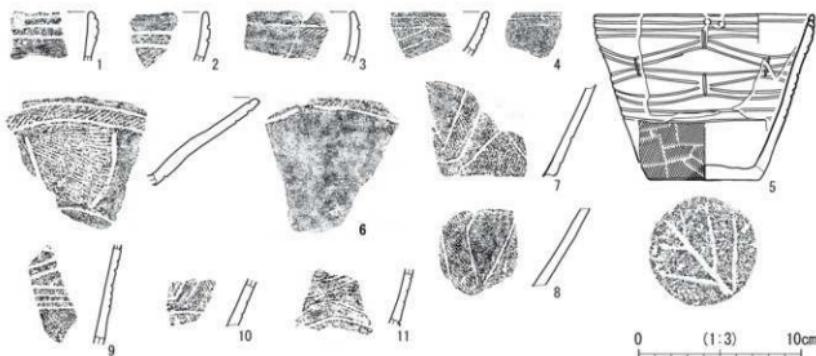
に区別され、横位直線文のみが施文されるものは口縁部のみに、横位直線文と連弧文ないし連続山形文の組み合わせが施文されるものは口縁部から体部上半に、横位直線文と連弧文ないし連続山形文以外の意匠が組み合わされるものは外面全体に施文されており、各文様意匠と施文部位には関係性が窺われる。6は口縁部と体部下半に施文された横位直線文の間に縱位の弧状沈線が施文されることで体部が台形状に区画され、その内部にLR繩文が充填される。

装飾文様内や装飾文様が施文されない部分には地文として繩文原体が回転施文される。このほか、5には焼成前に施された口縁部内面側からの穿孔が2箇所観察される。

#### 甕(第204図-1～5)

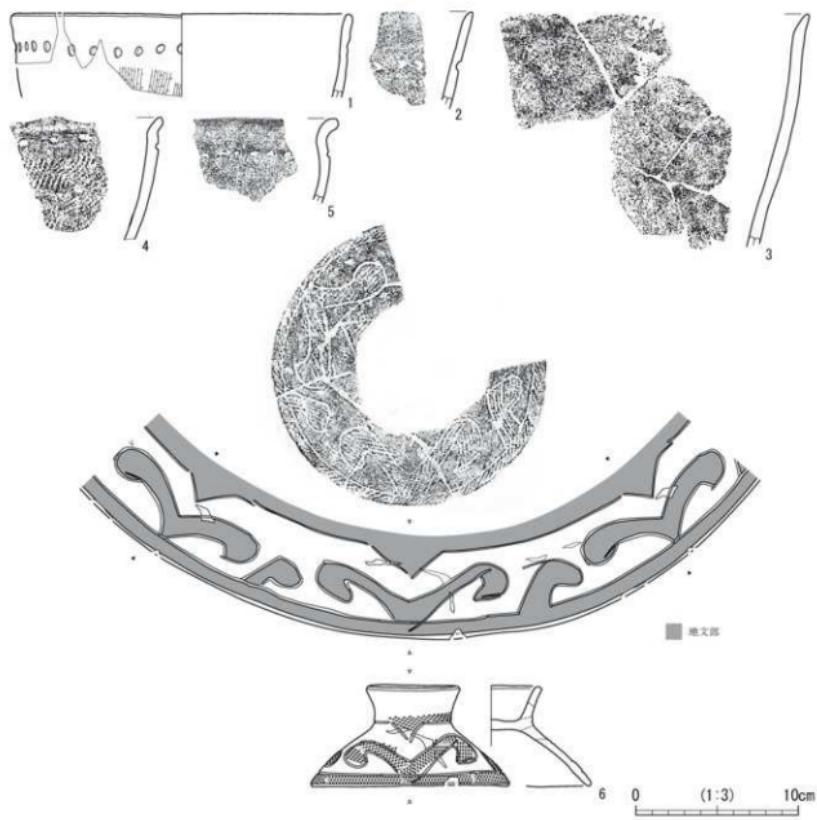
第204図に掲載した甕5点は全体の器形が復元し得たものが無いものの、1・2・4・5については器高20～25cm程の中型、3については器高30cm前後もしくはそれ以上の大型品と推定される。

いずれも口縁部に最大径を持つものであるが、IV層から出土した甕と比較すると、口縁部と体部の境にみられる括れや体部上半の張りは総じて弱く、中には1～3のように括れを持たないものが認められ、直線的に外傾する器



番号	登録番号	調査区	出土地	型式	模別	部種	部位	外周調整(文様)	内周調整(文様)	備考	写真回数
1	B-127	IIK	-	V型	弥生土器	甕	口縁	直線→横(横位直線文)	++→横位±V	外周削減	75
2	B-129	IIK	-	V型	弥生土器	甕	口縁 ～体部上端	++→直線～L繩文(組み合)～横(横位±V)	++→±V		75
3	B-121	IIK	-	V型	弥生土器	甕	口縁 ～体部上端	横(横位直線文)～L繩文(組み合)～横(横位直線文)	横位±V(密)	内外面灰化物有、外周摩耗有	75
4	B-119	IIK	-	V型	弥生土器	甕	口縁 ～体部上端	直線～L繩文～横(横位直線文)	++→±V(直線) +V(横位±V)	横位±V(密)	75
5	B-113	IIK	-	V型	弥生土器	甕	口縁 ～底	口縁～上半：直線～横位直線文 ～横(横位±V)	口縁：直線 +V(横位±V)	口縁34.0cm、 底径6.8cm、 器高25cm 口縁厚0.5cm(焼成後、外→内)	75
6	B-116	IIK	-	V型	弥生土器	甕 or 高环	口縁 ～体	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	口縁：直線 +V(横位直線文)～横位直線文 ～横(横位直線文～V)	直線口縁	75
7	B-117	IIK	-	V型	弥生土器	甕	体下半	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	横位±V(密)	外周灰化物有、 B-117-118同一個体	75
8	B-118	IIK	-	V型	弥生土器	甕	体下半	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	横位±V(密)	B-117-118同一個体	75
9	B-122	IIK	-	V型	弥生土器	甕	体	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	+V(横)	内外面削減	75
10	B-124	IIK	-	V型	弥生土器	甕	体下半	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	+V(横)		75
11	B-123	IIK	-	V型	弥生土器	甕	体下半	直線～L繩文～横(横位直線文～V)	++→±V		75

第203図 V層出土遺物(2)



图版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	内面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-128	IIK	-	V層	陶生土器	変	口縁 ～体上半	口縁 ～植物葉文・枝葉文・斜位斜板 ～体上半 ～口縫	横位(?)付(密)	口径21.9cm 外面折れ	75
2	B-126	IIK	-	V層	陶生土器	変	口縁 ～体上半	口縁 ～植物葉文・枝葉文・斜位斜板 ～口縫	??→横位18°付 口縫	河点刺突は手執骨管施文具使用	75
3	B-131	IIK	-	V層	陶生土器	変	口縁 ～体上半	口縁 ～口縫	??→13°付	内面摩耗	75
4	B-129	IIK	-	V層	陶生土器	変	口縁 ～体上半	口縁 ～口縫 ～植物葉文・枝葉文 ～体上半 ～口縫	??→13°付		75
5	B-130	IIK	-	V層	陶生土器	変	口縁 ～体上半	口縁 ～口縫 ～植物葉文・枝葉文・斜位斜板 ～体上半 ～口縫	横位(?)付(密)	口縫部上端内面黒色化。 体部上半内面黒色化物有り	75
6	B-132	IIK	-	V層	陶生土器	変	つらみ ～口縫 (定形)	つらみ ～口縫 (枝葉直線文・V字形の文様並び) ～山形文	つらみ付 ～口縫	口径12.2cm, つまみ径5.8cm, 器高6.2cm 口縫部内外面黒色化物有り。 体部下半～口縫部内外面 一次加熱部付近黒色化	75

第204図 V層出土遺物(3)

形を基調とすることに加え、口縁部内面が内削ぎ状に傾斜するものが多い。

装飾文様が施文されるものは無く、体部には地文としてLR繩文の回転施文や植物茎回転文が施文される。中には、地文が施文される前段階の整形痕が観察されるもの(2・4)や、地文が施文されずに無文となるもの(3)がある。

3を除く外面の体部上端には、口縁部と体部を区画するように列点刺突文が施文され、刺突の方向には左右の別が認められるほか、押し引き状に施文されるもの(2・5)や、1点のみであるが半截竹管状施文具により施文されるものがある(2)。内面は、ナデ調整後にミガキ調整が施されるものが大部分であるが、ミガキ調整には、粗密の程度差が認められる。

#### 蓋(第204図-5)

V層から出土した弥生土器の中で、図示し得た蓋は、完形品1点のみである(第209図-5)。口径12.2cm、つまみ径5.8cm、器高6.3cmを測る精製の小型品で、口径とつまみ径の比率、および口径と器高の比率が各々ほぼ2:1、口径と体部上端(つまみ部下端)の比率が2.5:1となる。

器形は、つまみ部、体部から口縁部共に円錐台形を呈し、体部はやや内湾し、つまみ部は直線的に外傾する。口縁部は平縁である。つまみ部は高さ2cm程の低いリング状を呈するものである。

装飾文様は、つまみ部を除く外面全面に断面形状がV字状を呈する幅1~1.5mmの細い沈線により、横位直線文で区画された体部に錐形文にも似た羊角状の文様とその右半分が交互に2単位ずつ施文され、体部上端(つまみ部下端)に施文された横位直線文については、羊角状の部分に山形の沈線が施文される。文様内および横位直線文で区画された上下(口縁部およびつまみ部下半)にはLR繩文が充填される。内面は、つまみ部にナデ調整、天井部から口縁部には丁寧なミガキ調整が施される。

#### b.石器(第205~207図)

V層からは55点の石器が出土しており、すべて打製石器である。土器と同様、I区に大きな偏りがみられる。各器種の形態や製作技術については、共にIV層から出土したものとほぼ共通している。これらの石器のうち、二次加工の施されていない剥片と、他の剥片との接合関係が認められない剥片を除き、石錐1点、ビエス・エスキュー1点、二次加工のある剥片8点、微細剥離痕のある剥片3点、石核3点、総数16点を掲載した。

以下、器種毎に記載する。

#### 石錐(第205図-1)

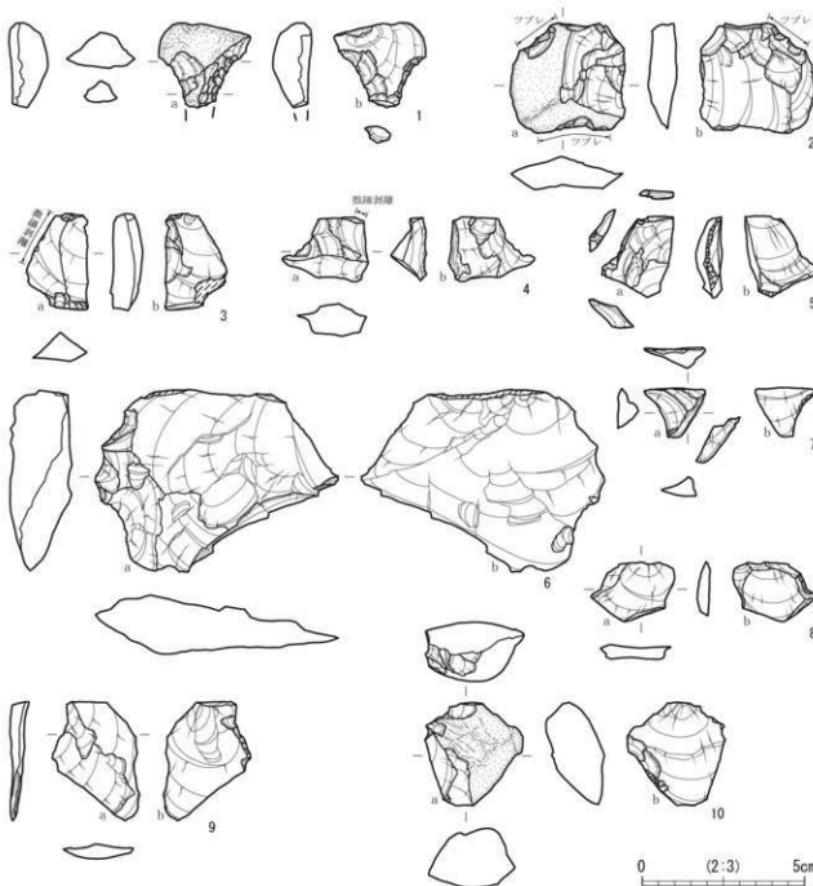
a面に自然面が広く残存する剥片を素材とし、a面左右両側縁から80~85度の急角度な剥離調整とb面左右両側縁からの平坦剥離で尖端部が作出されている。尖端部を欠損しているが、尖端部と基部の境界は明瞭であり、断面形は基部、尖端部ともに三角形を呈する。石材は、碧玉である。

#### ビエス・エスキュー(第205図-2)

a面下端部から左側縁側にかけて自然面が残存する。a・b両面の上端縁およびa面下端縁に対となる剥離調整とツブレ状の剥離痕が認められる。石材は、黒色頁岩である。

#### 二次加工のある剥片(第205図-3~10)

3cm未満の剥片を素材としているもの(第205図-3~5・7・8)が半数を占める。剥離調整は、a・b両面に施されるもの(同図-3・4)、背面であるa面のみに施されるもの(5)、腹面であるb面のみに施されるもの(6~10)に大別される。



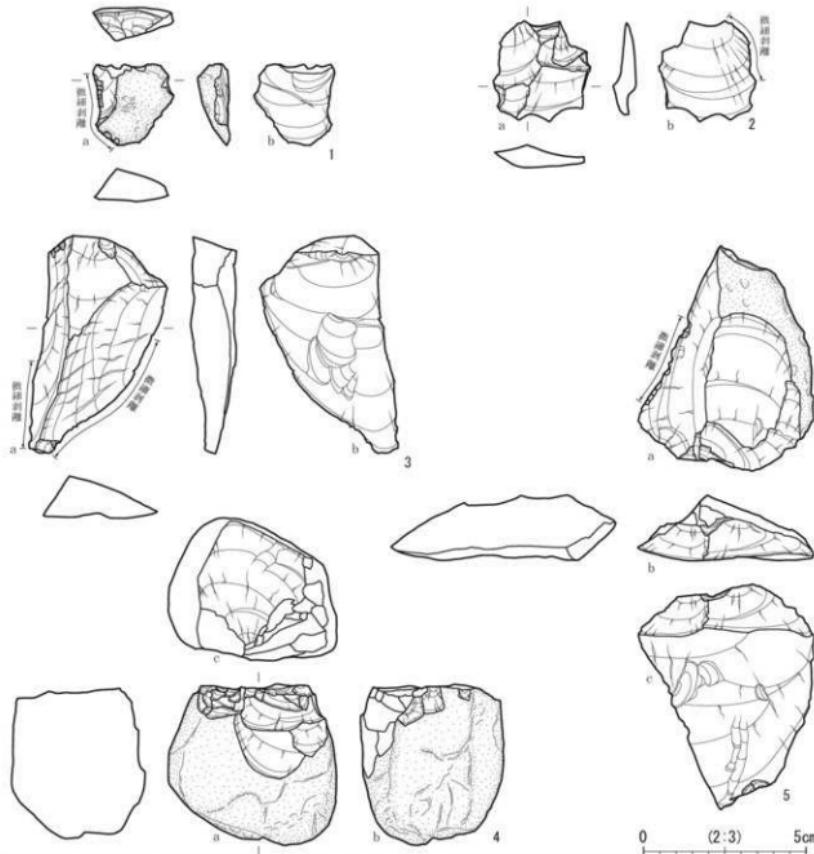
回収 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			剥離面 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面 形狀	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-090	IIC	V層	打製石器	石器	2.60	2.8	1.2	130	6.51	碧玉	42	自然	有	a面+b面加工、尖端部:長(3.1)×幅1.4×厚0.9(cm)	75
2	Ka-096	IIC	V層	打製石器	石器	3.5	3.3	1.0	142	14.02	黑色頁岩	-	平削	有	1枚の二次加工あり	75
3	Ka-100	IIC	V層	打製石器	石器	2.9	1.9	1.0	121	4.31	瑪瑙	-	切子	無	1枚の二次加工あり、側面は側面削込みによる二次加工あり。	75
4	Ka-092	IIC	V層	打製石器	石器	2.0	2.6	1.1	-	3.26	流紋岩	-	無	a面+b面加工、複数深溝による二次加工あり。	76	
5	Ka-095	IIC	V層	打製石器	石器	2.5	2.3	0.8	-	2.96	黑色頁岩	-	無	a面+b面加工、複数深溝による二次加工あり。	76	
6	Ka-087	IIC	V層	打製石器	石器	5.6	7.6	1.8	120	63.69	流紋岩	-	節理	無	a面加工、1縦溝に一次加工あり	76
7	Ka-094	IIC	V層	打製石器	石器	1.5	1.9	0.6	-	0.77	瑪瑙	49	無	b面加工、1縦溝に二次加工あり	76	
8	Ka-091	IIC	V層	打製石器	石器	1.8	2.6	0.4	-	2.19	流紋岩	22	無	b面加工、1縦溝に二次加工あり	76	
9	Ka-101	IIC	V層	打製石器	石器	3.7	2.7	0.6	106	3.35	流紋岩	27	平削	無	b面加工、1縦溝に二次加工あり	76
10	Ka-093	IIC	V層	打製石器	石器	3.2	3.0	1.8	138	14.66	碧玉頁岩	36	平削	有	b面加工、1縦溝に二次加工あり	76

第205図 V層出土遺物(4)

剥離調整は平坦剥離が大半で、急角度な剥離が認められるものは2点(同図-5・8)のみである。この他、剥離調整と微細剥離痕が複合して観察されるもの(3・4)もある。

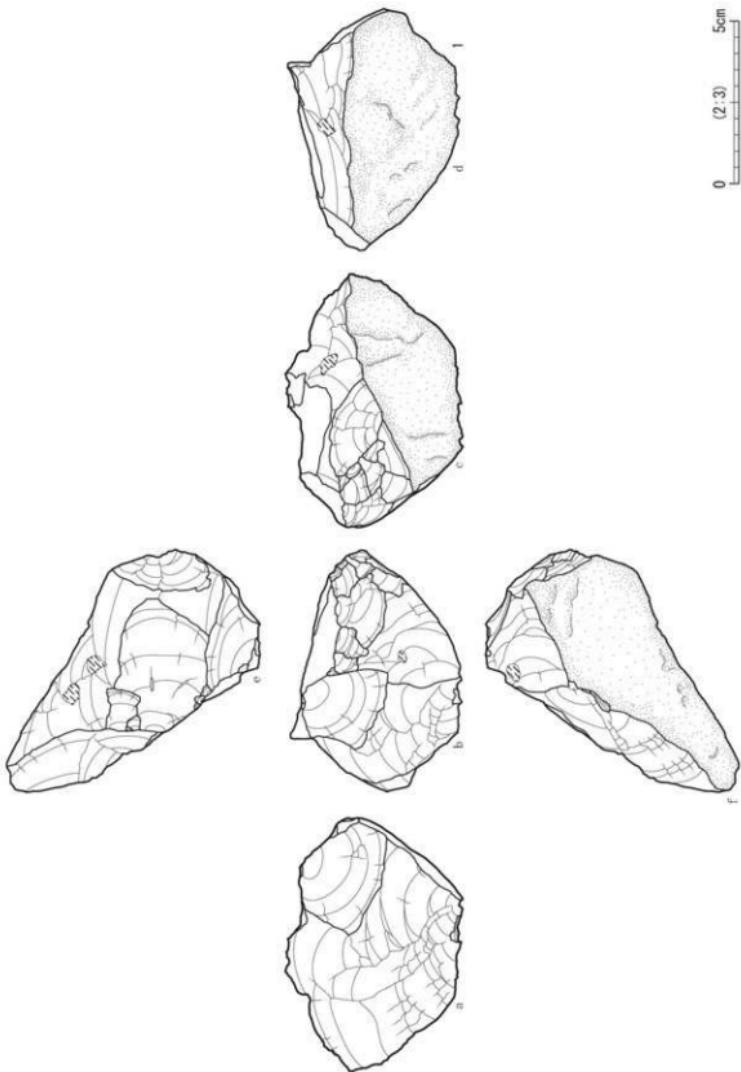
第205図-5は、上下両端面および左右両側面が折れ面で構成される剥片を素材とし、a面上端面および左側面、b面左側面の折れ面にそれぞれ剥離調整が施される。

第205図-6は、a・b両面の上端部に節理面が観察され、a面左側縁に粗い剥離調整が施される。節理が多く認め



第206図 V層出土遺物(5)

団体 番号	登録 番号	調査区	部位	種別	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka098	IK	V層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	2.5	2.5	1.0	-	4.80	黒色頁岩	-	-	右	1端辺に微細剥離痕あり	76
2	Ka099	IK	V層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	3.3	3.0	0.7	-	4.73	黒板岩	21	-	無	1端辺に微細剥離痕あり	76
3	Ka097	IK	V層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	6.2	4.3	1.4	110	27.89	泥灰岩	-	平頭	無	複数端辺に微細剥離痕あり	76
4	Ka102	IK	V層	打製石器	石核	5.0	5.2	4.4	-	145.66	泥灰岩	-	-	右	釋迦材、打削跡あり、打削1面、作業面1面	76
5	Ka103	IK	V層	打製石器	石核	2.0	5.4	7.0	-	49.84	泥灰岩	-	-	右	剥片素材、打削跡なし、打削1面、作業面1面	76



图版 番号	登錄 番号	調査区	層位	核別	器種	法量(cm)			調節角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka089	道区	V層	打製石器	石核	7.5	7.8	5.4	-	179.07	泥状岩	-	-	有 分削標or薄片素材, 打削面移み有, 打削4面, 作業面2面	77	

第207図 V層出土遺物(6)

られ、a・b両面で同時割れを起こしている。

第205図-7は、上端面の折れ面によって形成された尖端部のb面側に剥離調整が施される。

第205図-9は、b面右側縁に剥離調整が施されるもので、下端部の折れ面はb面右側縁の剥離調整よりも新しい面である。

第205図-10は、a面に自然面が広く残存する厚みのある剥片を素材とし、b面左側縁に剥離調整が施される。

二次加工のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(4・6・8～10)、瑪瑙(3・7)、珪化が進み光沢のある黒色頁岩(5)、珪質頁岩(10)である。

#### 微細剥離痕のある剥片(第206図-1～3)

1縁辺に微細剥離痕が観察されるもの(同図-1・2)、複数の縁辺に微細剥離痕が観察されるもの(同図-3)がある。また、自然面が広く残存しているもの(同図-1)、打面部および下端縁を欠損しているもの(同図-1・2)が認められる。3は縦長剥片を素材としている。b面では節理面を多く含むことが影響し同時割れを起こしている。微細剥離痕のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(同図-2・3)と黒色頁岩(同図-1)である。

#### 石核(第206図-4・5、第207図-1)

第206図-4は、裸素材の石核である。自然面が広く残存していることから、原石はそれほど大きくないものと推測される。c面が最も古い剥離面で、打面が作出されている。作業面はa・b面であり、a・b面の剥片剥離は一連の作業と考えられる。

剥片剥離作業はc面を打面として連続的に小型の剥片が剥離されている。剥片剥離工程の中でa・b面で観察される新しい段階の剥離面が小さいことから、打面と作業面の角度が大きく十分な剥片剥離が行なわれないままに残核となったものと考えられる。

第206図-5は、剥片素材の石核である。a面右側縁側に自然面が残存する。a面を打面とし、b面の作業面で小型の剥片が剥離されており、a面に頂部調整が認められる。a面左側縁には微細剥離痕が観察されるが、石核として剥片剥離作業が始まる前のものか、或いは剥片剥離作業が行われた後のもののかについては、判然としない。素材剥片の打面部までの長さから推測すると、剥離された剥片の量はさほど多くないと考えられる。

第207図-1は、分割窓ないし裸片素材の石核である。e面が分割面ないし素材剥離面と考えられる。c・d・f面には自然面が広く残されている。a・b・eの3面を作業面としており、a面の広い剥離面ないしe面右側縁側の小さい剥離面が古い剥離面と考えられる。最終的な剥離面はb面で、e面を打面として剥片剥離が行われている。b面とc面で観察される小さな剥離面が連続しているのは、一連の作業によるものと考えられる。

これら3点の石核に用いられている石材は、いずれも流紋岩である。

#### (5)VII層出土遺物(第208-209図)

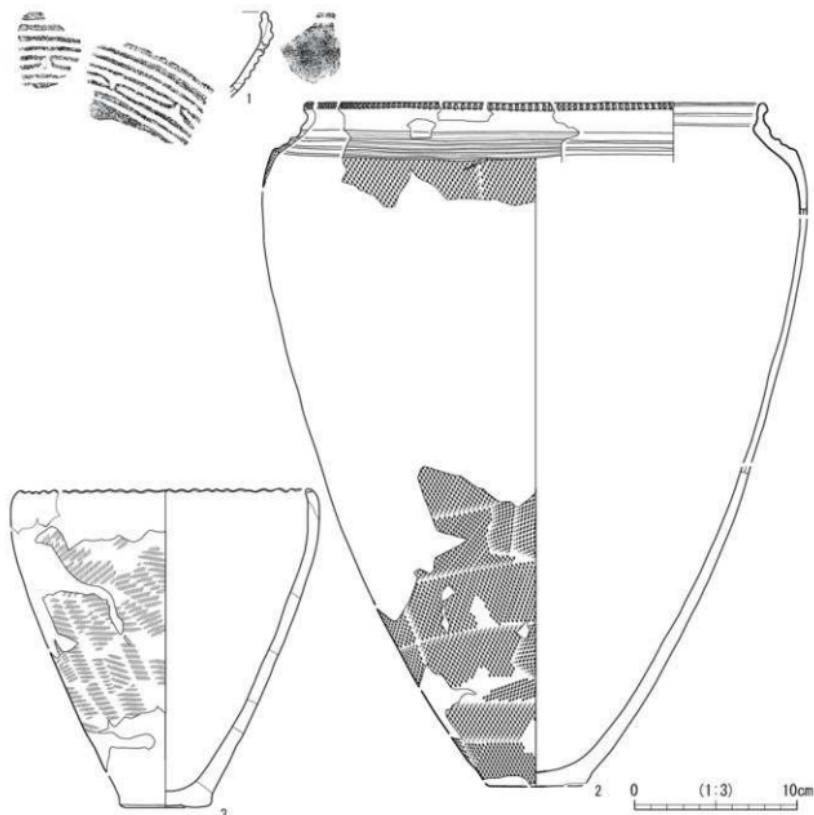
VII層からは、総数135点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。出土地別の内訳をみると、土器についてはIV層およびV層と同様、I区に偏りがみられるものの、石器については、第1次確認調査4トレンチ、第2次確認調査3トレンチなど、散発的に出土している。なお、本層上面にてピットが検出されたII区南半部からの出土は認められない。

以下、VII層から出土した遺物について、種別毎に記載する。

a. 土器(第208図)

VII層からは、132点の土器が出土した。破片から図示可能なまでに復元されたものや、文様や器形に特徴を有する浅鉢1点、深鉢2点を掲載した(第208図)。

1・2については、器形や装飾文様等の特徴から、縄文時代晩期後葉に位置付けられる、大洞A<sub>1</sub>式に比定される。3については粗製であることや、1・2と出土地が離れていることから判然としない部分があるものの、当該期の所



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外面調整(文様)	里面調整(文様)	備考	写真図版
1	A-001	IJK	-	第5層	縄文土器	浅鉢	口縁～体上半	波線→13'4 (工字文(×)+横位直縄文)	13'8(沈縫 →13'8(体上半;13'4(直)) (横位直縄文))	体部上端穿孔 (焼成後、内外面少々、補修孔?)	78
2	A-002	IJK	-	第5層	縄文土器	深鉢	口縁～底	波線→13'4(直)(横位直縄文) 体(横位直縄文・斜位回転、 波、13')	13'8(沈縫 →13'8(体上半;横位直縄文), 体下半～底;13') (横位直縄文)	口径28.3cm、底径6.0cm。 体上半(13'8+19.7cm), 底上半(13'8+19.7cm), 底上部(13')	78
3	A-003	BJK	-	第5層	縄文土器	深鉢	口縁～底	13'4～13'8(縄文縦條・横位・斜位回転 →13'8・体下端;13'4、 波、13')	13'7→13'8	口径19.8cm、 底径5.6cm、 器高19.6cm、 底径13.8	78

第208図 VII層出土遺物(1)

産として位置付けられるものと思われる。

第208図-1は、浅鉢の破片資料である。内湾気味な体部から口縁部が内傾する器形を呈する精製のもので、口縁部形態は不明である。口縁部には横位直線文(外面2条、内面1条)が施文され、体部には点対称な々文、その上下に横位直線文が施文されることにより、隆線の工字文が表出される。体部上端には焼成後に施された穿孔が観察されるが、これについては補修孔と思われる。

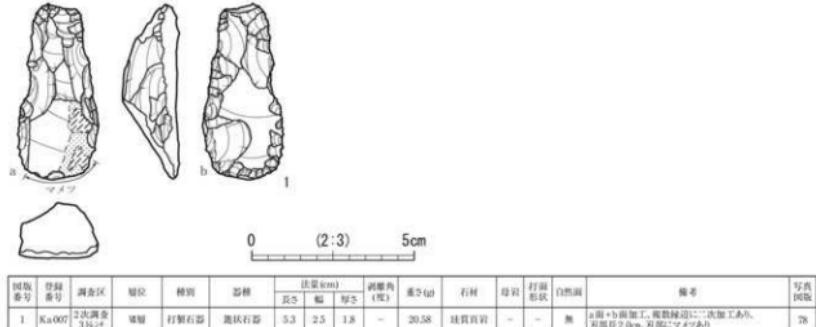
第208図-2は、大型の深鉢である。口径に対して底径が小さく、肩部に強く張りを持ち、口縁部が短く外傾する砲弾状の器形を呈する。口縁部は平縁で、口唇部には刻みが施される。文様は、幅5~7mmの太く深い沈線が、口縁部内外面に施文される。

第208図-3は、粗製の深鉢である。口径と器高の比率がほぼ1:1となるもので、体部が直線的に外傾し、内湾する口縁部へといたる器形を呈する。口縁部は小刻みな波状口縁で、体部にはし繩文が回転施文される。

#### b. 石器(第209図)

VII層からは、3点の打製石器が出土した。この中から二次的な加工が認められない剥片2点を除き、麓状石器1点を掲載した(第209図)。

a面の左右両側縁に急角度の剥離調整が施される。b面は周縁が平坦剥離で調整され、側面觀はジグザグ状を呈する。最大幅は、刃部付近に位置し、刃縁およびa面右側縁下端に観察されるマツツは、使用によるものと考えられる。石材は、珪質頁岩である。



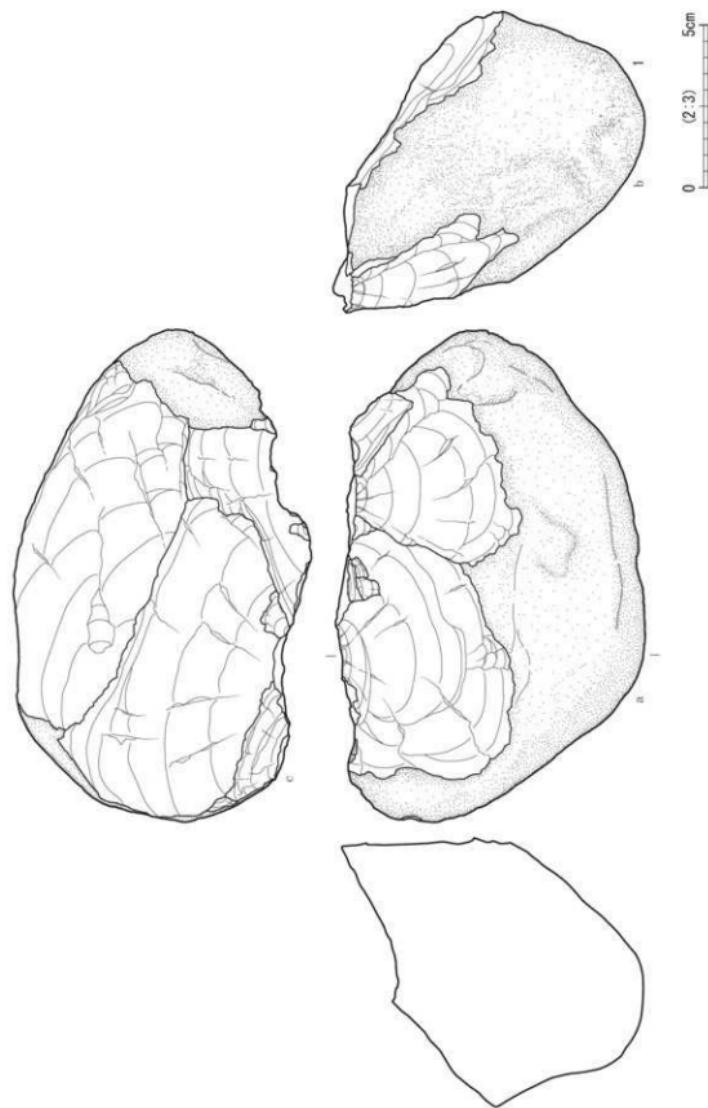
第209図 VII層出土遺物(2)

#### (6) VII層出土遺物(第210図)

VII層からは、総数6点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。このうち、土器5点については、部位・器種とともに不明な碎片資料であるため、掲載した遺物は無い。第2次確認調査8トレンチ(本調査IV区西側)から出土した打製石器(石核)1点を掲載した(第210図)。

第210図-1は、分割縫を素材とする石核である。分割面はc面に観察される。a・cの2面を作業面としており、共に自然面が残存する。a面がc面より新しい作業面である。残された剥離面からa面では最大長5.1cm、最大幅8.0cm程度、c面では最大長6.4cm、最大幅10.1cm程度の横長剥片が剥離されていることが確認できる。

石材は、流紋岩である。

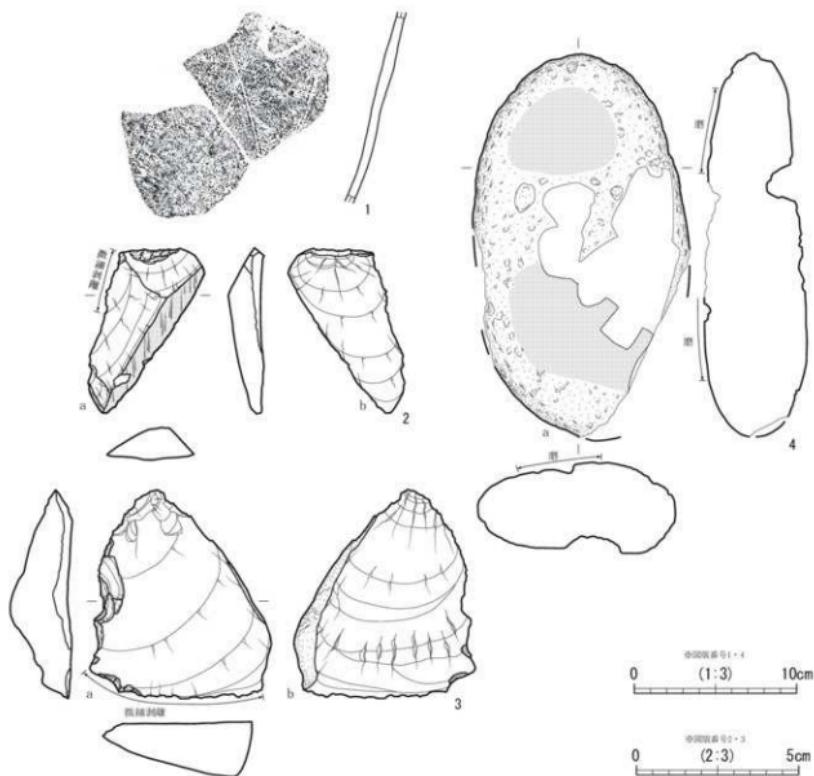


图版 番号	登錄 番号	調査区	層位	種別	基準	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ku-009 2次露 8号	東側	打削石器	石核	9.6	15.2	9.2	-	127.80	流紋岩	-	-	有	分割標素材、打削軸形あり、打削2面、作業面2面	78	

第210図 VII層出土遺物

(7) X層出土遺物(第211図)

X層からは、44点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。I・IV・VII区から散発的な出土がみられる。これらの中から、土器1点、石器3点を掲載した。以下、種別毎に記載する。



団版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	外側調整(支柱)			内側調整(支柱)			備考	写真団版
1	A-004	IJK	-	X層	調査土器	深鉢?	体	$\rightarrow$ 沈痕(縮合→斜位) (エクサンジル不明)			$\rightarrow$ 18°(斜位)			内外面削薄、 内面高脚小折れ	78
2	Ka-088	III区	X層	打製石器 あらわ片	調査	5.1	3.6	1.1	124	12.10	珪質頁岩	-	半圓	無 a面に纵面を残す	78
3	Ka-104	IJK	X層	打製石器 ある洞片	調査	6.8	5.6	1.8	145	45.99	泥炭岩	-	半圓	a面加工、 1辺辺に二次加工あり、 側面切欠き面を残す	78
4	Ke-027	IJK	X層	砸石器	台石	23.6	13.2	6.4	0.312.31	石英安山岩	欠損品、磨2面(平)				78

第211図 X層出土遺物

#### a.土器(第211図-1)

41点出土したが、掲載し得たのは、1点のみである(第211図-1)。破片の大きさから深鉢と思われる体部の破片資料である。外面には4.5cm間隔で並行する幅2~3mm程の浅い沈線が施文されるもので、時期、型式、精製・粗製、いずれも不明であるが、Ⅷ層からは縄文時代晚期後葉に位置付けられる大洞A<sub>1</sub>式土器が出土していることから、少なくともそれ以前の所産と考えられる。

#### b.石器(第211図-2~4)

X層からは、打製石器2点、疊石器1点、総数3点の石器が出土し、すべて掲載した。

##### 1) 打製石器(第211図-2・3)

第211図-2は、砥面のある剥片である。a面左側縁に微細剥離痕が観察される。a面右側縁側に残存する砥面は、すべての剥離面よりも古いものであることから、砥石片が転用されたものと考えられる。石材は、珪質灰岩である。

第211図-3は、二次加工のある剥片である。a面右側縁、b面左側縁側に自然面が残存する。a面は剥片剥離の際の同時割れによって形成された剥離面であり、左側縁に剥離調整が施される。また、下端縁に微細剥離痕が観察される。石材は、流紋岩である。

##### 2) 疊石器(第211図-4)

人頭大の扁平な楕円形を素材とした台石である。下端部を欠損している。図示した面の上下両端部の平坦面には、磨痕が観察される。石材は、多孔質の石英安山岩である。

#### (8) XI層出土遺物(第212図)

XI層からは、総数16点の遺物が出土した(出土遺物一覧表参照)。散発的な出土で、土器11点については部位・器種ともに不明な碎片資料であり、掲載し得たものは無い。石器の中から、石匙、磨石、石皿各1点を掲載した(第212図)。以下、器種毎に記載する。

##### a.打製石器(第212図-1)

横長剥片を素材とした横型石匙である。つまみ部は素材剥片の打面側に作出され、a面左側はa面からb面、右側はb面からa面の順に剥離調整が施されている。刃部は直線的に作られ、刃部作出のための調整は、下端部にのみ施される。主にa面側に剥離が施され、b面側はわずかに調整される程度である。刃角は48~61度である。

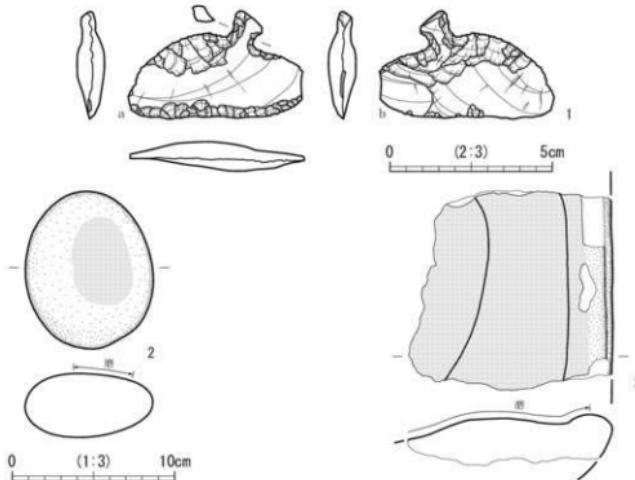
石材は、明瞭な縞状構造が観察される瑪瑙である。

##### b.疊石器(第212図-2)

楕円形の礫を素材とおり、片面中央の平坦面に使用による磨痕が観察される。石材は、石英安山岩である。

##### c.石製品(第212図-3)

周縁を有する石皿の一部であり、大部分を欠損している。図示した面の右側縁側から左側縁に向かって窪み部が形成されており、全面に磨痕がおよんでいる。石材は、石英安山岩質凝灰岩である。



図版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			測定者 (氏名)	重さ(g)	石材	母岩	打削形狀	自然面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-105	IIK	XI層	打製石器	石造	3.3	5.4	1.0	-	10.09	瑪瑙	-	-	無	完成品、椭圆形。a圖+b面加工。 複数個辺に次加工あり、表面を残す	79
2	Kc-028	IIK	XI層	磨石器	磨石	9.7	7.8	3.9	438.15	石英安山岩	鈍円錐、磨1面(平)	-	-	無	-	79
3	Kd-022	IIK	XI層	石製品	石造	(2.3)	(2.6)	(2.6)	(681.54)	石英安山岩 輝石岩	欠損品、周縁一部あり	-	-	無	-	79

第212図 XI層出土遺物

#### (9) 出土地・層位不明遺物(第213~217図)

弥生時代以前の所産と考えられる遺物は、各下層調査区から検出された遺構や各基本層以外にも、古代の遺構検出時や遺構内堆積土から多く出土しているほかに、下層調査区から出土した遺物の中で出土地や層位が不明なもの、上層から出土した縄文土器等が少数であるが存在する。本項では、これらの遺物の中から、図示可能なまでに復元されたものや、器形等に特徴がみられるものについて、種別毎に記載する。

#### a. 縄文土器(第213図-1~3)

深鉢3点を掲載した(第213図-1~3)。いずれも断面形状がU字状を呈する幅5mm程の太い沈線による横位直線文が口縁部に施文されるもので、縄文時代晩期後葉に位置付けられる大洞A<sub>1</sub>式に比定されるものであるが、粘土粒による突起が貼り付けされる1については、同C<sub>2</sub>式の可能性がある。また、1の体部外面には、明瞭な炭化物の付着が観察される。2・3については、基本層序第V層から出土した深鉢(第208図-2)と、同様の器形を呈するものと考えられる。

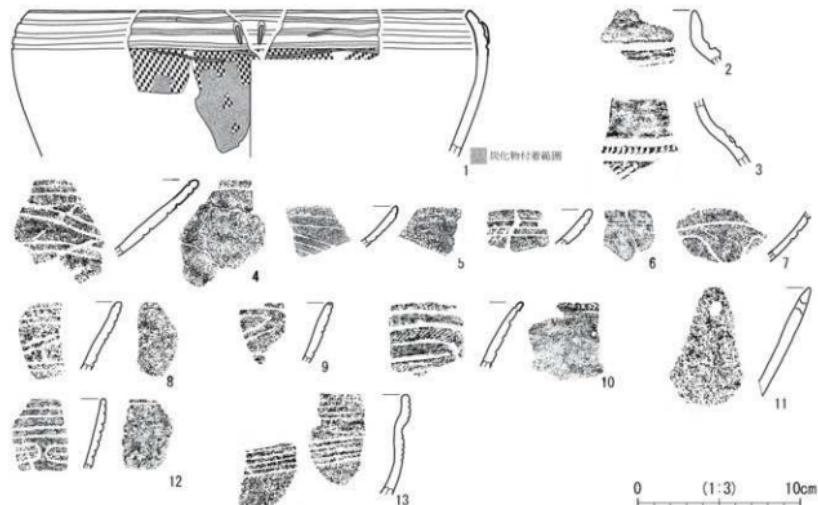
#### b. 弥生土器(第213図-4~13、第214図)

高坏4点、鉢4点、深鉢2点、甕6点、蓋3点、壺3点を掲載した(第213図-4~13、第214図)。殆どが破片資料である。高坏・鉢・深鉢・甕・蓋については、大部分がIV層から出土した土器の特徴と酷似するもので、弥生時代中

期中葉の所産と考えられるものである。胎土や地文の特徴から同一個体と考えられる第214図-10～12について、弥生時代後期に位置付けられる天王山式期に属するものと思われる。以下、器種毎に記載する。

### 高坏(第213図4～7)

第213図-4～7は、いずれも内湾気味に大きく開く器形を呈する高坏の坏部破片資料である。装飾文様は、幅1mm程の比較的細い沈線で施文されるもの(5・6)と、幅2mm程の比較的太い沈線で施文されるもの(4・7)に大別



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外出現象 (文様)	内出現象 (文様)	備考	写真回数
1	A-007	IIK	-	不明	绳文土器	深鉢	口縁 -全体上半	体上半:LR沈線文横位→斜位斜板 -1/3位:沈線→1/3位→突起斜付 (横位斜付)	横位1/3位(重)	LR位G7.0cm。 LR位器外の突起は 1対1单位(単位不明)。 体上半斜板付 横位斜付+横位斜付	79
2	A-005	IIK	-	V層	绳文土器	深鉢	口縁 -全体上端	竹→沈線	竹		79
3	A-006	IIK	-	V層	绳文土器	深鉢	口縁 -全体上端	LR位+竹 -1/3位:沈線→1/3位 (横位斜付)	竹→1/3位(重)	LR位上半消失	79
4	B-138 1次調査 1号井	-	Ⅲ層	弥生土器	高坏	口縁 -全体上半	沈線→竹	口縁:直筒	口縁:直筒→1/3位:1/3位 (横位直筒)		79
5	B-142	IIK	SDH7A 中層	弥生土器	高坏	口縁 -全体上半	LR位+竹 -1/3位:半:沈線→竹 (横位斜付)	口縁:直筒	口縁:直筒→1/3位:1/3位 (横位直筒)	内面擦耗	79
6	B-143	IIK	-	不明	弥生土器	高坏	口縁 -全体上半	沈線→LR沈線文+沈線→竹	口縁:直筒	口縁:直筒→1/3位:1/3位 (横位直筒)	79
7	B-129	IIIK	複混	-	弥生土器	高坏	体	植物多葉文→沈線→竹	竹+竹	外兩次加熱痕。 内面擦耗	79
8	B-141	IIK	複混	-	弥生土器	鉢	口縁 -全体上半	沈線→竹	竹		79
9	B-144 2次調査 1号井	SDH1 中層	堆積土	弥生土器	鉢	口縁 -全体上半	沈線→竹(有根)→泥縫内赤筋	竹	LR位+横位斜板→沈線→竹(重)→地文 (横位斜板)	LR位斜板付(對1位), 内面擦耗	79
10	B-140	IIK	SDH7A 堆積土	弥生土器	鉢	口縁	沈線→竹(有根)→泥縫内赤筋	竹	LR位+横位斜板→沈線→竹(重)→地文 (横位斜板)	LR位斜板付(對1位), 内面擦耗	79
11	B-145 1次調査 9号井	-	不明	弥生土器	鉢	口縁 -全体上半	沈線→LR沈線文+沈線→竹 (横位斜板+方形文)	竹+竹	口縫化 (燒成面+外+内+燒成面?)	79	
12	B-146	IIK	複混	-	弥生土器	深鉢	口縫	沈線→LR沈線文+沈線→竹	竹+竹	地文→地位1/3位 (横位直筒)	79
13	B-147	IIK	-	不明	弥生土器	深鉢	口縫 -全体上半	LR位+竹→竹 -1/3位:1/3位:沈線→竹 (横位直筒)	横位1/3位(重)	内外面炭化物付着	79

第213図 出土地・層位不明遺物(1)

され、沈線の断面形状は、共にU字状を呈する。

文様意匠は、横位直線文と連弧文ないし連続山形文の組み合わせが施文されるものが多い。7の体部には波状の意匠が施文されるものであるが、破片資料であるため判然としない。口縁部が残存する4～6については、口縁部内面にも横位直線文が施文される。また、文様内には地文が充填されるもの(5・6)や、赤彩されるものがある(5)。

#### 鉢(第213図-8～11)

第213図-8～11は、いずれも体部が直線的に外傾する鉢である。口縁部は内湾するもの(8)、体部から継続して直線的に外傾するもの(9・11)、外反するもの(10)がある。精製品である8～10については、前二者が幅1.5～2mmの比較的細い沈線、後者が幅3mmの太い沈線により、装飾文様が施文される。沈線の断面形状は、共にU字状を呈する。

文様意匠は横位直線文と連弧文、連続山形文、方形文のいずれかの組み合わせが施文され、10は磨消繩文手法により文様内に地文が施文され、地文部が赤彩される。また、8・10は口縁部内面にも横位直線文が施文され、10の沈線の上位には、外面と同様にL R繩文が回転施文される。

11は地文が施文されず、ケズリ調整後に粗いミガキが施されるのみのもので、口縁部には焼成後に内外面両側から施された穿孔が1箇所認められる。

#### 深鉢(第213図-12・13)

第213図-12・13は、共に精製深鉢の破片資料である。いずれも口縁部が内湾する器形を呈するもので、装飾文様は幅1.5mm程の比較的細い沈線で施文される。沈線の断面形状は共にV字状を呈する。

12の外面には、横位直線文と方形文の組み合わせが施文される。方形文は、方形に施文された沈線の内部に1条の横位直線文が施文されるものである。また、口縁部内面にも横位直線文が施文される。13は口縁部と体部に横位直線文がそれぞれ多条に施文されるもので、口縁部と体部の間はミガキ調整により無文となる。内面は、いずれも丁寧なミガキ調整が施される。

#### 甕(第214図-1～6)

第214図-1～6は、いずれも破片資料の甕である。口縁部に最大径を持つもので、器高25cm内外の中型品と推定されるものである。程度の違いはあるものの、口縁部と体部の境には括れを持ち、口縁部が短く外反する。口縁部には明瞭なヨコナデ調整、体部には地文が施文されるものが大部分である。6を除く体部上端には口縁部と体部を区画するように列点刺突文が施文され、その方向には左右の別のほか、器面に対し直角に施文されるもの(2)や、2段にわたるもの(5)が認められる。

#### 蓋(第214図-7～9)

第214図-7～9は、蓋である。7は全体の器形が復元されたもので、口径と器高の比率は2:1、口径と天井径の比率は、ほぼ2.5:1となる。体部から口縁部の器形は外反する「八」字状を呈するもので、8・9もまた、これに近い器形を呈するものと推定される。9の口縁部は、外面側に屈曲を持つ。

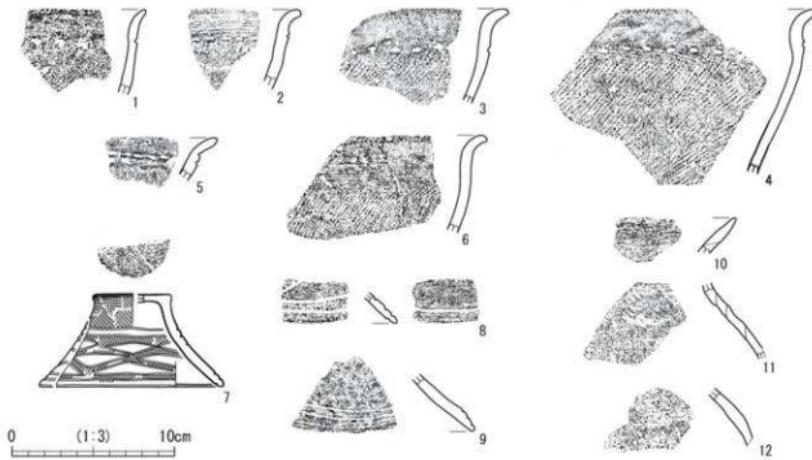
装飾文様は幅1mm程の比較的細い沈線で施文されるもの(7・9)と幅2mm程の比較的太い沈線で施文されるもの(8)があり、沈線の断面形状は、7のみV字状、8・9はU字状を呈する。

文様意匠は、7・8が横位直線文と連続山形文の組み合わせが施文され、9は口縁部に横位直線文のみが多条に施文される。7は体部下半を区画するように横位直線文が施文され、その体部下半には点対称に施文された連続山形

文の上位に、横位に半单位ずらした連続山形文が施文される。文様内には地文が充填された後、ミガキ調整が施されることで無文部が表出され、さらに沈線内が赤彩される。また、口縁部内面にも横位直線文が施文される。8は破片資料で不明な点が多いが、7と同様に、沈線内の赤彩が観察される。8は口縁部に横位直線文が多条に施文されるものである。

#### 壺(第214図-10~12)

第214図-10~12は、同一個体と考えられる壺の破片資料である。体部上半に最大径を持つものと推定され、口縁部は直線的に外傾し、口唇部が先細る。外面には無節Lの単軸絹条件が回転施文される。



番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	外面調査 (文様)	内面調査 (文様)	参考	写真 図版
1	B-152	II区	-	不明	陶生土器	壺	口縁 -体上半	L字縁-平底 →-1回-体上半-L字縁(横位)横位回転 →-1回-例-点刺突(左→右)	18°	体部上半前面赤色顔料付着	79
2	B-154	II区	SD17	堆積土	陶生土器	壺	口縁 -体上半	L字縁-平底 →-体上半-L字縁(横位)横位回転 →-1回-例-点刺突(右→左)	18°	口縁部L字縫体部内面黒化	79
3	B-151	II区	-	不明	陶生土器	壺	口縁 -体上半	L字縁-平底 →-1回-体上半-L字縁(横位)横位回転 →-1回-例-点刺突(左→右)	横位18°	内外面黒化	79
4	B-149	I次調査 II区	-	II	陶生土器	壺	口縁 -体上半	体上半 →-1回-例-手-L字縁(横位)横位回転 →-1回-例-点刺突(右→左)	口縁-横位18° 体上半:17°	口縁部-体部上半外面 黒化物付着	79
5	B-153	III区	-	不明	陶生土器	壺	口縁 -体上半	体上半 →-1回-下縁-例-点刺突(右→左) →-1回-17°	17°	-	79
6	B-150	I次調査 II区	-	不明	陶生土器	壺	口縁 -体上半	口縁-平底 →-1回-体上半-L字縁(横位)横位回転	17°	口縁部上半内外面黒化	79
7	B-155	II区	梗及	-	陶生土器	壺	天井 -口縁	天井-本面直、底-口縁-沈線→L字縁文 →-1回-例-点刺突-沈線内赤彩 (横位直縁文-連續山形文)	17°	L底径4.0cm、天井径4.8cm、 高さ5.7cm L縫部内面黒化 1回加えび2回体部上半内面 黒化付着	79
8	B-156	III区	-	Ⅲ層	陶生土器	壺	体下半 -口縫	?2?→沈線-1次文縫回転? →-1回-例-沈線-体下半-口縫-17°(横位) (横位直縁文)	17°	17°	79
9	B-157	II区	SD17B	堆積土	陶生土器	壺	体下半 -口縫	?2?→沈線-1次文縫回転? →-1回-例-沈線-体下半-口縫-17°(横位) (横位直縁文)	17°	-	79
10	B-158	III区	-	梗及	陶生土器	壺	口縫	?2?→單輪軸条件1横位回転 →-1回-單輪軸条件1横位回転	17°	B-158~160同一個体	79
11	B-159	IV区	SD21	堆積土	陶生土器	壺	体上半	?2?→單輪軸条件1横位回転 →-1回-斜位	17°	B-158~160同一個体	79
12	B-160	IV区	SD20	I層	陶生土器	壺	体上半	?2?→單輪軸条件1横位回転	17°	B-158~160同一個体	79

第214図 出土地・層位不明遺物(2)

### c. 石器(第215～217図)

古代の遺構内堆積土などから出土した打製石器15点、疊石器3点を掲載した。各器種の形態や製作技術等は、IV層およびV層から出土したものと共通する部分が多い。以下、種別毎に記載する。

#### 1) 打製石器(第215～217図-1)

石鏨3点、尖頭器1点、石錐1点、二次加工のある剥片5点、微細剥離痕のある剥片4点、石庖丁1点を掲載した。石庖丁は未成品であり、擾乱から出土している。

以下、器種毎に記載する。

#### 石鏨(第215図-1～3)

第215図-1～3は、いずれも有茎の石鏨である。第215図-1は、長さ2.0cmの小型の石鏨、2・3は長さ3.1cmを超える大型の石鏨である。a・b両面に平坦剥離が施され、b面中央の基部寄りに素材剥片の剥離面がわずかに残される。茎部が作出された後に身部の整形が行われ、身部の側縁形態は細かい剥離調整により直線的に仕上げられているが、平面形は左右非対称であり、側面観も身部の中間から基部にかけて厚みをもつことから、失敗品と考えられる。断面形状は身部が扁平な菱形、茎部は菱形を呈する。

第215図-2は、a・b両面に平坦剥離が施され、a面尖端部寄りに素材剥片の背面がわずかに残存する。製作工程は身部が作出された後、茎部の整形が行われている。身部の側縁は細かい剥離調整により直線的に仕上げられている。断面形状は身部が扁平な菱形、茎部は菱形を呈する。

第215図-3は、a・b両面の全面に平坦剥離が施され、素材剥片の剥離面は残存しない。製作工程は身部が作出された後、茎部の整形が行われている。身部の側縁は細かい剥離調整により整形されており、内湾する。茎部は深い抉り込みによって作出されている。身部の断面形状は薄い菱形を呈する。尖端部および茎部は欠損しており、尖端部については衝撃剥離によるものと考えられる。

これらの石鏨に用いられている石材は、1・2が碧玉、3が珪質頁岩である。

#### 尖頭器(第215図-4)

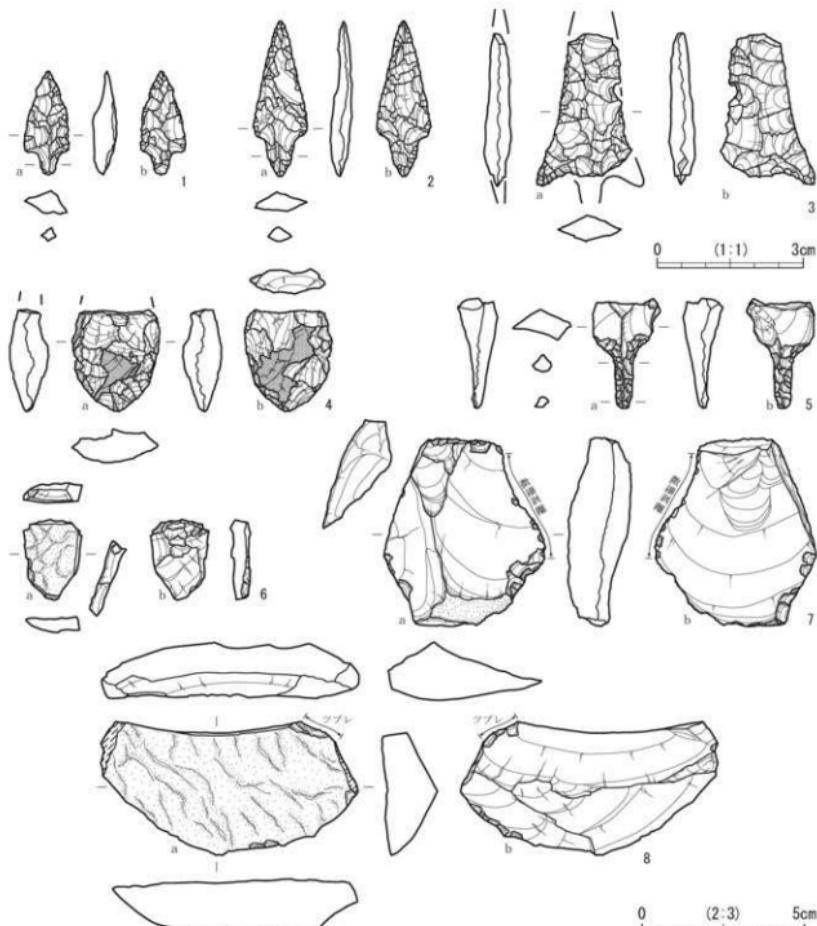
b面が素材剥片の主要剥離面で、a・b両面中央に残存する素材剥片の剥離面は調整面とは異なるくすんだ状態であり、熱を受けた剥片を素材としている。加熱処理が行われた可能性も考えられる。a・b両面の周縁は平坦剥離により整形されている。尖端部は欠損しており、折れ面とa面の尖端部側には衝撃剥離が認められる。石材は、玉髓である。

#### 石錐(第215図-5)

b面に垂直割れが認められる剥片を素材とし、a面左右両側縁から施される74～86度の急角度な剥離調整と、b面左右両側縁からの平坦剥離で尖端部が作出されている。尖端部と基部の境界は明瞭であり、断面形状は基部が扁平な菱形、尖端部は菱形を呈する。石材は、黒色頁岩である。

#### 二次加工のある剥片(第215図-6～8、第216図-1・2)

第215図-6～8、第216図-1・2に掲載した二次加工のある剥片は、a・b両面に剥離調整が施されるもの(第215図-6～8、第216図-1)、背面であるa面のみに施されるもの(第216図-2)に区別される。剥離調整はとともに平坦剥離で、その内1点はツブレ状のもの(第215図-8)と複合して認められる。また、第216図-1を除き、すべてに自然



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法長(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	調整角(度)	重さ(g)	石材	器形	打痕形状	自然面	備考	写真 回数
1	Ka168	II区	SD17A	堆積土	打製石器	石鏟	2.0	0.9	0.5	-	0.69	碧玉	-	-	有朱, 完成品, 先端角33°, 厚幅比0.55	79	
2	Ka167	-	-	表様	打製石器	石鏟	3.2	1.2	0.4	-	1.05	碧玉	-	-	有朱, 完成品, 先端角30°, 厚幅比0.33,	79	
3	Ka001	1次調査 1号坑	-	不明	打製石器	石鏟	0.11	0.9	0.5	-	0.16	珪質頁岩	-	-	素朴面残存	79	
4	Ka003	1次調査 6号坑	掘孔	-	打製石器	尖頭器	0.1	2.7	1.2	-	(0.16)	玉髓	-	-	有朱, 完成品, 両端部欠損	79	
5	Ka169	III区	SD17A	堆積土	打製石器	石鏟	3.2	2.1	0.9	-	3.41	黑色頁岩	-	-	表面加工, 厚幅比0.44, 素材面残す, 加熱処理なし	79	
6	Ka172	II区	S22	堆積土 上層	打製石器	二次加工の ある薄片	2.4	1.8	0.6	-	2.90	瑪瑙	傾	-	有 a面+b面加工, 種數線邊に二次加工あり	79	
7	Ka006	2次調査 1号坑	-	不明	打製石器	二次加工の ある薄片	5.3	5.0	1.8	129	41.44	流紋岩	-	平凹	有 a面+b面加工, 種數線邊に二次加工あり, 1辺に微細網状面あり	80	
8	Ka170	III区	不明	埋留	打製石器	二次加工の ある薄片	4.1	8.0	1.6	117	54.62	流紋岩	-	平凹	有 a面+b面加工, 種數線邊に二次加工あり	80	

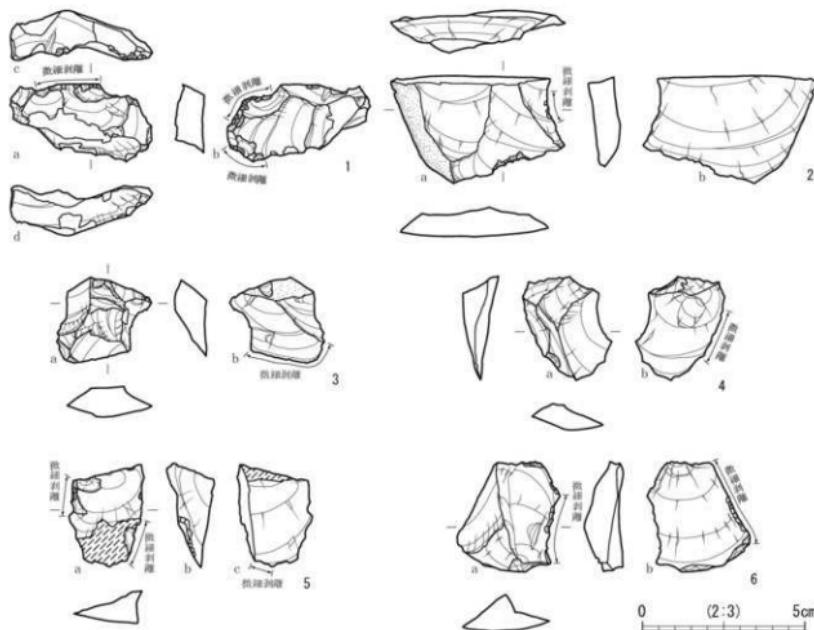
第215図 出土地・層位不明遺物(3)

面が残存している。この他、剥離調整が微細剥離痕と複合して認められるもの(第215図-7, 第216図-1・2)がある。

第215図-7は、明瞭な打点部が観察されるもので、バルブが発達した剥片を素材としている。a面左右両側縁の下端側と、b面右側縁の下端側に剥離調整が施されている。a面右側縁およびb面左側縁の、角度が35~50度の鋭利な部分に微細剥離痕が認められる。

第216図-1は、剥片素材の石核に、さらに二次加工が施されたものである。d面が素材剥片の主要剥離面であり、石核時の最終作業面はa面で最大長1.5cm程度の小型の剥片が剥離されている。a面左右両側縁および上端縁、b面左側縁に調整剥離が施され、a面上端縁およびb面左側縁に微細剥離痕が認められる。

これら二次加工のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(第215図-7・8、第216図-2), 瑪瑙(第215図-6), 珪質頁岩(第216図-1)である。



回数 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	剥片	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	剥離角 (度)	重さ g	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 回数
1	Ka.002	1次調査 1号坑	-	不明	打製石器	二次加工の ある剥片	2.4	4.4	1.5	-	10.75	珪質頁岩	-	-	無	a面+b面加工、b面縁間に二次加工あり。 両斜縁間に微細剥離痕あり	80
2	Ka.171	IR	-	椎乳	打製石器	三次加工の ある剥片	3.3	4.9	0.9	-	16.28	流紋岩	26	-	有	a面加工、1枚辺に二次加工あり。 b面縁間に微細剥離痕あり	80
3	Ka.174	IR	SD17A	堆積土	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	2.6	2.9	1.0	132	5.83	珪質頁岩	37	自然	有	1枚辺に微細剥離痕あり	80
4	Ka.175	IR	-	椎乳	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	3.2	2.8	1.1	112	5.02	流紋岩	-	切子	無	1枚辺に微細剥離痕あり	80
5	Ka.176	IR	SD17A	堆積土	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	3.2	2.4	1.0	108	5.46	流紋岩	-	磨理	無	微細剥離痕あり	80
6	Ka.173	IR	SE3	Pt1 堆積土	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	3.4	3.2	1.2	135	7.17	流紋岩	-	直	無	微細剥離痕あり	80

第216図 出土地・層位不明遺物(4)

#### 微細剥離痕のある剥片(第216図-3~6)

第216図-3~6は、微細剥離痕のある剥片で、1縁辺のみに微細剥離痕が観察されるもの(3・4)、複数の縁辺に観察されるもの(5・6)に大別される。また、自然面打面のもの(3)、節理面が打面部およびa面下端部に残存するもの(5)が認められる。6は下端部の折れ面が微細剥離痕よりも新しい面である。

これら微細剥離痕のある剥片に用いられている石材は、流紋岩(同図-4・5・6)、珪質頁岩(同図-3)である。

#### 石庖丁(第217図-1)

第217図-1は、攪乱から出土したもので、穿孔を行う前段階の外弯刃半月形を呈する石庖丁未成品である。素材は台石打法により剥離されたものと考えられ、b面中央は、素材の剥離面と考えられる。a・b両面に剥離による整形が行われているが、b面では上下両端縁に観察される程度で、全面におよぶものではない。器体の厚さは1.5cm程度で、剥離整形のみで目的とする厚みに達したものと考えられる。

また、接合関係は認められなかったものの、同一母岩と考えられる剥片が第2次確認調査5トレンチの攪乱から2点出土している。内1点は重量が176.58gの素材剥片、もう1点は整形時に生じた小型の剥片であることから、本遺跡内で石庖丁が製作されていた可能性が考えられる。石材は、頁岩である。

この石庖丁に用いられている頁岩は、北上山地(本遺跡から北東約45km)や阿武隈山地(本遺跡から南方約40km)といった遠隔地で採取されたものと考えられる(蟹澤聰史氏の御教示による)。なお、本遺跡の南東約3.1kmに位置する高田B遺跡からは、石庖丁が破片資料を含め総数150点出土している。全体の6割は弥生時代中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式期に形成された遺物包含層と自然流路跡の堆積土最下層からの出土であり、残りは水田耕作土を含む中世・近世の遺構、および自然流路跡の最下層以外の堆積土などから出土している。これらの石庖丁については、製作工程と搬入形態について考察されている(仙台市教委2000)。

#### 2) 磨石器(第217図-2~4)

出土地・層位不明の磨石器3点を掲載した。

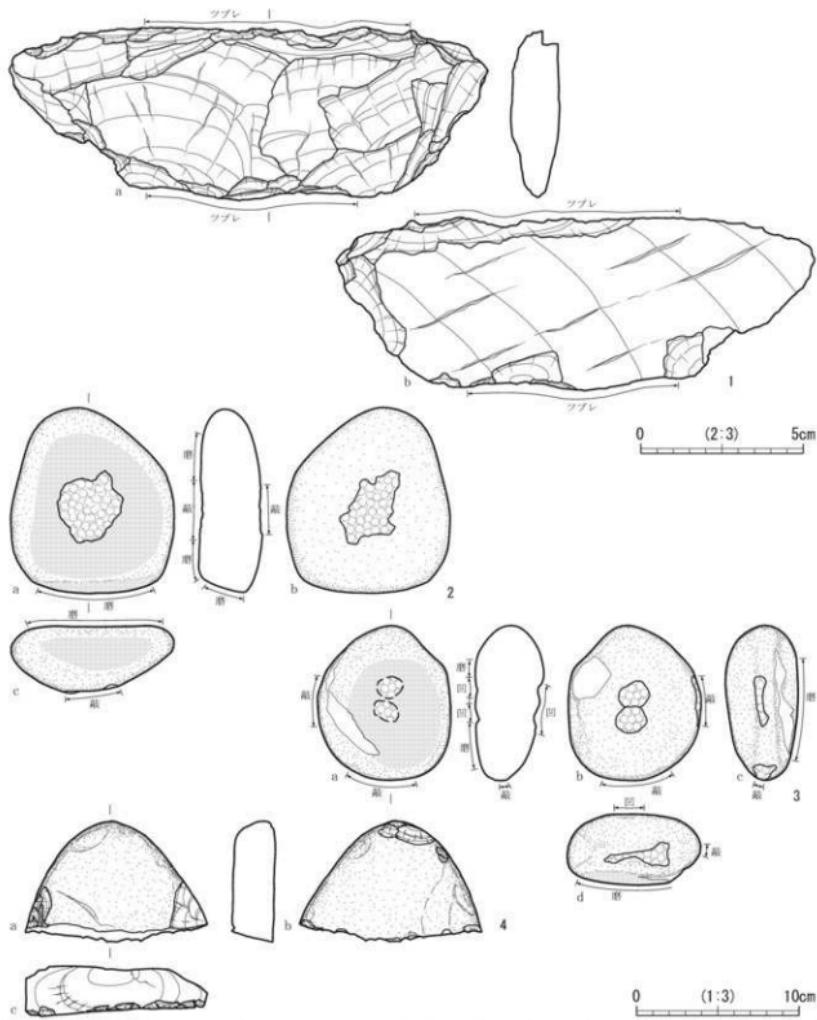
#### 磨・凹・敲打痕(第217図-2・3)

第217図-2は、磨痕と敲打痕が複合して観察されるものである。扁平な不整円錐を素材とし、a面とc面の中央の平坦面には広範囲におよぶ磨痕、a面とc面の中央には、弱い敲打痕が観察される。また、a面の敲打痕は磨痕よりも新しい使用痕跡である。石材は、砂岩である。

第217図-3は磨痕、凹痕、敲打痕が複合して観察されるものである。扁平な不整円錐を素材とし、a面中央の平坦面には広範囲におよぶ磨痕、a・b両面の中央には浅い凹痕、a面左側縁および下端縁には弱い敲打痕が観察される。a面の磨痕は敲打痕よりも新しい使用痕跡である。石材は、石英安山岩である。

#### 櫛器(第217図-4)

片刃の櫛器である。扁平な自然錐がa面側からの加撃により分割され、分割面c面の下端縁には連続する剥離調整が施されることで刃部が形成されている。a面の左右両側縁に施される剥離調整は、分割面に先行する剥離痕である。石材は、石英安山岩質凝灰岩である。



第217図 出土地・層位不明遺物(5)

図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)			測量角 (度)	重さ(g)	石材	器質	打削 形状	自然面	備考	写真 回数
							長さ	幅	厚さ								
1	Ka-008	2次調査 B14.2	複瓦	-	打撲石器	石板丁	14.7	5.3	1.5	-	127.27	頁岩	28	-	無	未成品	80
2	Kc-020	IK	複瓦	-	砸石器	磨・敲	11.3	10.0	3.8	658.86	砂岩	小型円盤、擦2面(平)、敲1面(扁所)程度(斜)	80				
3	Kc-031	IK	不明	複瓦	砸石器	磨・凹・敲	9.5	8.2	4.3	474.17	石英安山岩 崩(東上傾側+西1傾側)程度(斜)	小型円盤、磨1面(平)、凹2面(面深さ5mm)	80				
4	Kc-032	IK	不明	複瓦	砸石器	磨	7.4	11.2	3.1	272.13	石英安山岩 崩(東上傾側+西1傾側)程度(斜)	片刃、a面+b面+分割面に二次加工跡	80				

#### (10) 接合資料(第218~234図)

I区のIV層およびV層から出土した打製石器に、同時割れの接合資料を含めた21例の接合資料が確認された。その中にはIV層出土石器とV層出土石器が接合しているものも5例認められる。

今次調査において確認された接合資料は、石核を有するもの(接合資料1~5)と無いもの(接合資料6~21)に大別される。石核を有するものについては、小型の原石を素材とするもの(接合資料1~3)、剥片素材のもの(接合資料4)、素材不明なもの(接合資料5)に、石核の無いものについては、剥片(二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片を含む)同士が接合するもの(接合資料6~19)、スクレイパーの接合資料(接合資料20)、ビエス・エスキューの接合資料(接合資料21)に分けられる。

石材は、流紋岩が最も多く確認され(接合資料3・6~13・15~17)、そのほかには黒色頁岩(同5・18・20)、碧玉(同1・2)、珪質頁岩(同4・14)、瑪瑙(同19)、珪化凝灰岩(同21)が用いられている。

以下では、これら21例の接合資料について、個別に記載する。

##### 接合資料1(第218図、写真図版81)

IV層から出土した剥片3点と石核1点の接合資料で、長さ6.6cm、幅6.5cm、厚さ6.0cmの分割礫を素材として剥片剥離作業が行われている。

自然面であるb面を打面として、厚みのある剥片(1)を剥離することで打面が形成された後、打面を90度転移してa面を打面とし、2および3の剥片が剥離されている。石核に残された剥離面から、さほど多くの剥片が剥離されていないことが確認できる。剥離された剥片は、1が長さ5.6cmと最も大きく、その他は3cm前後と小型である。

石材は、碧玉である。

##### 接合資料2(第219図、写真図版81)

IV層から出土した剥片1点、V層から出土した剥片2点と石核1点の接合資料で、分割礫を素材として剥片剥離作業が行われている。

石核は全ての面で自然面が残存していることから、原石はさほど大きいものと考えられる。e面は分割面であり、節理面で分割されている。d面に剥片剥離作業の初期に剥離された面が残されており、その剥離面を打面として剥片(1)が剥離された後、打面を180度転移し、e面を打面として剥片(2)が剥離されている。剥離された剥片は、いずれも長さ2.9cm以下の小型のものである。

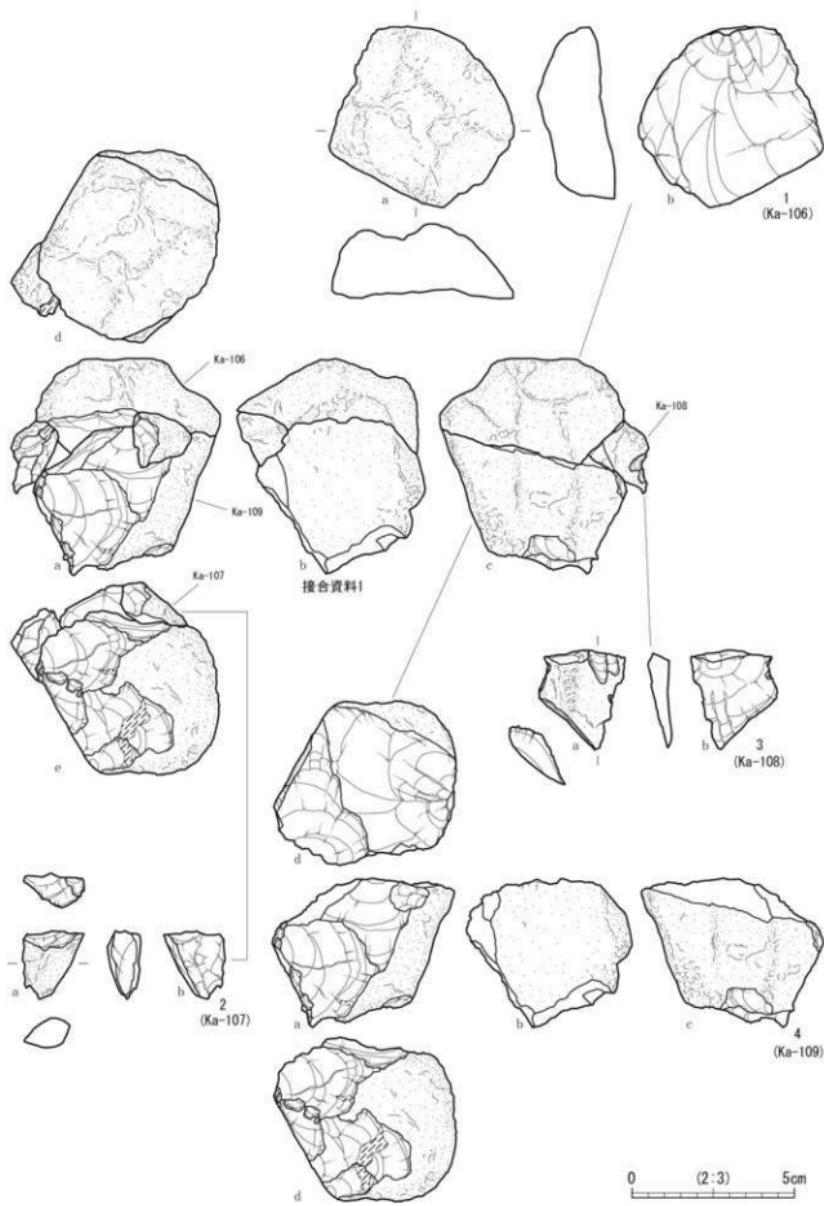
石材は、碧玉である。

##### 接合資料3(第220図、写真図版82)

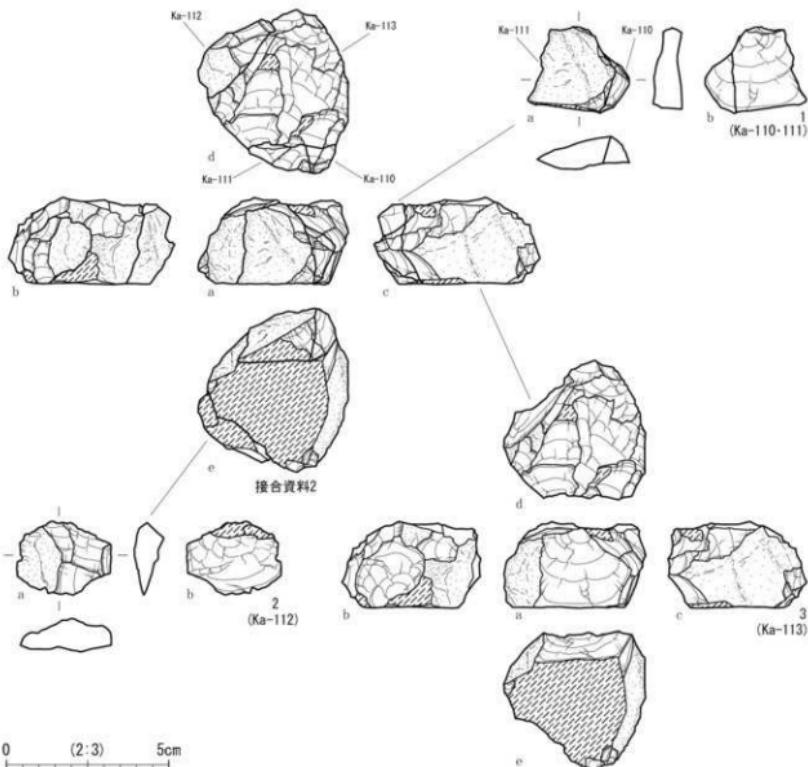
IV層から出土した剥片1点と石核1点の接合資料で、礫を素材として剥片剥離作業が行われている。

石核は全ての面で自然面が残存していることから、原石はさほど大きいものではなく、接合資料1よりも小さいものと思われる。a面もしくはd面の剥離面が古い剥離である。剥離によって形成されたd面を打面として剥片(1)が剥離されているが、同時割れにより末端部を欠損している。

石核に残された剥離面からは、さほど多くの剥片が剥離されていないことが推測され、剥離面の観察から、剥離された剥片は小型のものであったことが窺われる。石材は、流紋岩である。



第218図 接合資料(1)



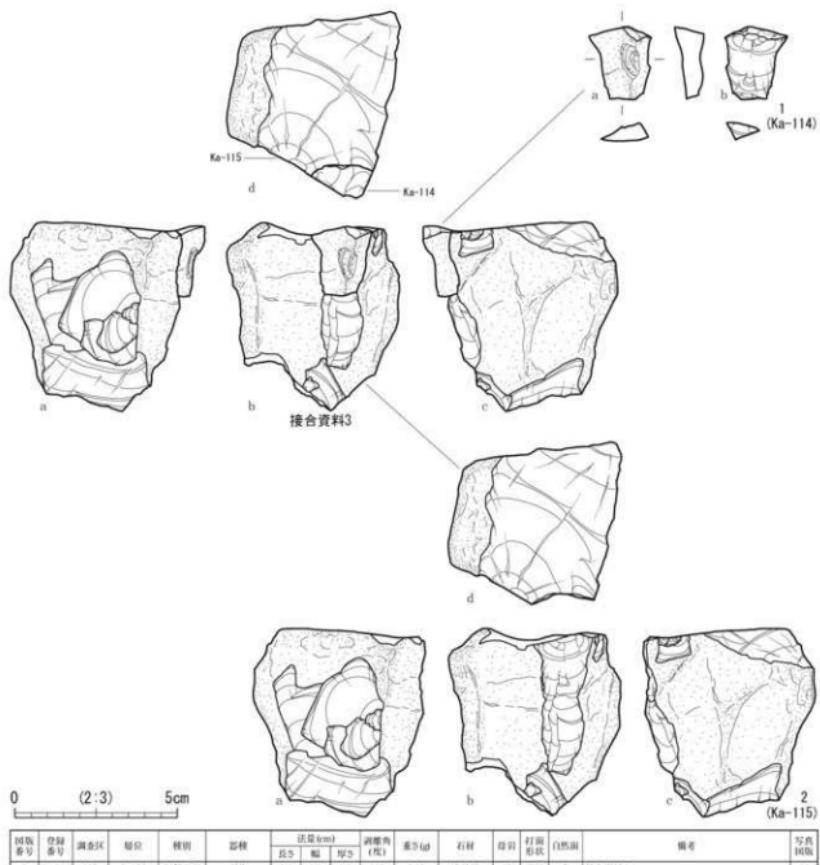
第218図 接合資料(1)概観図

団版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-106	IK	V層	打製石器	剥片	5.6	5.7	2.4	99	80.62	碧玉	43	自然	有	接合資料1	81
2	Ka-107	IK	Nd層	打製石器	剥片	2.3	1.9	1.0	99	3.23	碧玉	43	平頭	有	接合資料1	81
3	Ka-108	IK	V層	打製石器	剥片	3.0	2.6	1.3	121	8.58	碧玉	43	自然	有	接合資料1	81
4	Ka-109	IK	V層	打製石器	石核	5.6	5.0	4.5	—	128.75	碧玉	43	—	有	接合資料1, 分割難素材, 打面板様あり, 打面4面, 作業面4面	81

第219図 接合資料(2)概観図

団版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-110	IK	V層	打製石器	剥片	—	—	—	—	—	碧玉	41	—	有	接合資料2, Ka-111と同時剥れ, 法量はKa-110+Ka-111	81
	Ka-111	IK	V層	打製石器	剥片	2.6	3.2	1.3	83	7.23	碧玉	41	平頭	有	接合資料2, Ka-110と同時に剥れ, 法量はKa-110+Ka-111	81
2	Ka-112	IK	Nd層	打製石器	剥片	2.2	2.9	1.0	121	5.32	碧玉	41	端理	有	接合資料2	81
3	Ka-113	IK	V層	打製石器	石核	2.7	4.4	4.3	—	53.82	碧玉	41	—	有	接合資料2, 分割難素材, 打面板様あり, 打面4面, 作業面4面	81

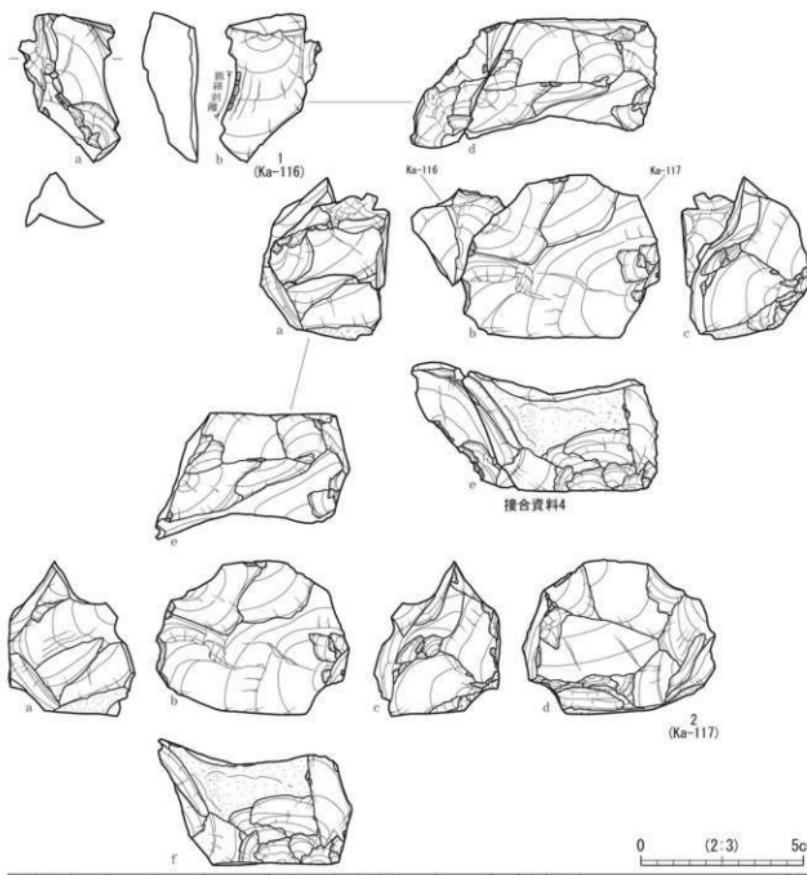
第219図 接合資料(2)



第220図 接合資料(3)

接合資料4(第221図、写真図版82)

IV層から出土した微細剥離痕のある剥片1点と石核1点の接合資料で、剥片を素材として剥片剥離作業が行われている。b面は素材剥片の主要剥離面で、c～e面の剥離面は新旧関係が不明であるものの、いずれも剥片剥離作業の早い段階の剥離面である。その後、b面を打面として剥片(1)が剥離され、最終的な剥離面はd面を打面とし、作業面b面で行われている。これらは打面調整や頭部調整が認められず、打面転移を繰り返しながら剥片剥離が進行している。剥離面の観察から、小型の剥片が剥離されていることが推測される。また、石核(2)は打面と作業面の角度が大きく十分な剥片剥離が行われずに残核となったもので、全ての面でステップフラクチャーが観察さ



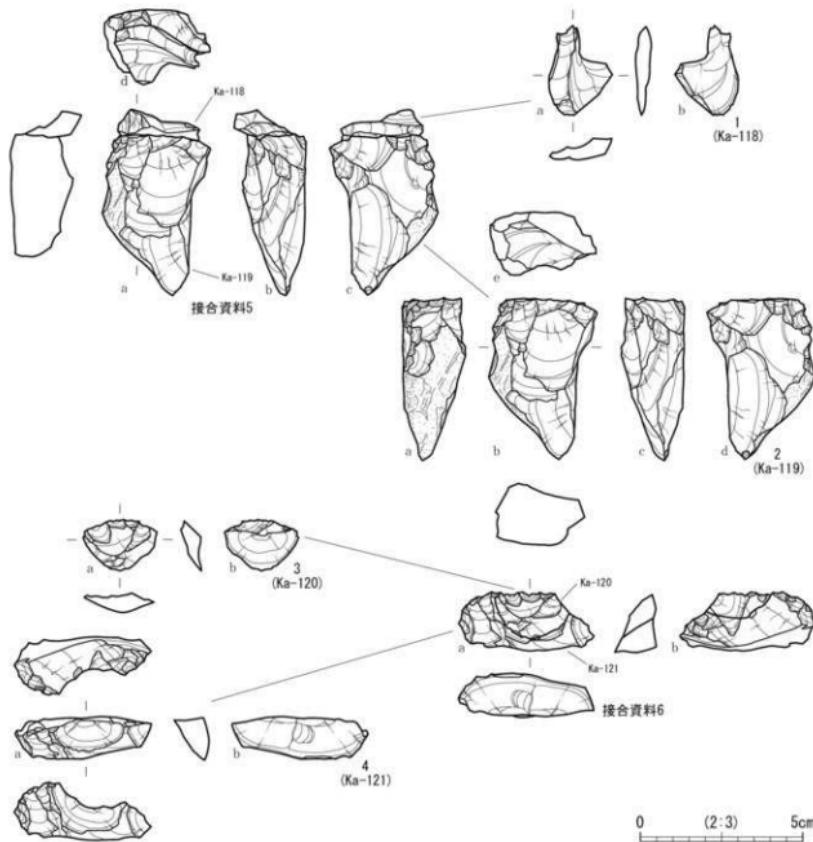
第221図 接合資料(4)

れる。なお、剥片(1)のb面左側縁には微細剥離痕が認められ、何らかの用途に用いられたものと考えられる。石材は、珪質頁岩である。

#### 接合資料5(第222図、写真図版83)

IV層から出土した打面再生剥片1点と石核1点の接合資料で、素材形状は不明であるが、石核には自然面が残存している。c面には剥片剥離作業の初期に剥離された面が観察される。その後、a面の左側面を打面としてa-c両面に連続した剥片剥離が行われ、さらに180度打面転移し、b面を打面として1の剥片を含む連続した剥片剥離が行

われた後、再び90度打面転移し、d面を打面として連続的な剥片剥離が行われている。これらは1の剥片のように時折打面再生を行なながら、連続的に剥片剥離が行われた後、打面転移が繰り返されている。剥離面の観察から、小型の剥片が剥離されたものと推定される。また、石核(2)は打面と作業面の角度が大きく十分な剥片剥離が行なわれなくなり、残核になったものと考えられる。石材は、黒色頁岩である。



第222図 接合資料(5)

国版 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打面 形状	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-118	HK	Nd層	打製石器	剥片	2.2	1.9	0.8	-	2.14	黑色頁岩	29	-	無	接合資料5	83
2	Ka-119	HK	Nd層	打製石器	石核	5.0	2.9	2.0	-	29.73	黑色頁岩	29	-	有	接合資料5. 分割離or 剥片素材、打面転移あり、打面4面、作業面4面	83
3	Ka-120	HK	Nd層	打製石器	剥片	1.5	2.2	0.6	127	1.48	流紋岩	27	切子	無	接合資料6	83
4	Ka-121	HK	Nd層	打製石器	剥片	1.3	4.2	1.0	98	5.25	流紋岩	27	平頭	無	接合資料6. 二次加工のある剥片の一端	83

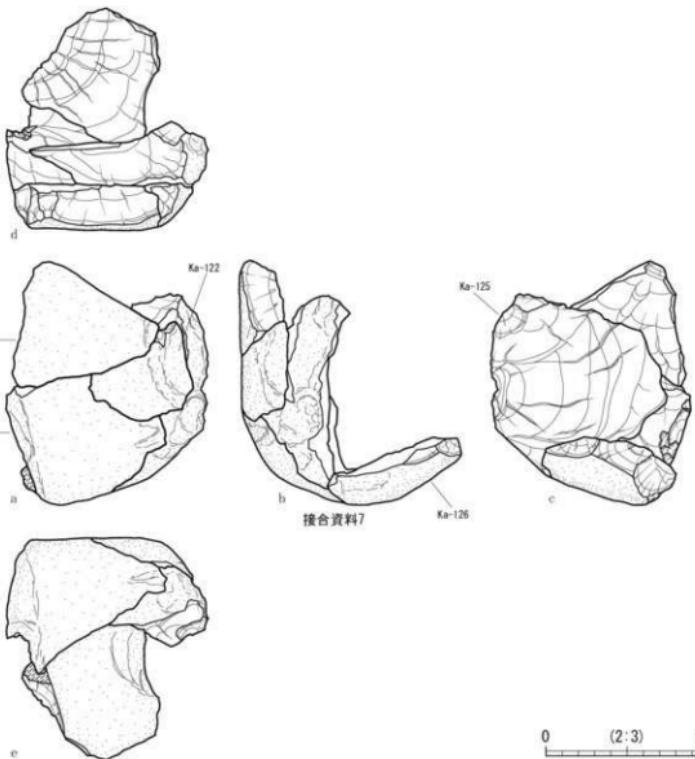
接合資料6(第222図、写真図版83)

IV層から出土した剥片2点の接合資料で、二次加工のある剥片の一端を調整している際に剥片(3)が剥離され、さらに調整が進められる段階で剥片(4)が剥離されている。ともに二次加工のある剥片の調整剥片と考えられる。石材は、流紋岩である。

接合資料7(第223-224図、写真図版83)

IV層から出土した二次加工のある剥片1点と剥片1点、V層から出土した剥片1点、IV層とV層から出土した同時割れにより接合した剥片1点の接合資料で、表皮部分での剥片剥離作業である。

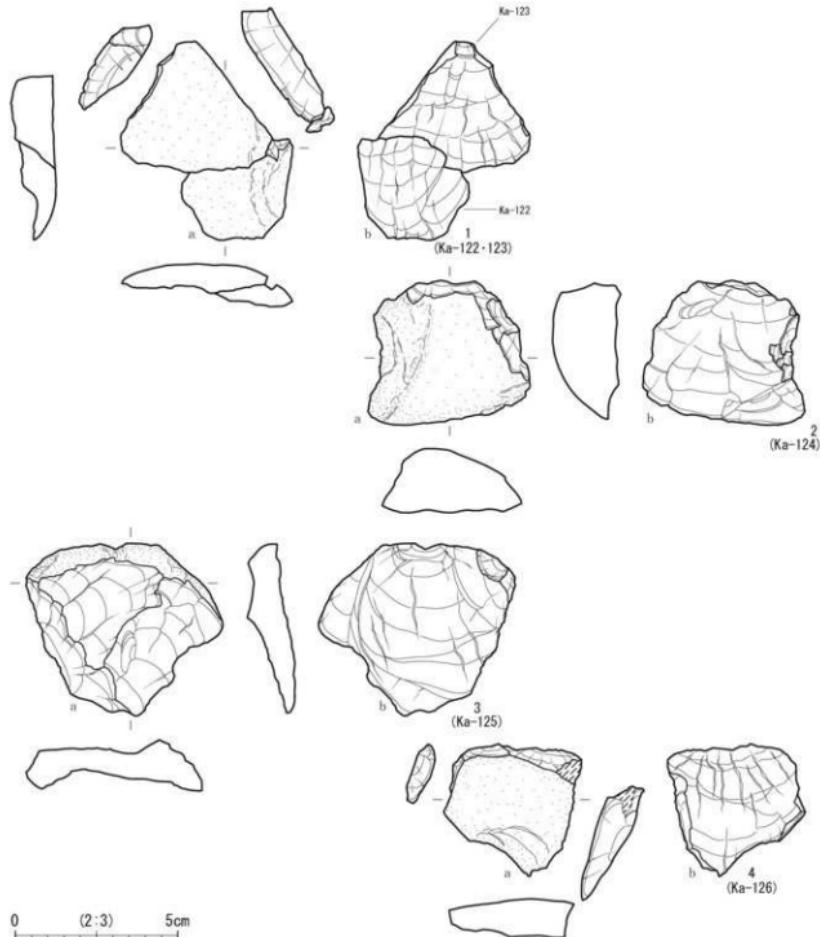
d面を打面とし、同一方向からの加撃によって第224図-1と2の剥片が剥離された後、90度打面転移しb面を打面として剥片(3)が剥離され、再び90度打面転移しc面を打面として剥片(4)が剥離されている。2の剥片はb面右側縁に二次加工が施されている。石材は、流紋岩である。



第223図 接合資料(6)

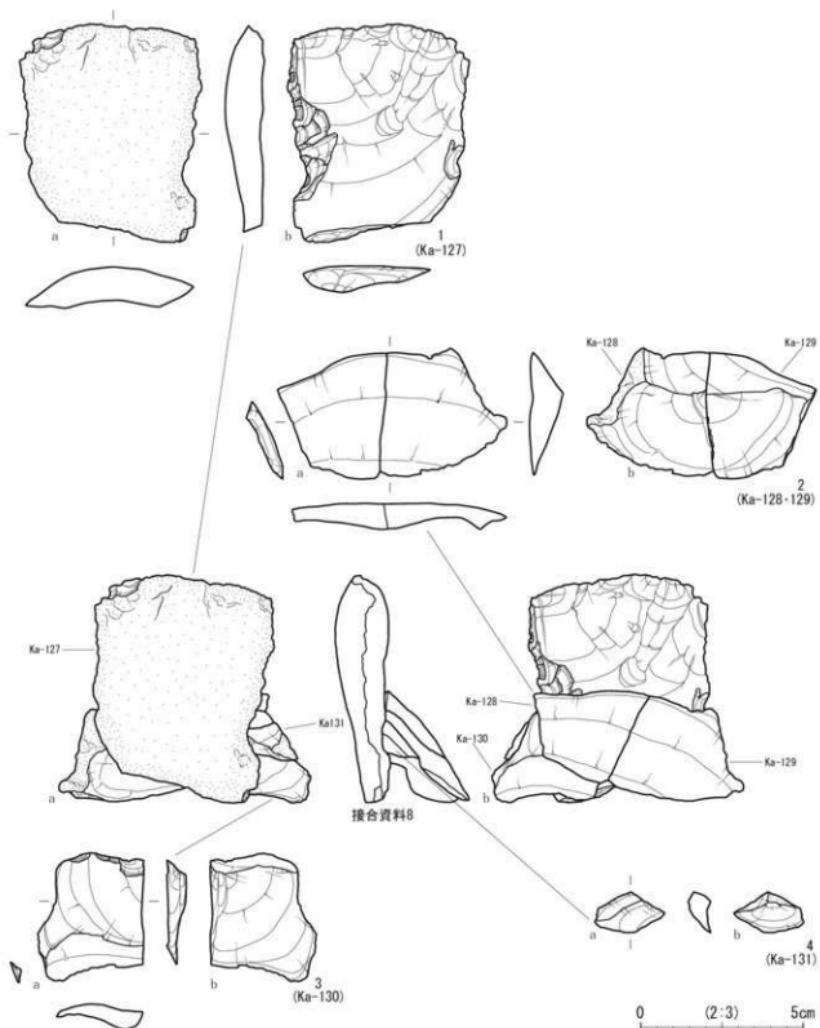
接合資料8(第225図、写真図版84)

IV層から出土した二次加工のある剥片1点と剥片1点、V層から出土した剥片1点、IV層とV層から出土した垂直割れで接合している剥片1点の接合資料で、表皮に近い部分での剥片剥離作業である。自然面を打面として剥片



第224図 接合資料(7)

図版 番号	登録 番号	調査区	層位	精別	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石種	母岩	打面 形状	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-122	IIK	V層	打製石器	剥片	~	~	~	~	~	流紋岩	11	~	有	接合資料7、Ka-123と同時に剥れ、法量はKa-122+Ka-123	83
	Ka-123	IIK	V層	打製石器	剥片	6.2	5.3	1.4	~	35.83	流紋岩	11	~	有	接合資料7、Ka-122と同時に剥れ、法量はKa-122+Ka-123	83
2	Ka-124	IIK	V層	打製石器	二次加工の あら剥片	4.5	5.0	2.2	~	47.70	流紋岩	11	~	有	接合資料7、b面加工。1層面に二次加工あり	83
3	Ka-125	IIK	V層	打製石器	剥片	6.0	5.3	1.6	~	40.85	流紋岩	11	~	有	接合資料7	83
4	Ka-126	IIK	V層	打製石器	剥片	4.1	4.2	1.3	~	19.12	流紋岩	11	~	有	接合資料7	83



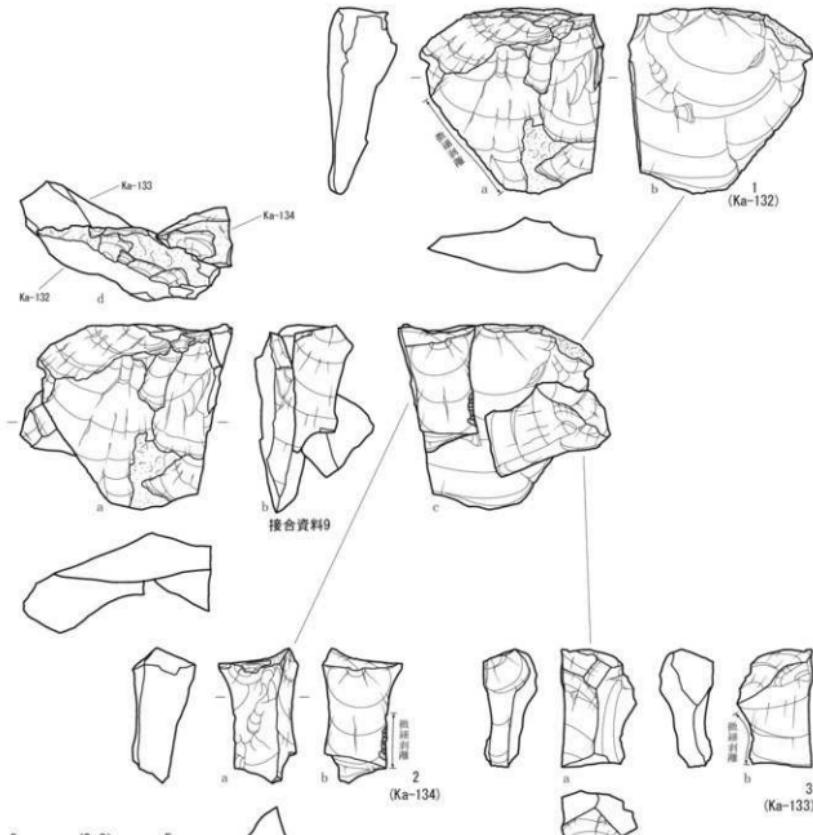
第225図 接合資料(8)

図版 番号	登録 番号	調査区	部位	種別	断面	寸法(cm)				調査員 (氏名)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形状	自然面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ									
1	Ka-127	IK	Nd層	打削石器	二次加工の ある剥片	6.7	5.6	1.2	122	50,47	流紋岩	5	離状	有	接合資料8、b面加工。1線加工に二次加工あり	84	
2	Ka-128	IK	Nd層	打削石器	剥片	4.1	7.0	1.0	136	18,27	流紋岩	5	平頭	有	接合資料8、Ka-129と重複流れ。注意はKa-128+Ka-129	84	
3	Ka-129	IK	V層	打削石器	剥片	-	-	-	-	-	流紋岩	5	-	無	接合資料8、Ka-128と重複流れ。注意はKa-128+Ka-129	84	
4	Ka-130	IK	V層	打削石器	剥片	4.0	3.2	0.6	137	7,35	流紋岩	5	平頭	無	接合資料8	84	
	Ka-131	IK	V層	打削石器	剥片	1.2	2.1	0.7	-	0.87	流紋岩	5	-	有	接合資料8	84	

(1)が剥離されている。2～4の剥片は、剥片を素材とする石核から連続的に剥離されており、素材となった剥片の背面側末端部から剥離されたものである。1の剥片のb面左側縁には二次加工が施されている。石材は、流紋岩である。

#### 接合資料9(第226図、写真図版84)

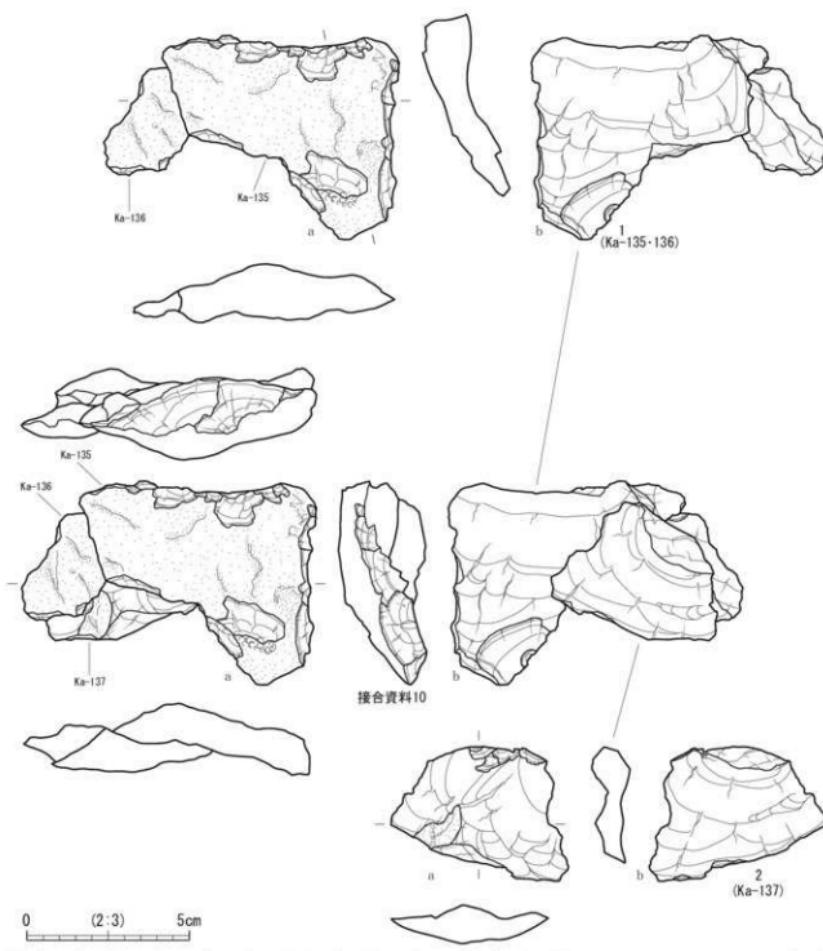
IV層から出土した微細剥離痕のある剥片3点の接合資料で、a面下端部およびd面に自然面が残存する。d面では



第226図 接合資料(9)

因版 番号	登録 番号	調査区	場所	種別	器種	法量(cm) 長さ 幅 厚さ	剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形狀	自然面	備考	写真 図版
1	Ka-132	IK	N'd層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	5.8 5.7 2.1	140	47.56	流紋岩	4	切子	有	接合資料9、1縁辺に微細剥離痕あり	84
2	Ka-134	IK	N'd層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	4.2 2.4 1.9	-	12.24	流紋岩	4	-	無	接合資料9、1縁辺に微細剥離痕あり	84
3	Ka-133	IK	N'd層	打製石器	微細剥離痕の ある剥片	3.6 2.4 1.7	125	11.02	流紋岩	4	切子	無	接合資料9、1縁辺に微細剥離痕あり	84

打面調整が行われており、その打面から1と2の剥片が剥離されている。その後、90度打面転移し剥片(3)が剥離されている。1と2の剥片には明瞭な打点が観察され、バルブが発達している。1～3の剥片は、いずれも1縁辺に微細剥離痕が観察される。石材は、流紋岩である。

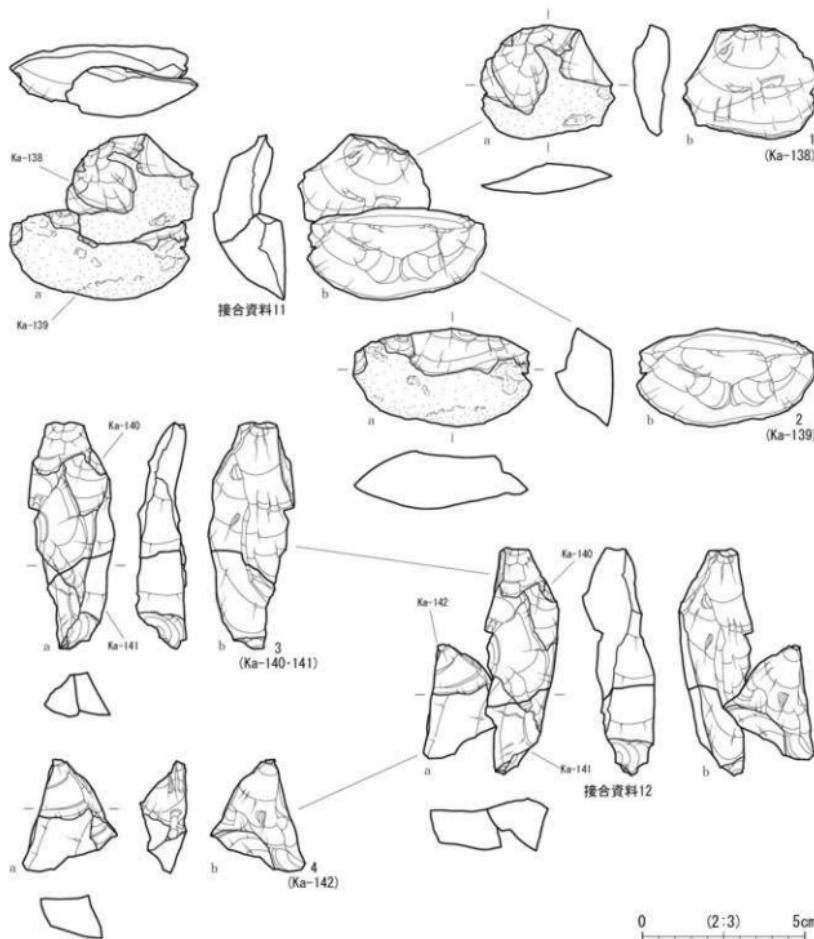


第227図 接合資料(10)

国別 番号	登録 番号	調査区	場所	種別	器種	(法量cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形状	自然面	備考	写真 回数
						長さ	幅	厚さ								
1	Ka-135	IIK	赤壁	打削石器	剥片	6.2	9.1	2.0	103	75.95	流紋岩	2	切子	有	接合資料10, Ka-136と同時剥れ, 法量12 Ka-135+Ka-136	84
2	Ka-136	IIK	赤壁	打削石器	剥片	—	—	—	—	—	流紋岩	2	—	有	接合資料10, Ka-135と同時剥れ, 法量12 Ka-135+Ka-136	84
	Ka-137	IIK	赤壁	打削石器	剥片	4.1	5.3	1.3	149	17.77	流紋岩	2	並列	無し	接合資料10	84

接合資料10(第227図、写真図版84)

IV層から出土した剥片2点の接合資料で、a面に自然面が広く残存する。打面調整と頭部調整が行われた後に1の剥片が剥離され、さらに45度打面転移し剥離面を打面として2の剥片が剥離されている。石材は、流紋岩である。



第228図 接合資料(11)

回数	登録番号	調査区	層位	種別	器物	法面(km)	剥離角(°)	重さ(g)	石材	母岩	打面状	自然面	備考	写真図版		
1	Ka-138	IIK	左壁	打製石器	剥片	2.5	4.1	1.1	124	13.05	夷和石	4	平削	有	接合資料11	85
2	Ka-139	IIK	N d壁	打製石器	剥片	3.1	5.4	1.8	124	26.35	夷和石	4	平削	有	接合資料11	85
3	Ka-140	IIK	V壁	打製石器	剥片	7.0	2.7	1.4	135	19.32	夷和石	4	平削	無	接合資料12, Ka-141と折衝接合, 法量はKa-140+Ka-141	85
4	Ka-141	IIK	N d壁	打製石器	剥片	—	—	—	—	夷和石	4	平削	無	接合資料12, Ka-140と折衝接合, 法量はKa-140+Ka-141	85	
4	Ka-142	IIK	N d壁	打製石器	剥片	3.4	2.9	1.4	126	9.36	夷和石	4	平削	無	接合資料12	85

接合資料11(第228図、写真図版85)

IV層から出土した剥片1点とIVd層から出土した剥片1点の接合資料で、a面に自然面が広く残存する。剥離面を打面として剥片(1)が剥離され、同一方向からの加撃により剥片(2)が剥離されている。1の剥片の打面に認められる二重バルブは、剥片剥離時にハンマーの接触面に凹凸があり、2点で接触したものか、もしくは、先行する加撃による潜在割れによって生じたものと考えられる。また、1の末端部は表皮の部分にあたるため、ステップフラクチャーが生じている。2の剥片は、同時割れにより打面側が失われている。石材は、流紋岩である。

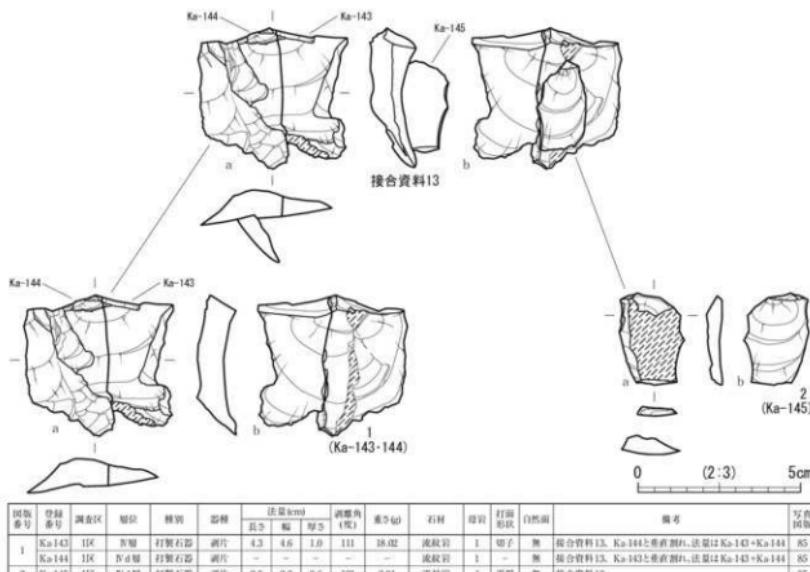
接合資料12(第228図、写真図版85)

IV層から出土した剥片1点と、IV層とV層から出土している、折れ面で接合する剥片1点の接合資料である。複数回の打面転移が行われている石核から剥離面を打面として剥片(3)が剥離され、打面は異なるが同一方向からの加撃によって剥片(4)が剥離されている。4の剥片の左右両側縁側は、同時割れによって形成された面である。石材は、流紋岩である。

接合資料13(第229図、写真図版85)

IV層から出土した剥片2点の接合資料で、剥離面を打面として剥片(1)が剥離され、打面は異なるが同一方向からの加撃によって剥片(2)が剥離されている。1に先行する剥離も同一の打面から同一方向の加撃によって剥離されているため、連続的な剥片剥離作業が行われたものと考えられる。なお、1の剥片は垂直割れを起こしている。

石材は、流紋岩である。

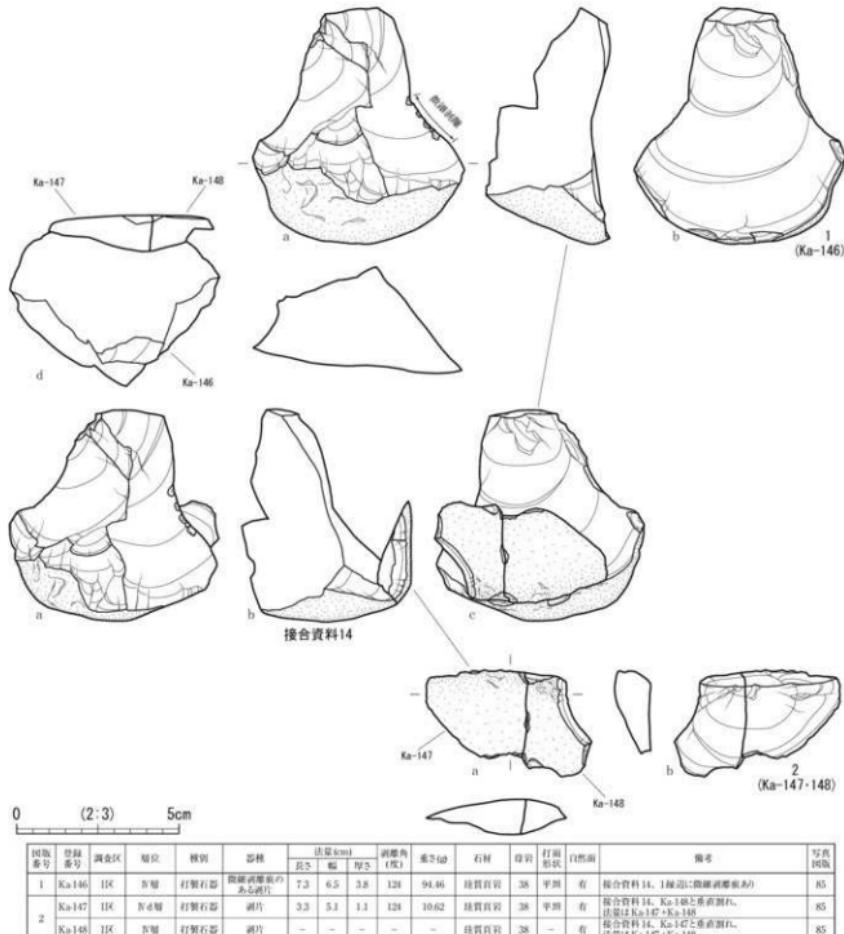


第229図 接合資料(12)

接合資料14(第230図、写真図版85)

IV層から出土した剥片1点と、折れ面で接合する剥片1点の接合資料で、a・c両面に自然面が残存する。

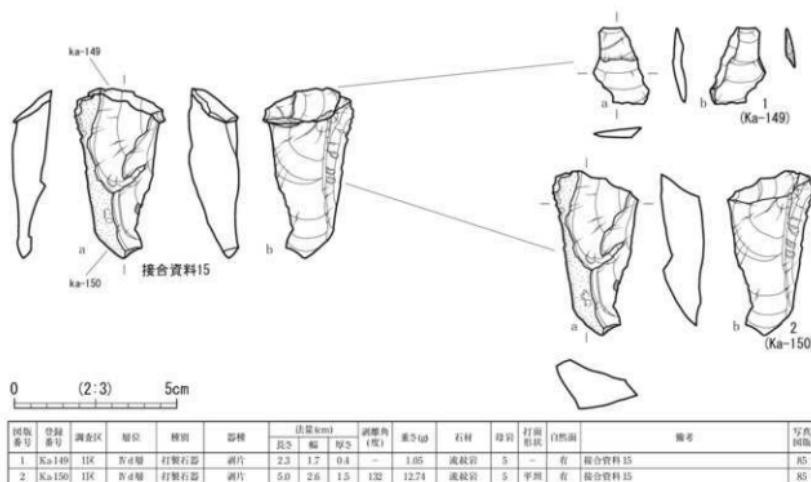
剥離面を打面として剥片(1)が剥離された後、180度打面転移し剥片(2)が剥離されている。1の剥片のa面にはステップフラクチャーやヒンジフラクチャーが観察されることから、1の剥片を剥離することによって、作業面の再生が行われた可能性が考えられる。2の剥片は、1の剥片の剥離によって形成された剥離面を打面として剥離されており、垂直割れを起こしている。末端部がヒンジフラクチャーになっているのは表皮の近くであることに起因するものと考えられる。石材は、珪質頁岩である。



第230図 接合資料(13)

#### 接合資料15(第231図、写真図版85)

IV層から出土した剥片2点の接合資料で、a面に自然面が残存する。1の剥片の剥離のように打面調整を行なながら打面を整形した後、剥離面を打面として剥片(2)が剥離されている。2の剥片は垂直割れを起こしており、二分された一方である。石材は、流紋岩である。



第231図 接合資料(14)

#### 接合資料16(第232図、写真図版86)

IV層から出土した剥片2点の接合資料で、剥離面を打面とし、同一方向からの加撃により連続的な剥片剥離作業が行われている。1の剥片は、a面に広く自然面が残存する大きな横長剥片である。石材は、節理が多く介在する質の良くない流紋岩である。

#### 接合資料17(第233図、写真図版86)

IV層とV層から出土した同時割れおよび折れ面接合の剥片で、a面右側縁側から下端部にかけて自然面が残存する。b面左側縁側に潜在割れが認められ、右側縁側は同時割れの痕跡が観察される。石材は、流紋岩である。

#### 接合資料18(第233図、写真図版86)

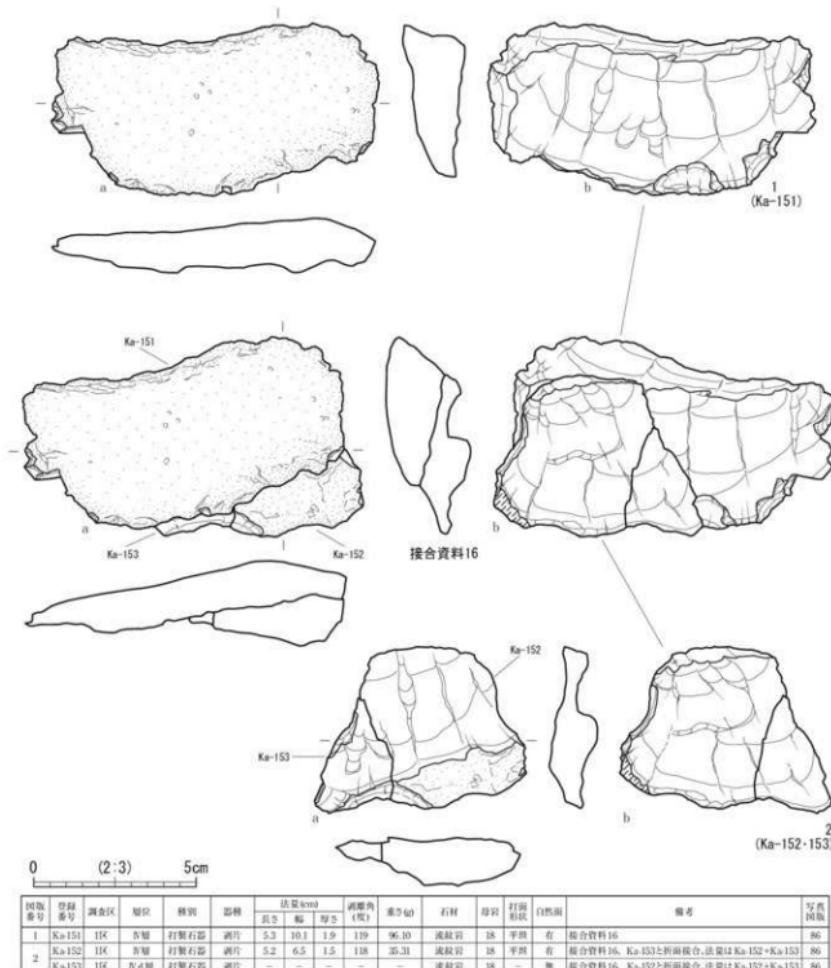
IV層から出土した二次加工のある剥片1点と剥片2点の接合資料で、a面に自然面が広く残存する。剥離面を打面として同一方向からの加撃によって連続的な剥片剥離作業が行われている。剥片剥離後、2の剥片は素材の形状を利用し、a・b両面の左右両側縁から施された剥離調整によって尖端部が作出されている。剥離調整は全面におよんでいないが、石鎚なし石錐の未完成の可能性が考えられる。石材は、黒色頁岩である。

#### 接合資料19(第233図、写真図版86)

IV層とV層から出土した剥片各1点の接合資料で、自然面を打面として同一方向からの加撃によって連続的な剥片剥離作業が行われている。共に自然面が広く残存する剥片であることから、自然面の除去が行われた可能性が考えられる。石材は、瑪瑙である。

接合資料20(第234図、写真図版86)

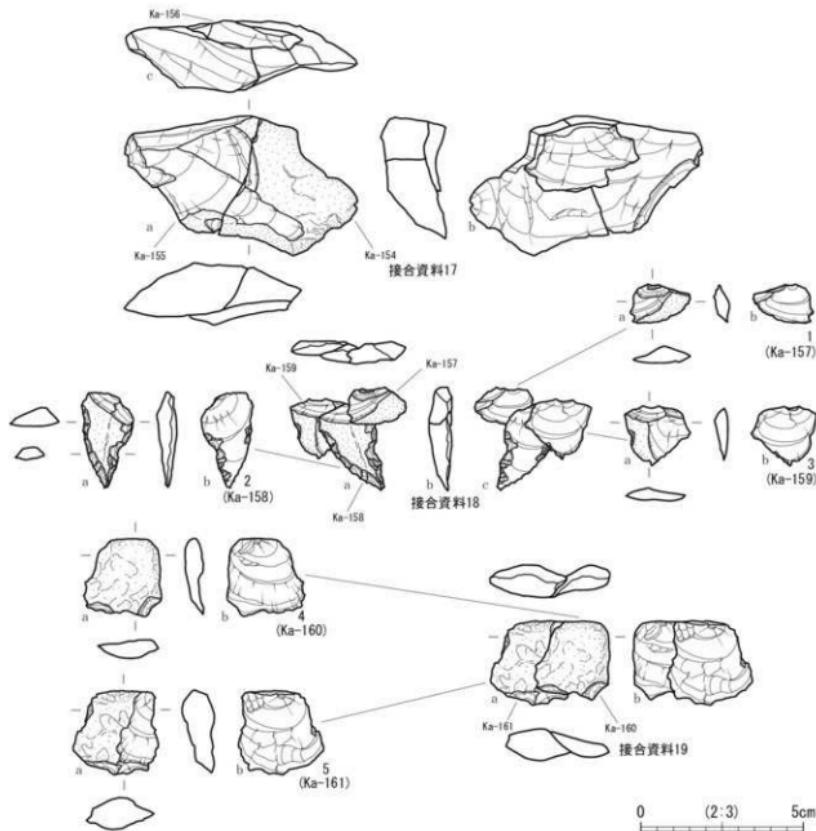
IV層から出土したスクレイパー1点の接合資料である。1と2はともに二重バティナを持ち、元々一つの縦長剥片を素材としたスクレイパーであったが、折断によって分断されている。また2では折断面を打面として剥片が剥離されているが、同時に割れを起こしている。剥片剥離は1回で終わっていることから、小型の剥片を剥離するためのものか、調整の失敗による破損と考えられる。石材は、黒色頁岩である。



第232図 接合資料(15)

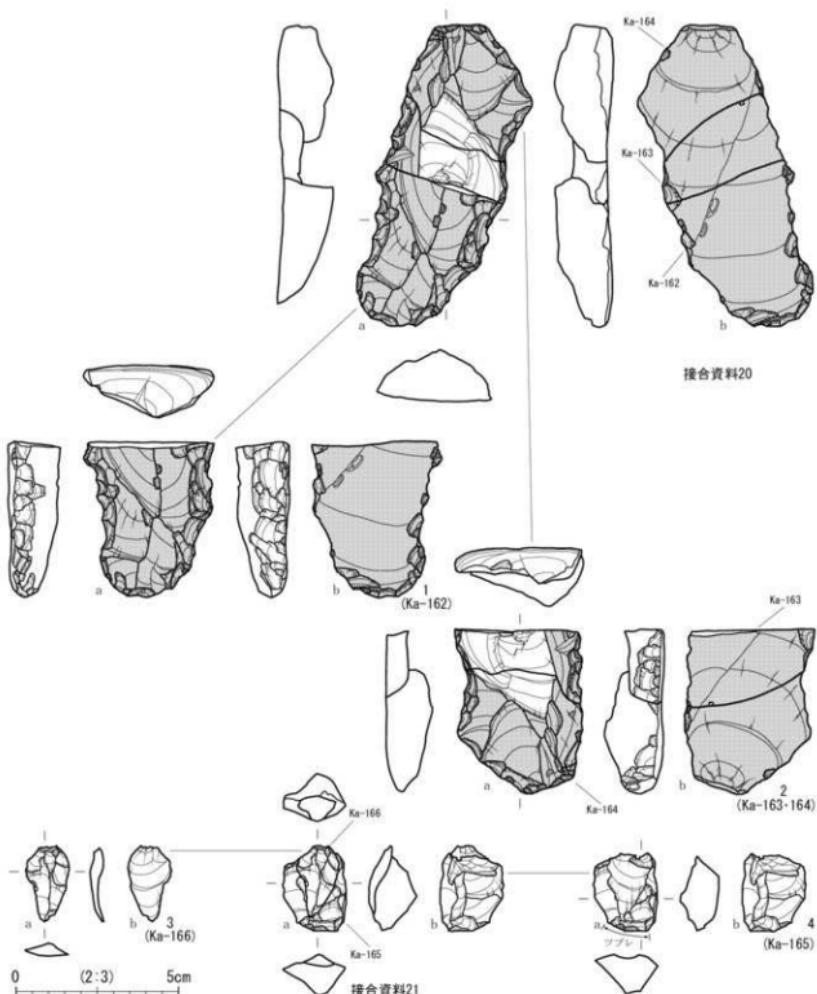
接合資料21(第234図、写真図版86)

IV層から出土したビエス・エスキュー1点と剥片1点の接合資料である。a面の上下両端縁に二次加工とツブレ状の剥離痕が認められる。両極剥離により3の剥片がスパール状に剥離され、残されたビエス・エスキュー(4)の上端部は同時剝れにより碎けている。石材は、珪化凝灰岩である。



図版 番号	登録 番号	調査区	組合	複調	器種	法量(cm)			剥離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 粗粒	自然面	備考	写真 図版
						長S	幅	厚S								
Ka154	IK	V層	打削石器	剥片	4.3	7.2	1.7	321	44.79	流板刃	12	平頭	有	接合資料17。Ka-154+5面削れ。	86	
-	Ka155	IK	B'd層	打削石器	剥片	-	-	-	-	-	流板刃	12	-	有	接合資料17。Ka-154+5面削れ。	86
Ka156	IK	B'd層	打削石器	剥片	-	-	-	-	-	流板刃	12	平頭	無	接合資料17。Ka-154+5面削れ。	86	
1	Ka157	IK	V層	打削石器	剥片	1.2	1.9	0.5	105	0.97	黑色頁岩	30	直	有	接合資料18	86
2	Ka158	IK	B'd層	次加工の あらわし片	剥片	2.9	1.6	0.6	116	2.18	黑色頁岩	30	直	有	接合資料18.右神 <sup>2</sup> 或右頭 <sup>3</sup> 未製品	86
3	Ka159	IK	B'd層	打削石器	剥片	1.8	2.0	0.4	120	0.96	黑色頁岩	30	直	有	接合資料18	86
4	Ka160	IK	B'd層	打削石器	剥片	2.4	2.4	0.6	112	2.74	麻鳴	46	自然	有	接合資料19	86
5	Ka161	IK	V層	打削石器	剥片	2.7	2.7	1.0	120	5.43	麻鳴	46	自然	有	接合資料19	86

第233図 接合資料(16)



第234図 接合資料(17)

部品 番号	登録 番号	調査区	層位	種別	器種	法量(cm)				調離角 (度)	重さ(g)	石材	母岩	打削 形状	自然面	備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ	度数								
1	Ka-162	IK	Nd層	打製石器	334.5cm~	4.8	4.0	1.6	—	32.24	黒色頁岩	32	—	無	複合資料20. a面+b面加工. 簡易縫合. 一次加工あり. 重さ↑あり	86	
	Ka-163	IK	Nd層	打製石器	334.6cm~	5.1	3.9	1.8	123	32.27	黒色頁岩	32	平坦	無	複合資料20. Ka-162と同時. Ka-163と同時. Ka-164と同時. —重さ↑あり. 法番はKa-163+Ka-164	86	
	Ka-164	IK	Nd層	打製石器	334.5cm~	—	—	—	—	—	黒色頁岩	32	—	無	複合資料20. Ka-162と同時. Ka-163と同時. Ka-164と同時. a面加工. 簡易縫合. 一次加工あり. —重さ↑あり. 法番はKa-163+Ka-164	86	
2	Ka-166	IK	Nd層	打製石器	薄片	2.3	1.3	0.4	110	0.76	珪化隕石岩	40	細	無	複合資料21. リア・アラ・アラクルス-4	86	
3	Ka-165	IK	Nd層	打製石器	2.4×3.3×3.2	2.4	1.9	1.3	—	4.83	珪化隕石岩	40	—	無	複合資料21. 縮片面素材. 1対の二次加工あり	86	
4	Ka-165	IK	Nd層	打製石器	2.4×3.3×3.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	86	

## 第6章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的

今次調査で検出された遺構や出土遺物から当時の生活を復元するためには、考古学的視点からの検討は勿論のこと、自然科学的視点からの分析・鑑定を含めたより総合的な検討が必要とされた。そのため、以下の資料について、自然科学的な分析・鑑定を実施した。

#### 1. 出土木製品類の樹種同定(本章第2節)

量的には少ないものの、遺構内等から出土した木製品類の樹種を確認し、資料化の意味も含めて樹種の利用について検討する。

#### 2. イネのプランツ・オバール分析(本章第3節)

擾乱の影響が大きい各調査区の中で、上層から下層までが比較的良好に残存していたVI区東側壁面およびVII区西側・北側壁面から土壤サンプルを採取し、遺跡内における稲作の有無について検討する。

第4章に既述しているように、本書に掲載している各調査区での発掘調査は複数年度におよんだため、一部で上位から下位へと個別に層序名を付したもののが存在した。そのため、整理段階で調査区間での対応関係を照合し、遺跡全体の基本層序として振り替えた層序名を本書では使用している。プランツ・オバール分析を実施するにあたり土壤サンプルを採取したVI・VII区においても照合・層序名の振り替えを行っているが、分析結果の報文は、振り直す以前の層序名(野外調査の段階で付されたもの)で記載されている。この対応関係については、下記の通りである。また、SI30堆積土1層に相当する4層からはイネのプランツ・オバールが検出されており、この点についての考古学的な所見についてはSI30の項(第5章第4節)に記載している。こちらも併せて参照されたい。

本章第3節における基本層序との対応関係(左:サンプル採取時 右:振り替え後の基本層序名)

VI区:3層 → IVd層	VII区:1層 → II層	7層 → V層	13層 → XII層
4層 → V層	2層 → III層	8層 → VII層	14層 → XIII層
5層 → VI層	3層 → IV層	9層 → VIII層	15層 → XIV層
6層 → VII層	4層 → SI30堆積土1層	10層 → IX層	16層 → XV層
	5層 → SI30堆積土2層	11層 → X層	17層 → XVI層
	6層 → VII層	12層 → XI層	

#### 3. 出土石器の石材鑑定

各期の遺構内や弥生時代以前の遺物包含層出土した石器の石材を鑑定することで、各器種における石材の選択性や石材による使用法等について検討する。

上記のうち、樹種同定、プランツ・オバール分析の結果については、本章次節以下に記載してある。石材鑑定の結果については、第5章に掲載した各遺物の観察表に記載した。

なお、SD31溝跡堆積土上層に堆積が認められたテフラおよび中世期に属する溝跡から出土した種実については、同定を実施していない。ただし、テフラについては、周辺遺跡の調査成果等から915年の降灰が考えられている十和田a火山灰(T-a)と推定される。

## 第2節 西台畠遺跡より出土した木製品の樹種

古代の森研究会 吉川純子

### (1) はじめに

西台畠遺跡はJR長町駅から東方約100mのところにあり、名取川と広瀬川の合流点から北西へ約2.4kmの、広瀬川によって形成された自然堤防から後背湿地に立地する。木製品を出土した遺構は中世の井戸内堆積物で、杭状加工木、桶底板、下駄の本体と歯の計4点の樹種を調査した。各試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤ガムクロラールを用いてプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察・同定を行った。

### (2) 同定結果

表1に同定結果を示し、以下に同定の基準となった記載を示す。

スギ(*Cryptomeria japonica* (Linn.fil) D.Don):早材から晩材への移行は急で晩材部が厚く、晩材部に黒い樹脂細胞が認められる。接線断面と放射断面でも樹脂が顯著である。分野壁孔はスギ型で横に長い指円形となるが本試料では保存が悪かった。

クリまたはコナラ属(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. and/or *Quercus*):年輪のはじめに大きな道管が1-2列集合し、その外側に小管孔が配列する環孔材であるが、試料の保存が悪く一部が変形しているため配列の形状が不明である。道管の穿孔孔は單一で放射組織は同性であり、観察できる範囲では単列の放射組織だけしか認められないため、クリの可能性が高い。

ブナ属(*Fagus*):小さい管孔が密に分布し、晩材部では径を減じる散孔材で年輪界は明瞭。穿孔孔は單一と階段状がある。放射組織は異性ぎみで1-数細胞幅の小さいものと数十細胞幅の大きい放射組織が混在する。

表1 西台畠遺跡中世出土木製品の樹種

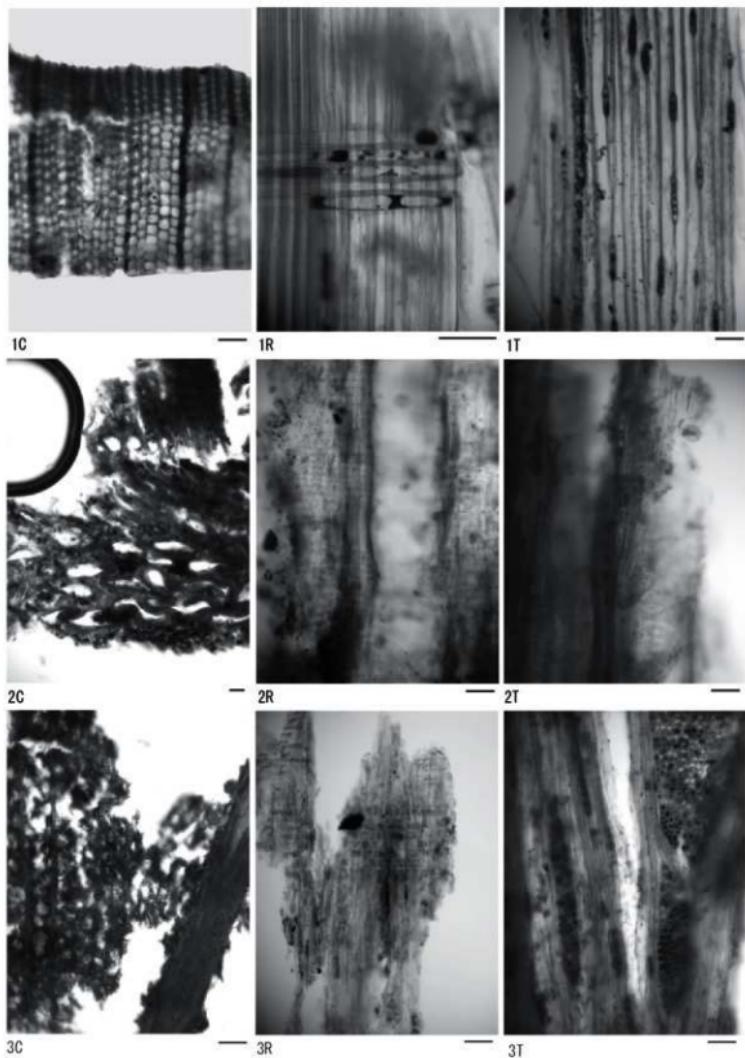
遺物番号	層位	遺構	製品名	樹種
L001	堆積土	井戸SE1	先端炭化杭状木片	クリまたはコナラ属
L002	9層	井戸SE2	桶底板	スギ
L003a	擾乱	中央部	下駄歯	ブナ属
L003b	擾乱	中央部	下駄本体	ブナ属

### (3) 木材利用

本遺跡で確認されたスギ、クリまたはコナラ属、ブナ属はいずれも8世紀以降の東北における利用頻度が高い用材傾向(山田1993)と一致している。桶底板のスギは曲物が増加する8世紀以降に東北で頻繁に利用されるようになる。下駄材として確認されたブナ属は耐久性が低いため建築材などには利用されないが8世紀以降の東北ではおもに梶材として頻繁に利用され、下駄材とくに歯材としては現在でもしばしば緻密で堅いブナが使用されている(伊東1995)。クリ、コナラ属は東北の縄文時代以降土木材などとして継続して高頻度で利用されている。

### 引用文献

- 伊東隆夫. 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載. 京都大学木質科学研究所「木材研究・資料」第31号別刷.  
山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史. 「植生史研究」特別第1号.



第235図 西台畠遺跡出土木製品の顕微鏡写真(スケールは0.1mm)  
 1.スギ(井戸SE01 桶底板) 2.クリまたはコナラ属(井戸SE02 杖状木片) 3.ブナ属(中央部 下駄歯),  
 C:横断面,R:放射断面,T:接線断面

### 第3節 仙台市西台畠遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

#### (1) はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸( $\text{SiO}_2$ )が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、西台畠遺跡において採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の可能性について検討を行う。

#### (2) 試料

調査地点は、VI区とVII区の2調査区である。各調査区の土層は、VI区では、上位より黄褐色粘質シルト(1層)、灰色粘質シルト(2層)、褐灰色粘質シルト(3層)、黒色粘質シルト(弥生時代、4層)、黄灰色粘質シルト(5層)、黄灰色粘質シルト(6層)である。VII区では、上位より暗灰黄色砂質シルト(1層)、黒褐色シルト(2層)、灰黃褐色シルト(古代、3層)、黒褐色シルト(古代、4層)、黒褐色シルト(5層)、黄褐色砂質シルト(6層)、黒褐色粘土質シルト(7層)、灰色粘土質シルト(8層)、灰オリーブ色砂質シルト(9層)、灰オリーブ色粘土質シルト(10層)、黒褐色粘土質シルト(弥生時代、11層)、灰色粘土質シルト(12層)である。

調査の対象となった層準は、VI区では1層～6層(いずれも東壁より採取)、VII区では1層、2層、4層～12層(西壁より採取)および3層(北壁で採取)である。

#### (3) 分析

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料上の絶乾(105°C・24時間)
- 2) 試料上約1gを秤量、ガラスピース添加(直径約40 μm、約0.02g)  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める)を換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: $10^{-3}\text{ g}$ )を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネ(赤米)は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、スキ属(スキ)は1.24、ネザサ節(シマザサ節・チマキザサ節)は0.75である。

#### (4) 分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族(スキ属型)、シバ属、タケ亞科(ネザサ節型、クマザサ属型、その他)の分類群のプラント・オパールが同定された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、第236図～第239図に示した。なお、主要な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

#### (5) 考察

##### a. 稲作の可能性について

水田の調査(探査あるいは検証)では、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合、稲作跡である可能性が高いと判断される。ただし、仙台市周辺ではこれまでの調査に置いて密度が3,000個/g程度であっても水田遺構が検出された例があることから、ここでは判断基準を3,000個/gとした。また、当該層においてプラント・オパール密度にピークが認められれば、上層からの混入の危険性は考えにくくないことから、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを見ると、稲作の可能性について検討を行う。

##### 1) VI区

当調査区では、1層～6層について分析を行ったところ、イネのプラント・オパールはいずれの層からも検出されなかった。したがって、これらの層においては稲作が行われていた可能性は考えにくい。

##### 2) VII区

当調査区では、1層～12層について分析を行った。その結果、1層、2層、3層および4層よりイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1層と2層ではプラント・オパール密度が3,000個/g程度と高い値である。また、4層では6,800個/gと非常に高い値でありピークとなっている。したがって、これらの層においては稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、3層については密度が700個/gと低いことから、ここで稲作が行われていた可能性を否定することはできないが、他所からの混入とみる方が妥当であろう。

##### b. その他の農耕について

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネの他にオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズタマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクヒエが含まれる)およびモロコシ属(モロコシが含まれる)などがある。本遺跡ではこれらの分類群はいずれの試料からもまったく検出されなかった。したがって、本遺跡ではイネ以外にはイネ科の穀類の栽培された可能性は認められない。ただし、イネ科植物の中には未検討のものもあるため、未分類としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、プラント・オパール分析で同定が可能なものは多くがイネ科の草本植物であることから、マメ類、イモ類および野菜類などは分析の対象外である。

#### (6)まとめ

西台畠遺跡において採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、VI区の1層、2層および4層よりイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、これらの層において稲作が営まれていた可能性が認められた。なお、VII区についてはいずれの試料からもイネのプラント・オパールは検出されず稲作が行われた痕跡は認められなかった。また、稲作以外の農耕については確認することはできなかった。

## 参考文献

- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞圧縮体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追及のための基礎資料として、考古学と自然科学,20:80-92.
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の硅穀体標本と定量分析法-,考古学と自然科学,9:15-29.
- 藤原宏志(1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産量の推定-,考古学と自然科学,12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-,考古学と自然科学,17:73-85.

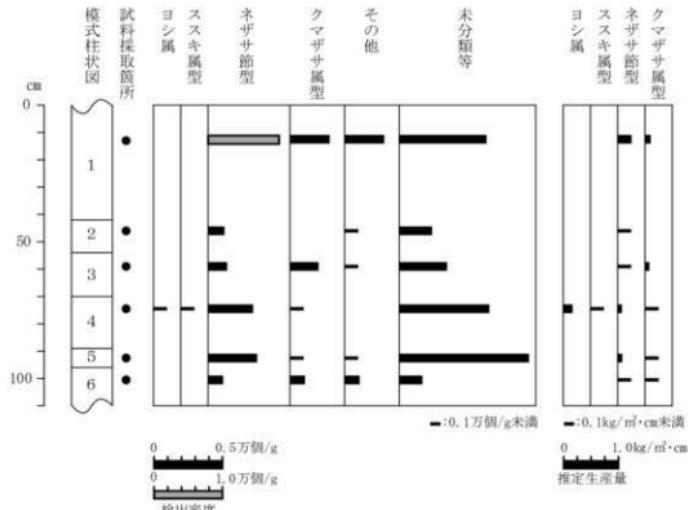
表1 仙台市、西台畠遺跡のプラント・オパール分析結果  
検出密度(単位:×100個/g)

分類群(和名・学名)	試料	西区						東区						北里						
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	3
イネ科	Gramineae (Grasses)							29	29	68										7
イネ	<i>Oryza sativa</i>							6	6	10										6
ヨシ属	<i>Phragmites</i>							6	12	10										7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type							6	6	6										6
シバ属	<i>Zizaniopsis</i>							6	6	6										5
ケバ草科	Bambusoideae (Bamboo)																			
ネギサ属型	<i>Pleisostachys</i> sect. <i>Nezasa</i> type	107	12	14	33	36	11	41	14	39	7	32	41	4	13	90	227	51		
ネギサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	29		21	6	6	11	6	7	19	14		6	9	13		14			
その他	Others	29	6	7	6	11	12	7	10	13	6	4				5				15
未分類等	Unknown	64	20	35	66	95	17	58	64	213	75	25	79	36	43	19	53	64	51	
プラント・オパール総数		229	42	77	117	143	50	170	121	369	96	70	129	53	43	51	148	305	131	

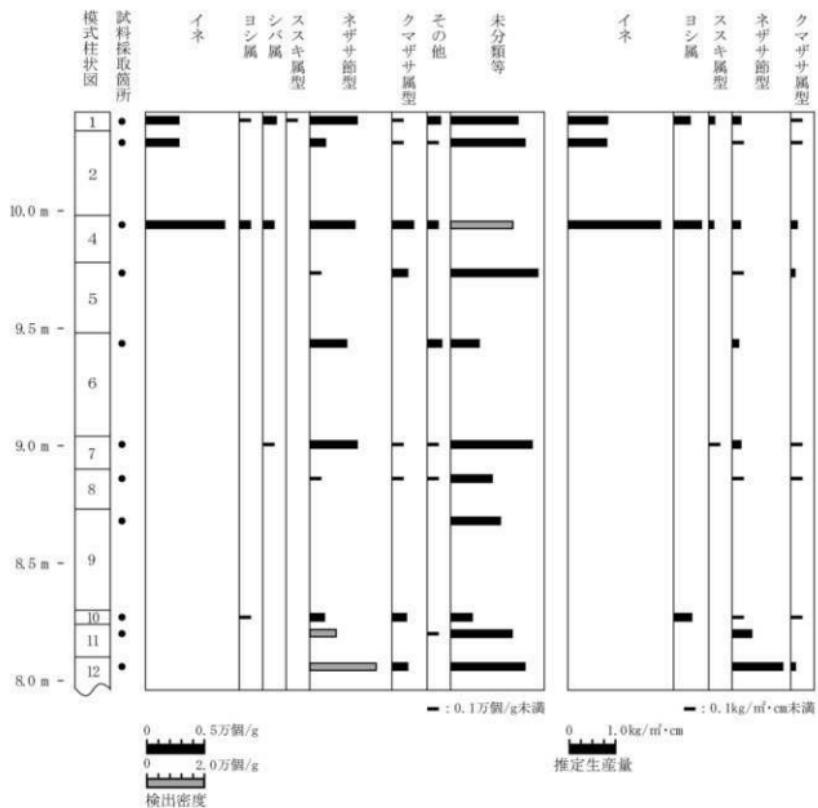
おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m<sup>2</sup>・cm)

	<i>Oryza sativa</i>																		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>							0.35		0.37	0.61					0.40			0.21
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type							0.07		0.14	0.12								0.09
ネギサ属型	<i>Pleisostachys</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.51	0.06	0.07	0.16	0.17	0.06	0.20	0.07	0.19	0.03	0.15	0.20	0.02	0.06	0.43	1.09	0.25	
ネギサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.21	0.16	0.04	0.04	0.08	0.04	0.05	0.15	0.10	0.04	0.07	0.04	0.09	0.09	0.11			

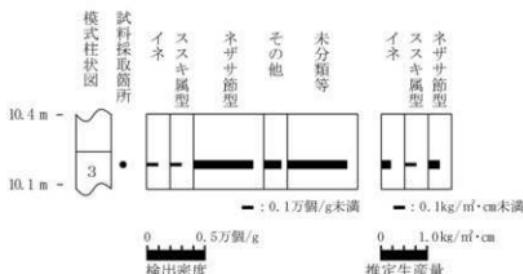
※試料の恢復度を1.0と仮定して算出



第236図 西台畠遺跡VI区東壁のプラント・オパール分析結果



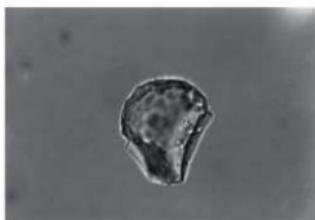
第237図 西台烟遺跡VII区西壁のプラント・オパール分析結果



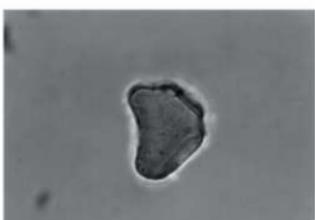
第238図 西台烟遺跡VII区北壁のプラント・オパール分析結果



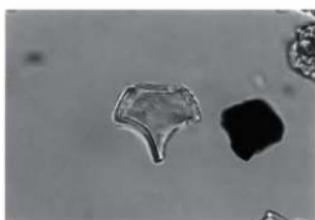
No. 1



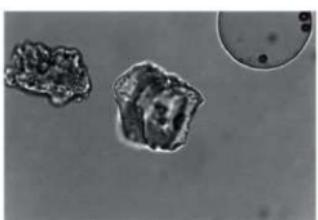
No. 2



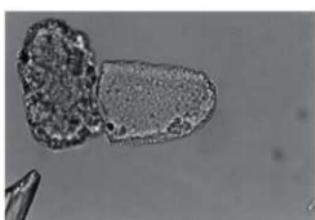
No. 3



No. 4



No. 5



No. 6

0 100  $\mu\text{m}$

No.	分類群	地點	試料名
1	イネ科	VII区西壁	2層
2	イネ科	VII区西壁	4層
3	ウシクサ族 (ススキ属)	VII区西壁	4層
4	シバ属	VII区西壁	1層
5	タケ亜科 (ネザサ節型)	VI区東壁	5層
6	タケ亜科 (クマザサ属型)	VII区西壁	3層

第239図 植物珪酸体(プラント・オバール)の顕微鏡写真

## 第7章 まとめ

仙台市あすと長町土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成10(1998)年から主に道路計画部分を対象に開始し、これまでに西台畠遺跡(平成10～13(1998～2001)・17(2005)・19(2007)年度)、郡山遺跡(平成13(2001)・16～18(2004～2006)・20(2008)・21(2009)年度)、長町駅東遺跡(平成13～21(2001～2009)年度)の発掘調査が行われている。

西台畠遺跡の調査では、総数140軒程の堅穴住居跡のなかで、堅穴住居跡の配置や構造に一定の規格を持った区域があることが想定されるほか、平成10年の今次調査では、Ⅱ期官衙外郭大溝のさらに外側に配置された外溝(西辺)が初めて発見された。

郡山遺跡の調査では、平成13年の第144次調査で、L字形に延びる溝跡が発見されている。この溝跡は、Ⅰ期官衙西辺の推定ラインから西75mに位置し、南北方向に延びる部分では推定ラインに平行している。Ⅰ期官衙に関連する施設か、官衙周辺の土地割りに伴う施設と考えられる。また、平成16・17年の第167次調査では、約30軒の堅穴住居跡と外溝の北西コーナー部と北辺が発見され、同時期に国庫補助事業による第166次調査で発見された東辺とともに、これまで南辺と西辺で発見されていた外溝が官衙の全域を囲んでいることが明らかになった。これにより、官衙は内部の建物を遮蔽する材木列と大溝により区画され、さらにその外側に外溝を配置する構造であることが確認され、官衙造営時の設計思想などからⅡ期官衙の年代や性格を考える上で重要な発見となっている。

長町駅東遺跡の調査では、総数300軒以上の堅穴住居跡が発見されており、集落の区画施設と考えられる区画溝跡と材木列、これに先行して造られた一本柱列が確認され、集落の構造が明らかになってきている。

調査を開始して12年が経過し、郡山遺跡の官衙の構造に関わるような遺構の発見だけでなく、官衙の西側に大規模な関連集落が形成され、官衙の成立と共に発展し、官衙の機能が終焉を迎えるのに合わせるように衰退していく状況が明らかになってきた。

西台畠遺跡の調査成果について、ここでは、平面形や規模、カマド構造などからみた堅穴住居跡の構造と、遺構の重複状況や出土遺物から堅穴住居跡の変遷について検討を行っている。また、西台畠遺跡と長町駅東遺跡の二つの集落の性格について、区画施設や遺構配置などの面から検討を行っている。

下層から検出された弥生時代中期の遺構・遺物に関する調査成果については、今後の整理の中でさらに検討していきたいが、今回は出土遺物(土器・打製石器)について整理し、まとめとしたい。

### 第1節 古代の遺構について(第240～246図)

#### (1) 堅穴住居跡について(第240～242図)

堅穴住居跡はⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ区から35軒(堅穴遺構3基を除く)が検出された。これらの堅穴住居跡の構造に関わる属性を整理し、一覧表にまとめた。調査区が狭長であることや、他遺構との重複や搅乱の影響などから全体が検出されたものは数軒に留まるものの、平面形状・規模・床面標高・軸方位・カマドの特徴について、以下に述べる。

##### a. 平面形状・規模(第240図)

35軒のうち、平面形状が判るもの、或いは推定できるものは29軒であり、このうち、方形ないし隅丸方形を呈するものが23軒、(隅丸)長方形を呈するもの、或いはその可能性のあるものが4軒、不明なものが8軒である。この中で、規模が判るもの3軒、残存する1辺から推定が可能な13軒の規模を第240図左側に示した。なお、平面形状の判るものの大半が方形ないし隅丸方形を呈することから、一辺のみが残存するものは方形を呈するものと推定し、破線で示した。その結果、今次調査で検出された堅穴住居跡の規模は、1辺4～4.5m前後(凡そ2.5間)、5～5.5m前後(凡そ3間)、6～6.6m前後(凡そ3.5間)に三大別される。

西台畠跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ区 豊穴住居跡一覧表

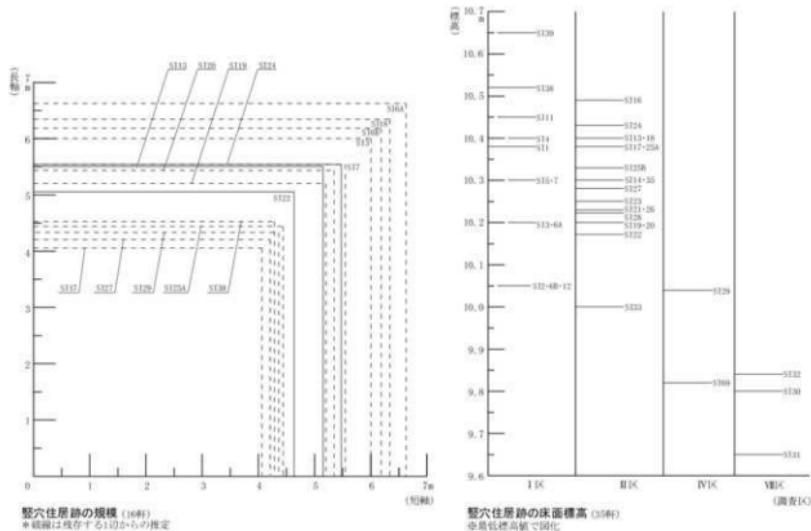
住居番号	調査区	P'9(?)	平面形・規格	輪方位			カマツ			壁道部			その他の施設	時間区分	備考	
				平面形状	長軸・短軸 [cm]	床面標高 [m]	方位	算出基準	建設位置	燃焼基 底部	燃焼基 側面	長さ [cm]	成面	壁道部 下部		
SII	Ⅹ区	H-2	圓丸方形	(460)×(140)	10.35～ 10.28	N-45°W	東南	-	-	-	-	-	-	なし	3	遺物なし
SII	Ⅹ区	H-14	圓丸方形	(425)×(300)	10.0～ 10.2	N-6°W	#17° 燃焼部	北壁	内	南	140	下る	ビン状	土坑1基	2	支脚1対 (右方に加工痕あり)
SII	Ⅹ区	H-13-4	圓丸方形	600×502	10.15～ 10.20	N-10°W	#17° 燃焼部	北壁中央	内	なし	96	平坦	やや 傾む	なし	3	
SII	Ⅹ区	H-3	圓丸方形?	(360)×(250)	10.35～ 10.40	N-35°W	東南	-	-	-	-	-	-	なし	2	
SII	Ⅹ区	H-3	方形or 圓丸方形?	(280)×(230)	10.28～ 10.30	N-35°W	東南	-	-	-	-	-	-	土坑2基	3	
SIII-A	Ⅹ区	H-2-3	-	662×(53)	10.04～ 10.20	N-1°E	東南	-	-	-	-	-	-	なし	4	
SIII-B	Ⅹ区	H-2-3	-	6181×(74)	9.95～ 10.00	N-4°E	東南	-	-	-	-	-	-	なし	3	
SII	Ⅹ区	H-14	方形or 圓丸方形?	(286)×554	10.25～ 10.30	N-29°W	西壁	北壁中央	内	なし	-	-	-	なし	2	
SIII	Ⅹ区	I-3	-	(215)×(85)	10.45	N-26°E	西壁	-	-	-	-	-	-	不明 (在存状況なし)		
SIII	Ⅹ区	H-13-4	方形or 圓丸方形?	(537)×(463)	9.95～ 10.05	N-74°E	南壁	-	-	-	-	-	-	なし	1	SII下邊より検出
SIII	Ⅹ区	F-1	圓丸方形	550×515	10.38～ 10.40	N-7°E	#17° 燃焼部	北壁中央	内	南	(140)	下る	ビン状	PH (左壁・周辺)	3	支脚1対 (右方に加工痕あり)
SIII	Ⅹ区	E-1-1	圓丸方形?	(302)×(500)	10.25～ 10.30	N-12°W	東南	-	-	-	-	-	-	なし	4	
SIII	Ⅹ区	F-1	-	(60)×(23)	-	N-88°E	南壁	-	-	-	-	-	-	なし	不明 (形外遺構、遺存状況なし)	
SIII	Ⅹ区	F-1	方形or 圓丸方形?	(475)×(210)	10.42～ 10.49	N-17°W	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	2 or 3	表面に散熱網理あり
SIII	Ⅹ区	F-1	圓丸方形	405×(193)	10.20～ 10.38	N-5°E	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	4	
SIII	Ⅹ区	F-1-2	圓丸方形?	634×(260)	10.35～ 10.40	N-9°W	#17°	北壁中央	内	なし (端山)	-	-	PH-9 (右壁・周辺)	3		
SIII	Ⅹ区	F-1-2	-	520×(76)	10.12～ 10.20	N-0°E-W	東南	-	-	-	-	-	-	なし	3	
SIII	Ⅹ区	F-1	圓丸方形?	543×(515)	10.15～ 10.20	N-0°E-W	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	2 or 3	
SIII	Ⅹ区	F-2	圓丸方形?	(117)×(51)	10.29～ 10.23	N-4°W	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	不明 (在存状況なし)	
SIII	Ⅹ区	F-2	圓丸方形?	505×463	10.12～ 10.37	N-0°E-W	#17° 燃焼部	北壁中央	外	なし	151	下る	ビン状	なし	4	
SIII	Ⅹ区	F-2	圓丸方形?	(456)×(65)	10.25	N-8°E	#17° 燃焼部	北壁	-	-	(110)	下る	ビン状	なし	4	
SIII	Ⅹ区	F-2	圓丸方形?	555×477	10.30～ 10.43	N-10°W	#17° 燃焼部	#17° 1 北壁 #17° 2 中央 #17° 3 東壁	内	なし	(80)	下る	ビン状	なし	3	#17° 3基検出
SIII	Ⅹ区	F-2	圓丸方形?	444×(80)	10.35～ 10.38	N-3°E	#17° 燃焼部	北壁西側	内	-	(80)	平坦化(ビンの 込みあり)	ビン状	なし	3	
SIII	Ⅹ区	F-2	-	(239)×(204)	10.23	N-71°E	北壁	-	-	-	-	-	-	なし	3	
SIII	Ⅹ区	F-2-3	方形or 圓丸方形?	(295)×(253)	10.23	N-3°E	#17° 燃焼部	北壁	内	なし	115	下る	ビン状	なし	4	
SIII	Ⅹ区	F-2-3	方形or 圓丸方形?	430×(235)	10.23～ 10.28	N-5°E	#17°	北壁	内	なし	-	-	PH-1 (右壁・周辺)	4		
SIII	Ⅹ区	F-2	-	(180)×(60)	10.22	-	-	-	-	-	-	-	-	なし	2	遺存状況なし
SIII	Ⅹ区	G-118	方形or 圓丸方形?	433×(216)	10.00～ 10.04	N-70°E	#17°	東南	内	磚 土器器皿	(130)	平坦	PH-6 (右壁・周辺)	4	土器器皿(右壁 付近)有り	
SIII	Ⅹ区	D-11	-	(184)×(75)	9.8	N-10°E	西壁	-	-	-	-	-	-	不明 (在存状況なし、 遺物なし)		
SIII	Ⅹ区	D-11	方形or 圓丸方形?	(328)×(172)	9.60～ 9.65	N-64°W	#17° 燃焼部	西壁	やや外	なし	140	下る	甲頭	なし	2 or 3	
SIII	Ⅹ区	C-10-11	方形or 圓丸方形?	(240)×(143)	9.80～ 9.84	N-32°E	#17° 燃焼部	北壁	内	なし	160	下る	ビン状	なし	2	
SIII	Ⅹ区	F-4	方形or 圓丸方形?	(680)×(40)	9.98～ 10.00	N-42°W	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	3	
SIII	Ⅹ区	F-4	方形or 圓丸方形?	(286)×(286)	10.27～ 10.30	N-63°E	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	3	
SIII	Ⅹ区	F-4	圓丸方形?	250×244	9.87～ 9.95	N-6°W	東南	-	-	-	-	-	-	なし	4	豊穴通路
SIII	Ⅹ区	H-0	圓丸方形?	546×(128)	10.18～ 10.25	N-6°W	西壁	-	-	-	-	-	-	なし	1	豊穴通路
SIII	Ⅹ区	H-0-1	圓丸方形?	(452)×(424)	10.42～ 10.52	N-0°E-W	東南	-	-	-	-	-	-	土坑水槽(左壁 付近)有り	3	
SIII	Ⅹ区	H-0-1	方形or 圓丸方形?	(655)×(321)	10.45～ 10.65	N-73°W	南壁	-	-	-	-	-	-	横仕切溝(左壁 付近)	1	
SIII	Ⅹ区	H-8	-	(130)×(113)	9.81	N-34°E	#17° 燃焼部	北壁	-	-	125	南半:平坦 北半:下る	なし	2		

\*輪方位の算出基準、壁面の呼称については凡例を参照のこと。

\*カマツ燃焼部位置は、壁面の内側に堆積されたもの(内壁)。(注)全体が壁面の外側に張り出すものを「外」、壁面の外側にやや張り出すものを「やや外」と表記した。

\*カマツ燃焼部底面(下る)の表現は、燃焼し部分を指す。

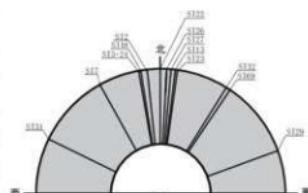
次に、35軒の床面標高値を第240図右側に示した。多くの堅穴住居跡が検出され、近接して位置するI区中央部・南半部およびII区から検出されたものについては、床面標高値に大きな差は認められず、概ね10.2～10.3mと10.4～10.5mの範囲内に収まるものが多い一方で、遺跡北東部に位置するI区の北端部から検出されたSI38・39の床面標高値は比較的高く、遺跡中央部に位置するIV区から検出されたSI29・69、遺跡南部に位置するVII区から検出されたSI30～32の床面標高値は低くなる傾向が読み取れる。この点については、各調査区壁面での土層断面観察から、遺跡北側の標高が高く南側が低いという地形的な高低差が認められることから、当時の地形的な影響に起因するものと考えられる。



第240図 堅穴住居跡の規模(左)と床面標高(右)

#### b. 軸方位(第241図)

軸方位は、カマド煙道部ないし燃焼部の残存するものはカマドを基準とし、カマドの残存しないものについては残存する長辺を基に算出した(凡例参照)。このうち、第241図に示したカマドの残存する15軒の軸方位については、真北からやや西に傾くもの(N-6°～W)、真北ないし真北からやや東に傾くもの(N-0°～8°-E)と、真北に近い方向に軸を持つものが多いことがみてとれる。少数例として、真北から東に傾くもの(N-32°～34°-E)、真北から西に傾くもの(N-29°-W)、東西方向に軸を持つもの(N-64°-W、N-72°-E)が認められる。

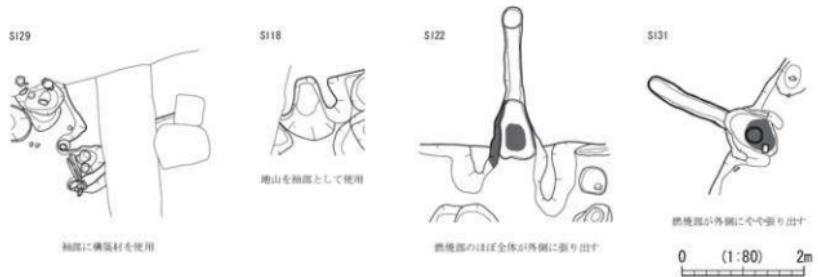


第241図 堅穴住居跡の軸方位

(カマドが残存するもの)

#### c. カマド(第242図)

カマドは15軒から計17基が検出された。造り替えが行われているのは1軒(SI24)のみで、3基のカマドが検出さ



第242図 カマドの構造

れた。これらのカマドは、搅乱や他遺構との重複により燃焼部もしくは煙道部のみが残存するものが多く、全体が残存しているものは少ない。

以下では、付設位置をはじめとする袖部・燃焼部・煙道部・煙出し部の構造について、個別に述べる。

**付設位置:**北壁のものが15基と大半を占め、この他に東壁に付設されるものが1基(SI29)、西壁に付設されるものが1基(SI31)存在する。これらの多くが壁面の中央部に付設されるが、北壁の中央から東西に寄った位置に付設されるもの(SI7、SI24カマド1・3、SI25A)も検出されている。

**袖部:**大部分が盛土によるもので、1基のみ地山(基本層IV層)を直接使用しているものがある(SI18)。盛土によるものの中には、芯材として自然礫や敲石、土師器壺などが用いられているものが3基(SI2・13・29)認められる(第242図)。そのうち2基(SI2・29)では複数の芯材を積み上げて使用していることから、両袖部上面が同じ高さに調整されたものと考えられる。

**燃焼部:**壁面の内側に付設されるものが13基と大半を占め、このほかに、ほぼ全体が外側に張り出すものが1基(SI22)、やや張り出すものが1基(SI31)検出されている(第242図)。燃焼部が張り出すタイプのカマドは関東地方に多くみられる形態であり、南西に隣接する長町駅東遺跡からは、これまでに同様のタイプのカマドが3例報告されている(仙台市教委2007・2008a・2009a)。

**煙道部:**SI18を除く全てのカマドで検出された。搅乱や他遺構との重複から全体が残存するものは7基に留まるが、中でもSI3は地下式の煙道部が崩落せずに残存していた。煙出し部を含めた全長は、1m未満のもの(SI3)、1~1.5mのもの(SI2・26・31・69)、1.5mを超えるもの(SI21・32)に三大別される。なお、全体が検出されなかつものについては、残存長が1mを超えるものが大半を占める。これらについては、全長1~1.5mの範囲に収まるものが殆どであると推測される。

底面の形状は、煙出し部に向かって緩やかに下るものが大半を占める。このほかに底面が平坦に構築されているものが3基検出され、そのうち1基(SI25A)にはピット状の浅い窪みが伴う。

**煙出し部:**ピット状を呈するものが大半を占めるが、この他にやや窪むものが1基(SI3)、煙道部の途中から直線的に下るものが1基(SI69)、ほぼ平坦なものが1基(SI31)検出されている。

#### d.柱穴

柱穴については、壁面より約1~1.5m内側に4本の主柱穴が方形に位置するものが大半を占め、このほかに主柱穴が壁面コーナー付近に位置するものが1軒(SI26)検出されている。また、4本の主柱穴に加え、床面中央部に3基の柱穴が直線的に並ぶように位置するものが1軒(SI24)検出されており、これについては、補助的な柱穴に相当

する可能性、或いはいずれかが主柱穴として加わる可能性が考えられる。このほか、周溝内に壁柱穴と考えられるピットを持つものが1軒(SI17)検出されている。なお、棟持柱構造のものは確認されていない。

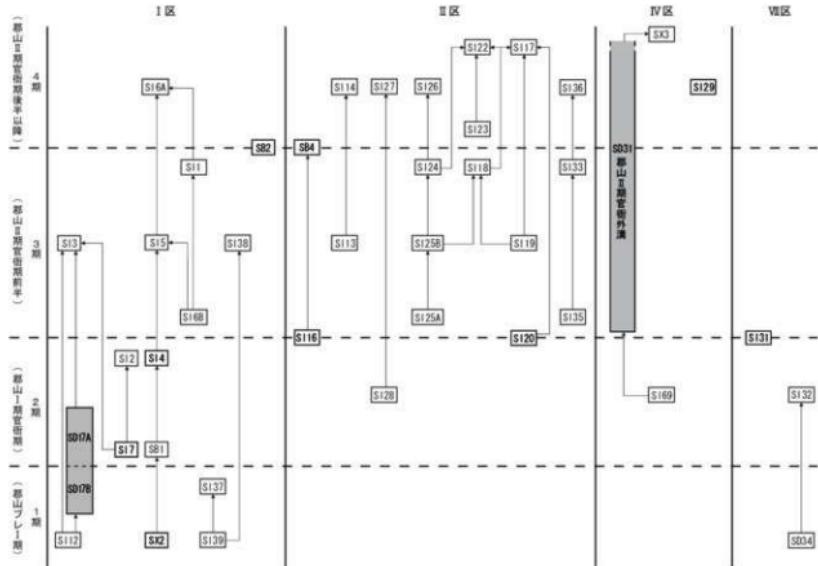
#### e. その他の施設

竪穴住居跡に伴う施設としては、間仕切り溝をもつものが1軒(SI39)検出されたほか、土坑状の掘り込みを持つものが多く、位置や堆積土の状況からカマドに関連する施設と考えられるもの、或いはその可能性が考えられるものが5軒から検出されている(SI13・18・27・29・38)。

#### (2) 遺構重複状況(第243～245図)

前述した竪穴住居跡の構造に関する特徴・傾向を基に、今次調査にて検出された古代の所産と考えられる遺構群である、竪穴住居跡38軒(竪穴遺構3基を含む)、掘立柱建物跡3棟、溝跡28条(区画施設と考えられる溝跡2条を含む)、土坑5基、ピット46基、性格不明遺構2基の変遷について述べる。これらの遺構群は、出土遺物などの検討から4期に大別され、竪穴住居跡については建て替えを含めると細別9期にわたる変遷が認められた。第243図には、主な遺構の重複関係と時期幅、第244図(左)には各期竪穴住居跡の軸方位(カマドの残存するもの)、同図(右)には軸方位と郡山II期官衙区画施設との位置関係、第245図(左)には各期竪穴住居跡の規模、同図(右)には床面標高を示した。

以下に各期の概要を述べるが、2期終末ないし3期初頭に帰属すると考えられる竪穴住居跡3軒(SI16・20・31)については、文図中において古い時期(2期)に含めた。なお、文図中には参考までに郡山遺跡における時期区分(仙台市教委2005)を併記している。



第243図 遺構重複関係図